大魔道士ハルケギニアへ行く

灰汁人

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かなり前に書き殴ったまま放置していたハードディスクの肥やしです。

とある不幸な出来事から少しやさぐれ掛けているポップと原作より少し拗らせているルイズが何やかんやして仲良くなれるかも知れないけど恋愛関係には発展しません。

無双を期待した方にはすみませんが、本作ポップは師匠ポジなのでほとんど活躍しませんし、どちらかと言えばルイズの成長物語のつもりで書いています。

目　次

〔何やかやあってファーストキスは交わされませんでした〕――1
〔本作ポップのレベルは５６ですが、平均的なギーシュのレベルはどれくらいでしょうか？〕――16
〔憂鬱な里帰り　前編〕――38
〔授業の準備と報告〕――48
〔憂鬱な里帰り　後編〕――56
〔ヴァリエール家の晩餐〕――69
〔ちいねえさま〕――78
〔学院への帰還と二つの決闘騒ぎ〕――86
〔二人で街ぶら、デートにあらず〕――95
〔雪風の考察〕――104
〔土くれのフーケ〕――114
〔ゼロから踏み出す第一歩〕――117
〔これにて一段落〕――134

〔何やかやあってファーストキスは交わされませんでした〕

「でもまあ、悪くは無いな……お前と一緒ならよ」

目の前に迫る確実な死を平然と受け入れ嘯いた彼は本心からそう思っていた。

それまでの人生より長く感じられた3ヶ月、何をやっても長続きせず誇れるものも守るものなく無駄に時を過ごすような生き方をしていた自分が手に入れた宝石のような時間、数え切れないくらいに未練はあるが満足もしている。

「ポップ……御免」

「へ？」

だからその言葉は裏切り、そして相棒の覚悟を見抜けなかった自分への後悔と怒りの記憶、今ならいくらでも思いつく対処法がどうして一つも浮かばなかったのかと思い返す度に後悔と自己嫌悪が心を苛む。

驚きに問い返す間もなく軽い蹴りであっさりと弾き飛ばされ、生死を共にすると誓った親友の遠退く姿を見上げて絶望と無力感に包まれながら地上に落下した彼は、地上を救った勇者の仲間と言う不本意な栄誉を手にする事となる。

未だ残る魔王軍の影に脅かされる人々の願いを聞き入れ、親友を探す旅の合い間に魔物を倒し人々を救う日々が半年ばかり過ぎた頃、人々の都合で英雄に祭り上げられた少年は人間でありながら魔王と呼ばれるようになっていた。

そんな不名誉な通称で呼ばれるようになった原因は、ダイの養父である鬼面道士ブラスを初めとする人間に友好的な魔物らが住む孤島デルムリン島を襲った自称勇者の青年が率いるパーティー全員に瀕死の重傷を負わせ、逆に青年らの所属していた組織を襲撃して拠点にしていた町ごと廃墟にした事件である。

最後の理性が働いたのか死者こそ出しはしなかったが、人間の守護

者であるはずの英雄が魔物退治に来た勇者志望の青年を倒し、それだけに留まらず拠点としていた町を襲い焼き払ったと言う事件は、虚実を交えた噂として世界を駆け巡り、彼の恩師や元の仲間が聞き付けるまでそう長い時間は掛からなかった。

心配する仲間に状況が落ち着くまで世界を回ると答え、最後まで同行しようとしていた二人の少女に親友の帰る場所を守るよう頼んで放浪の旅に出た。

目的地は破邪の洞窟、魔界にまで通じているとも言われる数多の魔物が潜む試練の地、歴戦の勇者ですら死を覚悟するダンジョンに非力な魔法使いが独りで挑むのは無謀の極みだったが、洞窟の奥に眠るとされる失われた知識や呪文の中に親友を探す方法やその手掛かりがあるのではと淡い希望を抱いたからである。

＊

様々な荷物が詰め込まれた背負いカバンと2人の師から譲り受けた書物、復興後カール国王となったアバンが書き下ろし弟子に配った新装版アバンの書とそれに妙な対抗意識を燃やした大魔道士マトリフが持てる知識の全てを費やして編纂したマトリフの書を携え、魔物と戦いながら探索を行い持ち込んだ食料が尽きれば補給と休養に戻る日々の繰り返し、未踏の階層にあるかどうかも知れない希望を求めるポップは、自身の幸せから逃げるかのように孤独な日々を過ごしていた。

破邪の洞窟に挑み続けて2ヶ月半、現在地は尊敬する恩師の記録すら超える地下172階、地上では見られない凶悪なモンスターが跋扈する危険な場所でもポップに諦めようとする気配は見えない。

積み重ねた実戦経験と蓄えた知識を駆使し、時には地形や相手の性質すら利用した幅広い戦術で強力な魔物を翻弄しながら、最小限の戦闘で群がる敵を倒し探索する。

「自己犠牲呪文（メガンテ）！」

「やっ、やべぇ！」

焦りの声を上げるが既に手遅れ、不意に現れた銀色の鏡のような存在に気を取られた隙に対面していた魔物が呪文を唱える時間を与えてしまった。
それは術者の生命力を残らず全て純粋な破壊エネルギーに変換する自爆攻撃、あらゆる魔法を防ぐと言われている竜闘気すら撃ち貫き反射魔法も無効な僧侶系呪文の最終到達点とされており、対抗策は命の石に代表される身代わりアイテムの加護か同じく純粋エネルギーである闘気や魔法力を放出して相殺するくらいしかなく、後者は余程の実力差がなければ気休めにもならない。
咄嗟にポップは残りの魔法力で相殺を試みようとしたが、それまでの探索や戦闘で消耗した状態では効果が薄く、爆風と閃光が収まった後には崩れた天井と壁の残骸のみが残されており、この日を境に稀有な才能を誇る少年の新たな冒険が開始される事となる。

＊

その日、ハルケギニアのトリステイン魔法学院では、毎年の恒例行事である春の使い魔召喚の儀式が行われていた。
儀式の内容は単純明快、二年生に進級した生徒がサモン・サーヴァントの呪文を唱えて使い魔を呼び出すだけで終わるイベント的な授業である。
次々と使い魔の召喚に成功する中、一人だけ失敗を繰り返している少女がいた。
彼女の名前はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール、他の者と違い地面を穴だらけにしているが本人は至って真剣、もちろん起こそうとして爆発を起こしているのではない。
ルイズが魔法を使おうとするとコモンを含む全ての系統で効果が現れない代わりに謎の爆発が起こるからであり、度重なる失敗や周囲の冷ややかな視線にもめげず声を張り上げ杖を振る姿は悲壮感すら漂っていた。
「ミス・ヴァリエール、成否に関わらず過度の魔法使用は精神と肉体を

疲労させる。
君の努力と熱意は認めるが今日はそこまでになさい。
どうしても諦められないのならば、後で特別補習を行っても構いません」
そう声を掛けたのは学院の教師でこの儀式を監督するジャン・コルベール、頭部の禿げ上がった独身中年男性で人当たりの良い温和な性格は多くの生徒からそれなりに慕われている反面、熱中すると前後を見失う悪癖や押しに弱く威厳に欠ける性分から口の悪い者は影でコッパゲなどと揶揄しており、教員仲間からの評判も芳しくないどころかある種の変人として有名で、周囲からはやや浮いていた。
今も鬼気迫る形相で頼み込むルイズの勢いに押し切られ、とっくに召喚を終えた他の生徒が遠巻きに見守る中で本日最後の詠唱が行われようとしている。
「宇宙の果てのどこかにいる私の僕よ！
神聖で美しく、そして強力な使い魔よ！
私は心より求め、訴えるわ！
我が導きに、答えなさいっ!!」
嘲笑に満ちた視線の中で絶叫するようにして振り下ろされる杖、轟音と閃光を伴った爆発が巻き上げた土埃の中から黒焦げになった少年が転がり出た瞬間、それまで無責任に囃し立てていた少年少女は一様に凍り付き、当事者であるはずのルイズも腰を抜かしたのかその場にへたり込んでしまった。
「うわあぁぁっ、ゼロのルイズが平民を爆殺した！」
我に帰った誰かの叫び声を合図に混乱した生徒が我先に逃げ去り、儀式の舞台となった小さな穴が無数に作られた草原には、倒れ伏したまま動かない少年を除くとたった４人しか残ってない。
青髪で眼鏡を掛けた小柄な女生徒とコルベールは少年に駆け寄り、真っ赤な髪で大人びた容姿の女生徒は魂が抜けたかのような様子で座り込むルイズに歩み寄り心配そうな表情で何やら声を掛けている。
「死んではいない」
「……見た限り致命傷ではないが全身が焼け焦げているな。

ミス・タバサ、君の使い魔で私と彼を医務室まで運んでくれますか？」
すぐさま駆け出すコルベールとタバサと呼ばれた青髪の少女、自分の使い魔を乗せた風竜が飛び立つ様を呆然とした表情で眺めていたルイズは、傍にいる赤い髪の少女にも聞こえるかどうかの小声で何やら脈絡のない言葉を吐き出していたが、気力が尽きたのかいきなり糸の切れた人形のように倒れそのまま意識を失った。

＊

コルベールはテーブルの上を見ながら困惑していた。
そこに並んでいるのは、未知の言語で書かれた十数冊の本に彼が知る範囲で流通していない金貨や価値の高そうな宝石の類を初めとする荷物が常識的な容量を超えて入っていた背負い袋、様々な色の液体が詰まったガラス瓶や種々雑多な草花の入った小袋、用途不明な無数の品々に数十日分の保存食、服装は立派ながらマントはなく杖も持ってない事から貴族ではないだろうが、かと言って持ち物や容姿に似合わず鍛え上げられた肉体からしてただの平民とも思えない。
それらを総合して、恐らく彼はどこか遠い国の出身なのだろうと当りを付けた辺りで少年が目を開いた。
「意識が戻ったようですね。
ここはトリステイン魔法学院、あなたは当校の生徒が行った召喚魔法によって呼び出されたのですが、その時に起きた爆発に巻き込まれ怪我を負ったのです。
他にも説明しなくてはならない事柄がいくらでもあるのですが、ここまでで何か質問はありますか？」
「……すんません、その前に傷が痛むんでテーブルの薬草を取って下さい。
いや、そっちじゃなくて隣の袋っす」
ポップもまた混乱していた。
破邪の洞窟で倒れたはずが気付いてみれば見知らぬ天井、瀕死はも

ちろん即死も覚悟したのに軽い怪我でベッドに寝かされおり、魔法使い風の温和そうな中年男性から不可解な説明をされたのだから当然である。

ポップの知識で召喚魔法と言えば、異世界や魔界などから魔物を呼び出す禁呪に近い魔法だったし、説明の途中に出て来たトリステイン魔法学院なる組織にも覚えがない。

現状を把握するには情報が少ないと判断したポップは、人前で回復呪文を使うのを嫌い薬草を使ったのだが、目の前の男は薬草を食べる彼を怪訝そうに見ていたかと思うといきなり奇妙な唸り声を上げるやそれまでの温和そうな雰囲気をかなぐり捨て、興奮に目を血走らせ鼻息も荒く顔を寄せて来た。

蛇足ながらここで少し解説を入れる。

ハルケギニアにおける回復アイテムは高級品であり、大半が治癒魔法を強化する触媒だったり自然治癒の速度が向上する程度なのに対し、ポップが使用したドラクエ世界の薬草は安価な日用品としてそこらの道具屋や雑貨屋でも簡単に購入可能かつ、治癒魔法と秘薬を併用しても数日は掛かる効果を食べるか傷口に貼り付けた時点で発揮する。

コルベールの視点からすれば、それはとても不可解な現象だった。

少年が小袋から取り出したのは、そこらに生えていそうな植物の葉や木の実である。

しかし、少年がそれらを口に入れ咀嚼すると同時に魔法が使われていてもこうは行かない速度で、身体のあちこちに残っていた小さな打撲や火傷が治っているのだ。

それを見た瞬間、コルベールの頭から大人としての振る舞いや教師としての責任は消え去り、一人の研究者となった彼は目の前で起こった事象を解き明かすべく行動を開始する。

手始めに消えつつある火傷を間近で観察する事にし、焦げた頬の皮膚が見る間に再生する様に息を呑んでから感動の吐息を漏らす。

さて、現状を第三者的に解説しよう。

人気のない医務室のベッドに座る少年の頭を鷲掴みにして熱い吐

息を漏らす独身中年禿げ頭の非モテ系男性教師、当事者のポップは温和そうに見えた男が豹変して意味不明な行動をして来たのが理解できず混乱しており、隣のベッドで寝ていたルイズも目覚めて最初に見た光景が理解できず硬直している。

そしてポップを診察した水系統の教師から報告を受け、様子を見に来た学院長のオールド・オスマンと秘書のロングビルが見たのは、呆然とするルイズの前で嫌がる少年に熱烈な口付けを行おうとするかのように顔を寄せるコルベールの姿……実際にはポップが暴走したコルベールを押し退けようとしているだけなのだが、二人の目にはそう見えたし少し前に正気に戻ったルイズも同じような解釈をしていた。

「あー、その、なんじゃの。

ミスタ・コールベル、他人の趣味にとやかく言いたくはないんじゃが、生徒の前じゃし相手も嫌がっておる。

ここは教師として自重してくれんかの？」

「何を仰るのですかオールド・オスマン、この胸に燃える思いは誰にも止められません！

今すぐにでも彼の身体を隅々まで……」

常軌を逸した口調で熱く語っていたコルベールが宙を舞い隣の空きベッドに落ちる。

このままでは埒が明かないどころかとんでもない誤解を招くと判断したポップによる実力行使だ。

状況が飲み込めず呆然とするロングビルの尻に手を伸ばすオスマン、奇行に走る悪癖があるにせよ実戦経験豊富なコルベールを投げ飛ばしたポップに感心しながらのセクハラだったが、すぐさま強烈な肘打ちを食らい無防備に突き出された顔面に打ち下ろすようなフックを入れられ、床に手と膝を着き声にならない嗚咽を漏らし全身を震わせる。

ちなみにルイズは、口の悪い連中が影でコッパゲとか呼んでたみたいだけどこれが知れたらホモベールとかって呼ばれるんだろうなとか考えていた。

＊

「……とまあ、薬草の作り方自体は簡単なんですが問題は必要な材料を揃えられるかどうかっすね。

ここは俺が持ってるどの地図にも載ってねえくらい遠い国みたいだし、こっちにある似たような植物を研究した方が早いかも知れませんよ？

つーか、ここにも同じような効果の薬くらいあるんでしょ？」

「こちらで使われている秘薬の類は大変高価でして、平民には手が届かない代物なのですよ。

貧富の差が生死を分けるのは、人を助ける手段で暴利を貪るのは間違っている！

積み重ねた研究の成果は万民に還元されるべきだと私は思っているのです。

……おっと失礼、少し熱くなってしまったようですね」

「いえ、素晴らしい考えだと思います。

俺の先生も言ってました、修行で得た力というのは、他人のために使うものだって、コルベールさんは立派っすよ」

オスマンやロングビルを交えて行った情報交換により、ポップの正体が遥か東方にあるとされるロバ・アル・カリイエの旅商人であろうと推察した辺りで、痺れを切らしたコルベールが薬草の製造法を尋ね現在に至る。

当事者でありながら無視され本来ならとっくに癇癪を起こしていたであろうルイズは、がっちりと握手を交わすポップとコルベールを心ここにあらずといった様子で眺めていた。

「さて、ミス・ヴァリエール、メイジにとっての使い魔は、一生の僕であり、友であり、目と耳であるとても大切な存在じゃ。

サモン・サーヴァントの魔法でポップ君が呼ばれたのだから失敗とは言えんが、呼び出した使い魔が重傷を負っている時点で成功とも言い難い。

わしの立場としては、神聖な儀式であれ高確率で爆発が起こると知っていながらコントラクト・サーヴァントをさせる訳には行かん。
それにポップ君は人間、こちらの都合で呼び出した上に怪我まで負わせて神聖な儀式なのだから契約して使い魔になれでは勝手が過ぎる。
とは言え、ポップ君が使い魔にならんままで進級させてしまうと周囲の者が素直に納得するとも思えん。
そこで特別措置として仮の契約を結んではどうかと提案する。
つまり、爆発せずに魔法を使えるようになるかポップ君の故郷が判明し帰る見通しがつくまでの間、彼と雇用契約を結んで使い魔の代わりを務めてもらう形で体裁を整えるんじゃよ。
周囲から色々と言われはするじゃろうが、進級の条件としてはこれが最大の譲歩でありそれ以外の選択には相応の対処をせねばならん。
この提案を拒否したり明日の夕方までに返答がなかった場合、遺憾ながら進級の資格なしとして君を一年のクラスに編入する」
諭すような言葉と脅迫を交えたオスマンの通告、ルイズにしてみれば酷い話だがそれに反論する余裕はない。
今でも魔法が使えず肩身の狭い思いをしているのに、進級を取り消され留年したとなれば苛烈な上の姉や厳格な両親から叱責されるどころか、下手をすれば貴族の資格なしとして勘当されるかも知れないのだ。
何かの間違いで平民を召喚してしまったが、儀式そのものに失敗していれば選択の余地なく留年だったはずだし、あの爆発だと召喚したのが小動物の類だったなら契約を結ぶ以前に死んでいたかも知れない。
そう考えて暗い気持ちを無理やりに奮い立たせ、無駄に熱くコルベールと語り合うポップに向き直り軽く深呼吸してから胸を張る。
「そこの平民、とっても不本意だけどあんたをわたしの使い魔として雇ってあげる。
本来なら貴族であるこのわたしがあんたみたいな平民を雇うなんてまず有り得ないんだけど、何かの間違いとは言え呼び出した責任も

あるから今回だけの特別サービスよ。
どうせ行く当てもないでしょうし、住処と食事くらいは保障してあげるからありがたく引き受けなさい」
「悪いがその誘い、丁重にお断りするぜ。
確かに俺は武器屋の息子だから平民に違いねぇが、そんな上から目線で言われてそれじゃあお願いしますと言うとでも思ってんのか？
つーか、そもそも俺はこの国の生まれじゃねぇし、そっちの事情なんざ知ったこっちゃねぇんだよ！
そもそも人に何かを頼もうってんなら、まずはそれなりの誠意を見せるのが道理ってもんじゃねぇのかよ？」
心を落ち着けなけなしの虚勢を張った高圧的な態度で押し切ろうとするルイズだが、不快感を隠そうともしないポップの鋭い切り返しに思わず言葉を失ってしまった。
「……ふんっ、これだから卑しい平民は嫌なのよ。
だったら特別にあんたをわたしの従者として雇ってあげる。
手付けとして新金貨１００枚、食費なんかの必要経費とは別に月払いでエキュー金貨１５枚、あんたの働きが良ければ月給に上乗せでボーナスを出す。
これ以上は何と言おうが譲歩しないわよ」
これは、ルイズ的に今後の力関係を思い知らせるつもりでの駆け引きだったが、ポップからすれば最悪に近いアプローチ方法だった。
ルイズが行ったのは、自分の地位と財力を見せ付ける賃金交渉なのに対し、ポップが求めていたのは会話の基本である相手を尊重する姿勢、オスマンは悲しげに首を振ると呆れた様子のロングビルを引き連れ退室し、隣で見ていたコルベールは酷く落胆したような表情で息を吐き窓の外を見る。
そして無言のまま立ち上がったポップは、度量の広さを見せ付けてやったとばかりの表情で胸を張るルイズを鼻で笑った。
「……地位に金か、そんなもんが誠意とは憐れなもんだな」
「なっ、何が憐れだって言うのよ？
たかが平民のくせに貴族に対してその態度は無礼よ！」

「そうだな、あんたみてぇなお貴族様に言わせりゃ俺なんか卑しい平民だ。
でもよ、貴族と平民の違いって何だろうな？
俺はあんま好きじゃねぇけど人を身分とか財産で評価する考え方にはそれなりの説得力がある。
それなら聞きたいんだが、身分や財産って代物を差し引いたあんたにはいったいどんな価値があって何を誇れるんだい？
例えば何らかの理由で家が没落した場合、例えば今回とは逆にあんたが使い魔として召喚された場合、そんな状況になってもあんたは胸を張って自分は貴族だと言い放ち何かを誇れるのかよ？
それにオスマンの爺さんは、使い魔は一生の僕であり、友であり、目と耳であるとか言ってたが、金さえ払えば忠誠を買えるとでも思ってやがるのか？」
ポップとしては額面通りの意味で行った質問だが、ルイズからすれば正に致命的と言える内容だった。
質問の意図は礼儀や品格を問うものだったのに対し、ルイズは『貴族なのに魔法が使えないお前に存在価値はあるのか？』と受け取り言葉を失う。
そして彼女は、自分の中に答えとして誇れるこれはと言うような要素が存在しないと気付き愕然とする。
人としての在り方をポップに指摘され、今まで拠り所にしていた貴族としての地位を否定されてしまえば、涙を堪えて積み重ねた努力も無価値な徒労だったのではないのかとすら思え、それまで心の奥底に無理やり沈めていた不安が次々と浮かび上がって来る。
実は自分は拾い子で魔法を使い容姿を変えているだけなのではないか？
実子ではあっても魔法の才能を受け継いでないのではないか？
魔法が使えない自分は家族から疎まれているのではないか？
実際、家が没落したらどうなるだろうか？
両親や二人の姉は尊敬に値する人物で領民からも慕われているが、自分は領民や使用人から尊敬されるどころか腫れ物扱いな上に影で

は憐れまれてすらいた。
実家では優秀な家族に対する劣等感に苛まれ、逃げるようにして入学した魔法学院でも皆からまともに魔法を使えない無能な劣等生だと馬鹿にされている。
やっと呼び出した使い魔にすら軽蔑され、押さえの利かなくなった負の感情が飽和してルイズの心を真っ黒に塗り潰す。
いきなり大粒の涙を溢れさせ言葉にならない呻き声を上げ泣き出したルイズ、掛ける言葉もなく動揺するポップの肩を叩き無言で医務室から連れ出すコルベール、扉を閉めても漏れ聞こえる悲痛な啜り泣きが聞く者の心を締め付けるが、心傷付いた者に安易な慰めは逆効果でしかない。
「……ミス・ヴァリエールは優秀な人材を多く輩出している公爵家の三女なのですが、彼女が魔法を使おうとするとそれがどのようなものであれ謎の爆発が起こり失敗してしまいます。
隣国ゲルマニアを除くとハルケギニアの貴族は全てメイジであり、特にこのトリステイン王国では貴族は魔法をもってしてその精神となすと言われ、近年ではその意味を拡大解釈したメイジ絶対主義が国内に蔓延しています。
彼女は座学で優秀な成績を修めるも実技の成功は皆無、貴族の証明である魔法が使えない劣等生と他の生徒から見下され馬鹿にされようと腐らず怠らず常に努力と研鑽を積み重ねて来ました。
このジャン・コルベール、教師でありながら苦悩する生徒を救えない無能な男が理不尽を承知で頼みます。
ミスタ・ポップ、どうか彼女と契約を結びその知識で支えてあげて下さい」
深々と頭を下げるコルベール、その声に深い苦悩と責任感を感じ取ったポップは、同時に己の無力を嘆くルイズの姿に過去の自分を重ね合わせていた。
彼は様々な人物との出会いを経て最終的に克服したが、仲間とは違う平凡な出自に対する強烈な劣等感に苦しめられている。
それに誤解を招くような発言でルイズを泣かせたのはポップであ

り、これを見捨てて親友探しを続行するのは色々と後味が悪いし何より彼の流儀に反する行為だ。
しばし目を閉じ、様々な事柄を考慮してある程度は譲歩するしかないと判断したポップは、コルベールに目礼して出たばかりの医務室の扉を開けるとルイズの正面まで歩き視線を合わせる。
「……泣いてるとこ悪いが、いくつかの質問に答えてくれ。
お前さん、魔法を使えるようになりたいか？
その為なら無礼で口の悪い平民に助けてくれと頭を下げて頼めるかい？」
「ぞっ、ぞんだのどうでんよ。（グスッ）
あだり前じゃだいど。
ぞうでなぎゃ、ごんなとごいないばよ。
わたじには、ぢいねえざばのやばいをなおずって夢があるんだがら（ヂーンッ）
……魔法が使えるようになれたら偉くなれなくても構わない。
必要だったらどんな努力でもする。
頭を下げてお願いしろって言うんならこの通り下げる。
だからお願い、わたしと使い魔の契約をしてちょうだい」
涙と鼻水塗れだが強い意志の宿る瞳、心に深い傷を負ったばかりなのに立ち直りが早いルイズにポップは心の中で感嘆する。
空回りするプライドの高さは少しばかり問題だが、志を折られ希望などまるで見えない状況でも夢を捨てず追い掛ける様は滑稽と笑う事は容易くとも真似るのは至難だ。
ルイズの逞しさに好感を覚えたポップは、泣かせた責任もあるし長い寄り道になっても仕方ないと腹を括り返答する。
「俺からの条件は三つだ。
まず最初、最低でも使用人と同等の扱いをする。
次、修業には全力で取り組むと約束する。
最後、魔法を失敗せず使えるようになっても俺を使い魔にしない。
以上の条件が守れるんならお前さんを本物の魔法使いにしてやる。
それが嫌なら交渉は決裂だ」

「……それでいい、その条件を飲むわ。
でも、契約したらちゃんと使い魔としての仕事はしてもらうからね！」
「まあそりゃな、仮にも使い魔って立場で契約するからにはよっぽど理不尽な命令でなきゃ従うさ。
そんじゃま早速、オスマン爺さんに交渉成立の報告をしに行こうぜ？」
小さく鼻を啜り淡い笑みを浮かべ手を差し出すルイズに対し、少し気取った動作とおどけた笑顔で握り返しながら答えるポップ、ここでちょっとした誤解が発生した。
ポップは自分の弟子にするつもりで条件を出したのだが、ルイズはそれを爆発せずに魔法が使えるようになるまで従者として付き合ってやると理解しており、ポップに対しても口が悪くて無礼だがそんなに意地悪でもない平民くらいの認識でしかない。

＊

なお、仮の契約を結ぶ事にしたとオスマンに報告したポップはそのままルイズの部屋に案内されたが、用意してあった寝藁を見るやベッドとの交換を要求するも時間が遅いからと断られ条件に自分専用の個室を追加すべきだったと後悔する。
そして朝になったら起こすよう告げ目の前で服を脱ぎ使い魔の仕事だから洗濯するよう言ったのに対し、『お子ちゃまのくせに随分と背伸びした下着だけどまだ早いんじゃね？』と素直な感想を述べたポップに激怒したルイズが全裸のまま椅子を振り回して暴れ、すぐさま怒鳴り込んで来た隣室の生徒による『その格好で何を言っても説得力ないわよ？』発言により黙り込み俯いたまま着替えてベッドに入り、重苦しい沈黙に耐えられなくなったのか逃げるようにして退室した豊満赤毛娘の尻を見送り、様々な疲労もあって服も脱がず寝藁の上に倒れ込むや数秒もせず眠りについた。

＊

就寝前のドタバタで夜空を見そびれたポップは、自身が元居た世界とは異なる場所に呼び出されたのだと気付くまで数日を要したが、行先さえ把握していれば時空の壁すら超えられる移動呪文を使える為に少し驚いた程度の認識でしかなく、呼び出された以上は往復可能だろうと瞬間移動呪文（ルーラ）でマトリフが隠遁する洞窟に移動し、異世界に召喚され成り行きながら弟子を取ったと報告する。

なお、異世界の存在や孫弟子を取ったとの報告に大興奮したマトリフが自分もハルケギニアへ連れて行くよう要求したが、自分を召喚した学生の従者として同じ部屋に居候している状態だから無理と断った瞬間に爆笑し、ルイズが自分の着替えすらままならない手の掛かるお子様と報告したものの具体的な容姿や性別を伝えないまま会話を切り上げた。

そして後日、マトリフからポップが幼い子供を弟子に取って着替えの世話もしていると聞いていたマァムとメルルが、ハルケギニアから修行で連れて来られたルイズと対面した際にそれはもう激怒し、慌てて取りなそうとしたシエスタの存在が更なる修羅場を生み出したり、同行したタバサとキュルケを見て武神流の拳や水晶玉が猛威を振るうのは、わざわざ語るべくもない余談である。

〔本作ポップのレベルは５６ですが、平均的なギーシュのレベルはどれくらいでしょうか？〕

学院に勤めるメイドのシエスタは自分がまだ寝ぼけているのだと思った。

それは食堂に向かおうとしていたら視界の端で奇妙な物体が動いていたからであり、何だろうと気になって目を向けると庭の隅で見覚えのない黒髪の男性が放置されていた巨大鍋を背に乗せたまま、重さを感じさせない軽快な走りで入り口側の壁から裏側の壁までの距離を往復していたからである。

鍋は直径１．５メイル深さ８０サント程度と広幅で水平に背負っている事から表情こそ見えないが、一定のペースを保っている足取りに乱れはなく素人目にも無理をしている様子はない。

「ん、何か用かい？」

しばらく見ていると走り終えたのか、男性は鍋を持ち上げたままの姿勢で振り向いた。

見た感じはシエスタと同世代かそこら、怪力に似合わぬ中肉中背でこれまたシエスタと同じ黒髪と黒目を除くと目立たない平凡な容姿をしている。

しかし、少年が何気ない動作で傾けた鍋から水が流れ落ちるのを見たシエスタは恐怖に近い感情を抱く、こんな物を軽々と持ち上げるのは力自慢とかのレベルでは断じてない。

「俺はポップ、昨日からルイズの使い魔として働く事になってね。良ければ洗濯する場所を教えてもらいたいんだが、ついでに道具とかあるんなら貸してくれるとありがたいんだけど頼めるかな？」

「……わっ、私はシエスタです。

ミスタ・ポップ、お洗濯の道具をお探しでしたら持って来ます」

「いや、道具の置き場所とか知りたいから一緒に行くよ」

最初は怯えていたシエスタだが、歩きながら雑談している間にあっさり警戒心を解いてしまっていた。

貴族かと思っていたポップが異国の平民だったのと話し上手で陽気な性格に好感を抱いたらしく、自分にも仕事があるからと洗濯道具が置いてある場所に案内してすぐに名残惜しそうな様子で立ち去った。

＊

「おーい、朝だぞ起きろ！」
「ウェヘヘッ、どぉらわらしの使い魔はドラゴンよ。
ちぇるぺふとぉにゃんかへひゃにゃいは……」
「幸せそうで結構だが、こいつやたらと寝言が多いのな」
腕組みしながら呆れ顔で呟くポップ、ルイズと自分の分の洗濯を終わらせてから部屋に戻り、瞑想などの室内でもできる修行をしていたら起こせと言われていた時間になったのだが、締まりのない笑みを浮かべて涎と寝言を垂れ流すルイズは声を掛けても起きる気配がなく、かと言ってわざわざ呪文を使って起こすのも馬鹿らしい。
そこで鼻を摘んでみると効果覿面、間抜けた悲鳴を上げて手足をバタつかせたかと思うとすぐさま飛び起きた。
「おはよう、目は覚めたかい？」
「……あんた、誰？」
「誰とはご挨拶だな、お前さんが雇ったポップだよ。
ほれ、着替えはここに置いとくから準備が終わったら朝飯を食いに行こうぜ？」
寝惚けた様子のルイズに気分を悪くするでもなく、クローゼットから適当に取り出した着替えを置いてから退室するポップ、昨夜の騒動から下手にからかうと長くなると判断しての行動だ。
何やら後ろから聞こえるのを無視して廊下に出ると隣室のドアがタイミングを合わせたかのように開き、昨夜の豊満赤毛娘が姿を現す。
「おはよう使い魔さん。
あたしはキュルケ、キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・

アンハルツ・ツェルプストー、昨夜は色々あって聞けなかったけどあなたのお名前を聞かせてもらえるかしら？」
「俺はポップ、家名とかはないただのポップだ。
そっちにいるのはあんたの使い魔かい？」
ポップがキュルケの足元に視線をやる。
そこにいたのは薄い赤色の巨大な爬虫類、尻尾の先が燃えているのとやや角ばっているのを除けばサンショウウオに似てなくもない。
「そうよ、この子があたしの使い魔、火属性のあたしに相応しいサラマンダーで名前はフレイムよ。
見てこの尻尾、この子はきっと火竜山脈の生まれに間違いないわ！」
「ふーん、俺はここらの生まれじゃないから火竜山脈とか言われてもさっぱりだが、フレイムだっけか？
こいつが並みの戦士じゃ相手にならねぇくらい強いってのは分かるぜ」
「ありがとう、褒め言葉と受け取っておくわ。
でもね、フレイムを褒めるのならメイジを引き合いに出さないと駄目ね。
この子の強さは……」
「朝っぱらから下らない自慢してんじゃないわよ！
それにあんたも、ツェルプストーの相手なんかしなくっていいの！
朝は忙しいんだから早く食堂に行くわよ！」
「へいへいっと、そんじゃキュルケにフレイム、またな」
癇癪を起こして噛み付くルイズを言葉巧みに宥めながら歩き去るポップ、取り残されたキュルケはポカンとした様子で見送っていたが、少しして楽しそうな笑みを浮かべると二人の後を追った。

＊

「うへぇ、朝からそんなに食うのかよ？」
「これは貴族用、あんたの分は調理場に用意させてあるからさっさと

食べて入り口で待ってなさい」
　無駄に広く豪勢なアルヴィーズの食堂、馬鹿長いテーブルに並べられた大量の料理を前にげんなりとした表情のポップを振り向きもせず奥の調理場を指差すルイズ、夕食を食いそびれて空腹だったのもあり反論せず行ってみると仕事の区切りが着いたのか休憩するシエスタがいた。
「よっ、シエスタちゃん。
　また会ったな」
「あれっ、ポップさん？
　どうしたんですか？」
「ん、調理場に行けばメシを食わせてくれるってルイズに言われてね。
　悪いんだけど簡単なモンでいいから何か適当に食わせてくれないか？」
「それでしたら料理長のマルトーさんに……」
「……ミスタ・ポップですね？
　食事はもちろん待遇も全て貴族様と同じ扱いにするようミスタ・コルベールから伺ってます。
　今から料理を並べますんで、もう少し待ってて下さい」
　笑顔で返事をしようとしたシエスタの前に、不機嫌さを隠そうともしない調理人らしき大柄な男が割り込み、事務的な口調で告げると奥にいる他の調理人に料理を運ばせようとしたので、
「いや、コルベールさんが何を言ったのかは知らねぇけど俺は遠い国から呼ばれたってだけの平民なんで、待遇はもちろん食事だって他の使用人と同じで頼んます。
　それと、あなたの方が年上なんだから俺みたいな若造は呼び捨てにでもして下さい」
　平民の生まれで最近は保存食ばかり食べていたポップとしては、朝からフルコースを食べ切る自信がなく残すのも悪いと思っての発言だったが、大柄の男が背を向けたまま肩を震わせているのを見て気分を悪くさせたかと思うも
「気に入った！

お前さん気に入ったぜ！
俺はマルトー、ここを任されてる料理長だ。
おうっ、お前らもこいつの言葉を聞いたかよ？
この若さで謙虚な態度、ミスタ・コルベールが頭を下げて頼みに来たのも納得ってもんだ。
全く、魔法が使えるってだけで偉ぶってる貴族のガキどもとは大違いだぜ」
と豪快に笑いながら背中を何度も叩き、希望通り使用人向けの賄いを出してくれたので気にしない事にした。
実際、マルトーは頑固で気難しい面があるものの認めた相手には素直に敬意を表する公平さを持ち合わせている。
少しばかり思い込みが激しく感情を隠せない単純な人物ではあるが、オスマンから信頼され調理場を任されているだけあって学院で働く者からの人望も厚い。
そんなマルトーに認められたポップは、他の使用人からすれば敬意を表すべき人物なのだろうが、出された食事に笑顔で感謝する姿は明るく素直な少年そのものだった。

＊

シエスタらと雑談していたので少し遅くなったが、食堂でキュルケに絡まれていたルイズより早く待ち合わせ場所に到着する。
合流したポップが仲裁に入るも嫌味と皮肉の応酬は教室に入っても終わる気配がなく、教員らしきふくよかな中年女性が入って来るまで続けられた。
「皆さん、春の使い魔召喚は大成功のようですわね。
このシュヴルーズ、毎年どのような使い魔が召喚されたのかを見るのがとても楽しみなのですよ。
それとミス・ヴァリエール、あなたが東方の賢人を召喚したとミスタ・コルベールから伺いましたが随分とお若いのですね？」
「おいおい、ルイズ。

いくら召喚したのが平民だったからって、そんな頭の悪そうなのが東方の賢人なんて誰が信じるもんかよ！

あんまり馬鹿な嘘を吐いてると親の教育を疑われるぜ？」

シュヴルーズの挨拶に割り込み、下卑た笑みを浮かべた小太りの少年が立ち上がるとルイズに対し上から目線で諭すような言葉を馬鹿にした口調で吐いた。

「先生、風邪っぴきのマリコルヌに侮辱されました！」

「僕の二つ名は風上で風邪っぴきじゃないぞ！

そっちこそ侮辱するなよゼロのルイズ！」

「あんたの声、風邪をひいてるみたいにガラガラなのよ！」

低次元な口論を呆れたように見ながら杖を振るシュヴルーズ、するといきなり現れた赤い玉が宙を飛びながら膨れ上がり、罵り合う二人の口元を覆うように張り付いた。

「二人とも、お友達をゼロだの風邪っぴきだのと呼んではいけません。

罰としてしばらくそのままでいなさい。

それとミスタ・グランドプレ、ミス・ヴァリエールの使い魔を東方の賢人だと言っているのはミスタ・コルベールであり、あなたの言葉はミス・ヴァリエールだけでなく彼女のご実家やミスタ・コルベールをも侮辱したのと同じになります。

何より、証拠もなく人を疑うのはお互いを称え合うべき貴族の礼節に反する恥ずべき行為ですよ？」

シュヴルーズに指摘され顔色を失くすマリコルヌ、教師であるコルベールの発言を確たる根拠もなく嘘だと決め付けた時点で失態だったが、下手をして今回の発言をルイズの実家に知られれば更なる騒動の種になる。

普段から気楽にゼロ呼ばわりしているが、ルイズの実家は王家に連なる大貴族である公爵家だ。

そんなラ・ヴァリエール家の子女を馬鹿にしたとなれば、マリコルヌを含むド・グランドプレ男爵家に繋がる全員が王宮や貴族仲間から断罪されたとしてもおかしくない。

今更ながらに己の浅慮に気付いたマリコルヌだが、謝罪するタイミ

ングを逃したままいつ来るかも分からぬ破滅にしばらく脅え暮らす事となった。
「私の二つ名は赤土、赤土のシュヴルーズです。
これから一年、土系統の魔法を皆さんに講義します。
ではミス・モンモランシ、魔法について簡単で構いませんので説明して下さい」
「はい。
私たちが使っている魔法は、偉大なる始祖ブリミルより伝えられた水土風火の４つからなる系統魔法です。
今は失われた虚無を合わせて全部で５つの系統とする説もあり、また少数ながらコモンマジックは独立した系統であると定義する意見も存在します。
魔法の才能は血統に宿るとされており、王家や有力貴族の家系から多くのトライアングルやスクウェアクラスのメイジが生まれている反面、ドットやラインばかりの家系から強力なメイジが生まれるケースは極めて少数です。
また、高い知性を持つ一部の幻獣や亜人が使うとされる先住魔法も存在しますが、こちらは杖が必要なく系統魔法とは全く異なる効果があると言われている他は詳細不明です」
指名された金髪縦ロールで後頭部に赤い大きなリボンの生徒が淀みなく答え、それを聞いたシュヴルーズが我が意を得たりとばかりに満足そうな笑みを浮かべ頷いた。
「はい、結構です。
少し補足すれば、生まれながらのクラスが生涯のクラスであるとは限りません。
長い修練の末、ドットからトライアングルへと成長を遂げたメイジも少数ながら確かに存在します。
また、土と風、火と水は互いに対抗しており、優れたメイジでも得意とする系統と反対の系統は不得手だったり使えない事が少なくありません。
更に言えば、系統特化型とでも言うのか得意とする系統のみトライ

アングルやスクウェアクラスで、それ以外の魔法はコモンマジックを除くと全く使えない者も数は多くないにせよ確実に存在し、逆に全ての系統を満遍なく使用できる者はドットやラインクラスばかりでスクウェアどころかトライアングルすら滅多にいません。

さて、少しばかり前置きが長くなってしまいましたが、これより新年度初の授業を始めたいと思います」

生徒の説明で不足していた部分に自論を混ぜた解説を終え、懐から小石を取り出したシュヴルーズが詠唱しながら杖を振ると小石が淡く光を放ちながら黄金色に輝く金属に変わり、それまで興味なさげに見ていた生徒らの態度が急変し、教室内に興奮や驚きの声が飛び交った。

「そっ、それは、もしかして……ゴッ、ゴールドですか！」

「いいえ、残念ながらこれは真鍮です。

ゴールドの錬金が可能なのはスクウェアクラス、私のクラスはトライアングルですからね。

さて、今やって見せた錬金は対象となる物質の構成や質量を変化させる土系統の基本にして真髄と言える魔法です。

自分の系統だから言うのではありませんが、土系統は万物の組成に加えて戦闘にも応用可能な系統であり、汎用性の高さにおいて他の系統とは比べ物にならない正に万能と言っても過言ではない系統だと私は思っています。

錬金に限らず魔法を使うコツは明確なイメージであり、それを支えるのは深い知識に裏付けされた理論と飽くなき反復練習の積み重ねです」

興奮した様子のキュルケに答え、授業を進行するシュヴルーズの姿を横に座るルイズがげんなりするくらい凝視していたポップだが、彼が見ていたのはシュヴルーズ本人ではなく魔法力の流れと変化である。

ポップには魔法を解析して再現したり無効化する能力があり、錬金を解析して自分の知識にある錬金術との相違点や応用について考えを巡らせていたのだが、ルイズからすればシュヴルーズを食い入るよ

うに見詰めて黙り込んだ自分の使い魔候補はひょっとして熟女好きなのではとの疑惑を抱かせるだけだった。
「では、実際に錬金をやってもらいましょう。
……そうですね、ミス・ヴァリエール、こちらへ」
何気ない呼び掛けに、それまで騒がしかった教室が息を呑む音を残し沈黙に包まれた。
「わたしが、ですか？」
「ええ、そうです。
この石ころを錬金で望む金属に変えてごらんなさい」
「ですがその、わたしが魔法を使うと……」
「ミス・ヴァリエール、早くこちらへいらっしゃい？」
再度シュヴルーズは呼び掛けるが、曖昧に答えて俯いたままのルイズは立ち上がろうとしない。
「先生！」
「どうかしましたかミス・モンモランシ」
「ミス・ヴァリエールの魔法は爆発します。
とても危険なので他の生徒を指名して下さい」
怯え交じりに懇願するモンモランシーに教室のほぼ全員が同意しているのを見て、嘆かわしいとばかりに頭を振ったシュヴルーズは包容力のある笑みを浮かべ、
「ミス・ヴァリエール、努力を諦めた者に成長はありません。
ここは学び舎なのですから、失敗や批判を恐れず何度でも挑戦してごらんなさい？」
その暖かい励ましに暗い表情でポップをチラチラと見ていたルイズが顔を上げ、
「やります」
と、力強く答えて歩き出すや他の生徒は慌てて机の下に潜り込み、避難完了とばかりにこれから起こるであろう衝撃に備えているのを見たポップが事情を察して表情を引き締める。
そして予想通りに爆発が起こり、それに驚き興奮した生徒の使い魔が暴れ出した。

「だから言ったのよ！
　あいつにやらせるなって！」
「もうヴァリエールは退学にしてくれよ！」
「俺のラッキーが蛇に食われた！
　ラッキーがぁ！」
　黒煙が漂い悲鳴や怒りの声が飛び交う教室の隅、爆砕した教卓から数メイルばかり離れた場所、左手でシュヴルーズを支えるように右手でルイズを荷物のように抱えたポップがそこにいた。
　連続瞬間移動呪文（ルーラ）で爆発の範囲から逃れたので3人には煤汚れすらないが、激しく揺られたルイズの顔色は良くないし、爆発に驚いたシュヴルーズは気絶している。
　失礼ながら単純に重量と体型の問題で抱き寄せると小脇に抱えるになっていたが、激しい自己嫌悪に囚われているルイズにはそれを抗議する元気もない。
「こりゃまた派手にやったなぁ？」
「……そうね」
　片目を閉じて冷やかすように問い掛けるポップだが、顔も上げず力なく答えるルイズに気付き、その原因に思い当たるや弛緩していた表情を引き締めた。
「なあルイズ、お前さんを立派な魔法使いにしてやると約束したよな？
　んでもって、昨日は色々あったからコースを聞いてなかったんだがどれにする？
　基本の復習からのイージーコース、ノーマルだと理論からでハードコースは実戦式、お勧めはイージーから段階を上げてくって感じだが……」
「ハードだろうがスペシャルハードだろうが何だっていいわよ！
　魔法が使えるようになるなら命くらいいくらでも掛けるし、どんな無茶苦茶な修行だってする。
　でもね、努力じゃどうにもならない現実があるのよ。
　あんたが気を使ってくれてるんなら、しばらく一人になりたいから

夕方くらいまでどっか行っててくれない」
「そっか、スペシャルハードコースに挑むんだな。
後で書類とか作っとくからサインよろしく、それと明日の朝までに運動用の動き易い服と靴を用意しとけよ？」
言うが早いかその場にルイズを降ろしシュヴルーズを両腕に抱え直して教室を後にするポップ、少しばかり時間を置いて入れ替わりに駆け付けた教師らから罰として後片付けをするよう命じられたルイズは1人で黙々と作業していたが、作業は遅々として進まず終わったのは昼食の時間が始まって少し過ぎた頃だった。

＊

「やあミスタ・ポップ、わざわざここへ来るとは私に何か用事ですかな？」
「ミスタはいりませんよコルベールさん、それよりちょいとばかり協力してもらいたいんすよ。
約束通り明日からルイズの修行を始めたいんで、3～4日ばかり授業を休ませて旅に出る為の手続きをしたいのと、ついでに最初の1日だけ先生にも同行してもらえませんかね？
あいつの系統は虚無だけみたいなんで、他の系統を覚えさせるのに特殊な修行をやるつもりなんすよ」
「……ポッ、ポップ君。
ななな、何を根拠にミス・ヴァリエールの系統が虚無だと？」
「そんなの簡単な推察ですよ。
ルイズはコモンや他の系統魔法が使えない。
なのにサモン・サーヴァントは使える。
状況から考えれば、普通ではない系統の特化型と考えるのが妥当でしょ？
そうなると残りは虚無だけ、だったらルイズの系統は虚無か突然変異のサモン・サーヴァント専門になる。
謎の爆発を失敗ではなく虚無の成功だったと仮定すれば、どうして

ルイズが魔法を使えないのかにも筋が通りますしね」
時間は少し遡りルイズが罰掃除を言い渡されたくらい。
保健室にシュヴルーズを運んだポップは、担当授業をすっぽかして薬草の研究を始めていたコルベールの下を訪れ、他愛のない世間話をするような気楽さでとんでもない爆弾発言をしていた。
途中までは温和な笑みを浮かべていたコルベールだったが、途中で聞き捨てならない単語が出て来るや驚愕に息を詰まらせ硬直する。
しかし、続く説明に納得したような表情を浮かべると快く授業を休む手続きと修行への同行を引き受けた。

＊

さて、そんな事情も知らないルイズはやっと教室の片付けを終え、時間を確認すると昼過ぎだったので食堂に行ったものの食欲がなかったからスープとパン以外には手を付けず果実水を飲んでいたが、
「おーい、ギーシュとルイズの使い魔が決闘だってよ！」
思わず盛大に吹き出し、デザートの余り待ちなのか食事が終わっても隣にいた小太りな生徒の顔面にぶっ掛けてしまった。

＊

決闘の舞台となったヴェストリの広場は、魔法学院の端にある風と火の塔の間に位置する普段は人気のない中庭であり、敷地の西側に位置するだけあって外壁と建物に挟まれた立地から日当たりはあまり良くない。
いつもは通り過ぎるか逢い引きするくらいしか用事のない場所だが、平民と貴族が決闘すると聞いて見物に詰め掛けた物好きな生徒達でちょっとした人垣が出来ていた。
少し離れた壁際にはキュルケの姿もあり、彼女の隣では青い髪の少女が我関さずと言った表情で本を読んでいる。
「諸君、決闘だ！」

言葉と共にギーシュがバラの造花を掲げると周囲の観客から期待するような歓声が巻き起こった。
余裕の表情を浮かべギャラリーに腕を振って答えるギーシュに対し、渋い表情で腕組みしたままシエスタに揺さぶられているポップ、ちなみにシエスタの表情は必死そのものだったが全く相手にされていない。
しばらく満足げな様子で腕を振っていたギーシュだが、やっと気が済んだのかポップに向き直ると気取った笑みを浮かべ、全身を使った大仰な動作で造花を振り上げる。
「とりあえずは、逃げずにここまで来た勇気を誉めてやろうじゃないか？
だがね、僕は勇敢な者に敬意を表さなくもないが分別のない者を見逃すつもりはない。
そこで提案だが、君とそのメイドが誠意を込めて謝罪するのならば決闘を取り下げてやらなくもないと考えている。
これは僕からの慈悲であり最後通告でもあるがどうするね？」
「おいおい、ここまで盛り上げといてそれじゃ周りの連中が納得しねぇだろ？
それに俺があんたに謝る道理なんざねぇし、近くにいただけのシエスタは無関係だからその理屈はおかしい」
突き付けられた造花に膝を折ろうとしていたシエスタの肩を右手で掴み、任せておけとばかりに優しく押し退けながら軽い口調で指摘するポップ、それに激高したギーシュが口を開こうとしたものの駆け込んで来たルイズの怒鳴り声に遮られた。
「あっ、あんた姿が見えないと思ってたら何やってるのよ？
決闘だなんて平民がメイジに勝てるはずないでしょ！
わたしも一緒に謝ってあげるから早くギーシュに謝りなさい」
「待ちたまえミス・ヴァリエール、いくら君が頭を下げようともう遅い。
その使い魔に貴族を舐めた報いを与えなくては僕だけでなくここに集まった誰もが納得しない。

残念ながら既に手遅れなのだよ」
「悪いなルイズ、こっちにも事情があって後には退けねぇんだわ。
それと修行にゃ体術も含まれてっから、ちゃんと今日の戦いを見て予習しとくんだぞ？」
焦り気味なルイズと高慢なギーシュに対し、飄々とした表情を浮かべあくまでマイペースを崩そうとしないポップの様子に周囲から非難の声が上がり、使い魔の死を予想したルイズの顔から血の気が引き言葉を失くす。
「良いだろう、命までは取るまいと思っていたが仕方ない。
貴族を侮るその増長、死を以って償うがいい！
我が名は青銅のギーシュ、このワルキューレで貴様を血の海に沈めてくれる！」
「餓鬼の喧嘩に大仰な口上なんざいらねぇ、ぶちのめしてやっからとっとと掛かって来やがれ」
獰猛な笑みを浮かべゴーレムを生成するギーシュ、顔面蒼白で硬直するルイズをシエスタに預けのんびりと歩くポップ、数名を除いて緊迫感と興奮した人々の声に包まれるヴェストリの広場、騒ぎを聞き付けた教師らは人垣に阻まれ決闘を止めるどころか現場に辿り着けず右往左往している。

＊

「ポップ君の持っている薬草の知識は正しく素晴らしい。
すぐにでも王室にレポートを提出し、是非ともアカデミーで本格的な研究を開始するべきですぞ！」
「却下」
「何故です！
貧困に喘ぐ平民でも手が届く秘薬が完成すれば、怪我で苦しむ多くの人々が救われるのですぞ。
貧しさを理由に満足な治療も受けられず助かるはずの者が死ぬような状況を見過ごせと言うのですか？」

「そりゃ確かに、水の秘薬の代替品が平民でも気安く買える価格で出回るようになれば助かる者は増えよるわい。
じゃがのミスタ・コーベルル、安価な治療薬の製法となれば王宮の馬鹿どもが独占するのが目に見えとる。
それに、治療系の秘薬作りを生業とする連中とて黙っちゃおるまいよ。
確実に騒動が起こるじゃろうし、下手をすれば研究者が良からぬ目に遭うやも知れん。
仮に君の言う通り貧困に喘ぐ平民でも買える価格で広まったとして、日常的に怪我をする傭兵やら盗賊の手にも渡るとなれば後は言うまでもなかろう？」
「……私はコルベールです。
治安の悪化とメイジ殺しの増加、救われる数と犠牲者の数を比べるのは不可能でしょうが、現状を考えると安易に広めるべき知識ではないのかも知れませんね」
色々な意味で機嫌が良く意気揚々と学院長室を訪れたコルベールだったが、自分とルイズの外出手続きついでに提案を持ち掛けたらあっさり否定され落ち込んでいた。
「お話し中に失礼します。
ヴェストリの広場で生徒達が決闘をしているとの報告が入りました。
騒ぎを聞いた教員らが止めようとしたそうですが、興奮した生徒達は言う事を聞かず手に負えない状況だそうです。
現場からは騒動を収めるのに眠りの鐘の使用を求めていますが許可なさいますか？」
「アホらし、たかが子供の喧嘩にわざわざ秘宝を使う必要もあるまい。
止められんのなら放っておきなさい」
「宜しいのですか？」
「構わん。
何ぞあった場合の責任はわしが取る。
時に、そのバカ騒ぎを起こしたのは誰かね？」

「決闘を申し込んだのは2年生のギーシュ・ド・グラモンです」
「グラモンと言えば色と争いを好む家系、血の気が上か下にしか集まらんような連中ばかりなだけに決闘と言われても驚かんわい。
　して、不運な犠牲者は誰かね？」
「ミス・ヴァリエールの召喚した使い魔の少年、つまりミスタ・ポップだそうです」
　ノックもなく入室したロングビルの報告に顔色を変えるコルベールだが、やる気のなさそうな態度で聞いていたオスマンの方は慌てるでもなく頷きを返し、
「そうか、報告ご苦労じゃった。
　ついでに念の為、水系統が得意な教師に治療の準備をするよう手配しておいてくれるかね？
　もちろん、治療費は相場通りきっちり請求するように」
「わかりました」
　短く答え退室するロングビル、それを見送ったコルベールは問い掛けるような視線をオスマンに向け、
「オールド・オスマン、何か考えあっての判断ですよね？」
「うむ、正体不明なポップ君の実力が見たいと思っての。
　君とて彼が自分で言っておるような旅の商人なんぞと本気で信じちゃおるまいよ？」
「それは……確かにそうですが、私としては生徒を危険に晒すのはどうかと思います。
　大丈夫だとは思いますが、最悪の事態になる前に止めに入る許可は頂きますよ」
「決闘が禁じられておる理由を考えん血気盛んな若者にはええ薬になる。
　悪いがグラモンの馬鹿息子には試金石となってもらう、それにわしとて傍観はすれど生徒の安全くらいは確保するわい」
　両名が具体的な言葉にしないまま想定しているのはメイジ殺し、様々な手段を駆使してメイジを倒す平民と貴族の関係から外れた存在であり、慢心したメイジが平民の前に破れるのは珍しくとも皆無で

はないのだが、世間知らずなこの生徒はそんな疑惑のあるポップの正体を探る危険な役目を頼まれもせず自ら買って出てくれたのである。
気が気でない様子のコルベールに意地の悪い笑みを浮かべ答えたオスマンが杖を振ると、部屋の端に置かれている大きな鏡にヴェストリの広場の様子が映し出された。

＊

襲い掛かるワルキューレに足を引っ掛けて転がし、詰め寄られてから慌てて杖を振ろうとするギーシュの顔面を殴り飛ばしたポップは、背後で起き上がろうとするワルキューレを視界に入れるよう距離を開け、
「ぶん殴られても杖を手放さなかったのは褒めてやる。
けどよ、相手が魔法を使わないからって舐めてると見せ場なしに負けちまうぜ？
ほれ、待っててやっから全力を出してみな」
と、不敵な笑みを浮かべながら挑発するかのように指で差し招いた。
ポップの職業は非力な魔法使いだが、普通では到達不能な高レベルかつ大魔王を筆頭に様々な強敵と戦いを繰り広げ生き延びた歴戦の猛者であり、鍛え上げても凡人レベルの攻撃力を除けば超一流の戦士や武闘家にも劣らぬ高い能力とアバンやマトリフの教えを下地に、濃密な戦闘経験から築き上げた独自の必勝パターンをいくつも持っている。
今回はルイズに見せる目的で一般人にも再現可能な程度に抑えているが、本来なら青銅で作られたゴーレム程度は素手でも少し手間取る程度で問題なく叩き壊せるだけの実力があった。
「くっ……な、嘗めるなァァァァァァァァッ!!」
「あれだけ言っておいてギーシュったら情けないわねぇ、タバサもそう思わない？」
「逆」

「逆って何が？」
「青銅が弱いのではなくあの使い魔が強い。
彼は攻撃のタイミングを読んでいる。
でも、高度な技術は使ってない。
それなりの実戦経験があれば到達できる動き」
「ふーん、見た感じパッとしないけど喧嘩慣れしてるのかしら？」
「恐らく」
怒り狂って5体のワルキューレを追加するギーシュ、つまらなそうに眺めるキュルケとは対照的にそれまで読んでいた本を閉じ顔を上げるタバサ、立ち去るタイミングを逃したシエスタは逃げ回るポップに悲鳴混じりの声援を送っているが、挑発を強がりと判断したルイズは怪我をしない内に降参するようしつこく呼び掛けている。
派手に逃げ回りながら徐々にギーシュから離れるポップ、数が増えた上に距離が開いたワルキューレの動作は最初と比べてかなり大雑把なものになり、合い間に地面から土の手を生成して対象の足を掴んだり土礫を飛ばす呪文を唱えてはいるが、遠くで動き回る目標に命中させるだけの技量がないので精神力の無駄使いでしかない。
もう1歩で捕まえられそうな状況が何度も続き苛立ったギーシュは、役割分担して回り込ませるなり包囲させると言った戦術もなくひたすら逃げるポップの背中を追わせる事にのみ集中する。
頭に血が上っているのか、喜劇じみた攻防の末に6体のワルキューレを引き連れて走るポップが捕まらない程度に速度を調節していたと気付けなかったのが勝負の別れ目、ある程度まで距離を稼いだポップが反転加速して追っ手を引き離した時点でやっとギーシュも危機感を覚えたらしく、呪文の乱発で消耗した精神力を振り絞ってワルキューレを生成しようとしたものの、詠唱の途中で距離を詰められ抵抗する間もなく杖を奪われた。
「さて、まだ続けるかい？」
「残念だが杖を失くしては勝ち目もない。
平民相手と僕は慢心していたらしい。
諸君、このギーシュ・ド・グラモンは無様ながら平民に敗北した！

どうか勇敢なる勝者に祝福の拍手を送ってやってくれたまえ」
投げ掛けられた降伏勧告に抵抗や反論もなくあっさり降伏するギーシュ、自嘲の笑みを浮かべ舞台役者じみた大げさな仕草でポップの腕を持ち上げ朗々と自身の敗北を宣言し、周囲に同意を求める視線を送る。
芝居掛かった敗北宣言に応え、お義理で数人が拍手するとそれに釣られるようにして拍手の量は増えたが、全体的に見て祝福の笑顔より困惑や憮然とした表情を浮かべている者が圧倒的に多かった。
それも当然、貴族〉越えられない壁〉平民こそがトリステインの常識であり、平民が貴族に逆らった上に決闘を行ってしかも勝利する異常な状況をすんなり受け入れるのは不可能だったからである。
数秒の思考停止から立ち直った者がギーシュの潔さを褒め、他の者もそれに追従するような賞賛の言葉を述べるに至り、まばらだった拍手は満場の歓声に変わった。
つまりあれは、平民の実力ではなく貴族に立ち向かう勇敢さに心を打たれたギーシュが勝ちを譲ったのだと解釈し、貴族と平民の決闘ではなく即興の茶番劇だったのだと受け入れ難い現実を書き換えたのである。

＊

「……ポップ君が勝ってしまいましたね。
しかも、武器や特殊な技術を使わずにドットメイジを手玉に取った。
ですがオールド・オスマン、もし彼に特殊な能力があったならもっとスマートに戦うのではないでしょうか？
手際こそ見事でしたが、あれでは喧嘩に慣れたそこらの若者と大差ないように思えます」
「確かにの。
グラモンの子倅が抜けておった分を差し引いても見事な作戦勝ちじゃったが、ポップ君の戦い方から高度に洗練されたものは見られな

んだ。
とは言え、数体のゴーレムを差し向けられ、避け損なえば大怪我か下手をすれば死ぬかも知れんような状況で躊躇なく動き回れるなんぞ素人の域を超えておるわい。
それとこれは興味本位の質問なんじゃが、ミスタ・コルベール……いや、炎蛇のコルベールはあの少年と戦ったとして勝てると思うかね？」
半ば疑うようなコルベールの感想に答え、結果ではなく前提を踏まえた見解を述べてから逆に質問したオスマンだが、緩い表情やのんびりした口調でごまかしてはいてもポップに対する隠し切れない警戒心がその瞳に宿っていた。
だがしかしそれも当然、内容そのものはお粗末な喜劇じみた展開だったにしても場慣れした素人レベルの技量でドットメイジを出し抜くなんて曲芸を見せられては、大半の者は偶然の勝利と誤解するだろうし現に経験の浅い生徒らは完全に騙されているようで、ほとんどの者が平民に勝ちを譲ったと解釈している。
「そうですね、彼は見た目とは裏腹にかなりの実戦を経験しているのは間違いないと思います。
私が戦うとすれば、その時の状況や準備の有る無しで勝率は変わるでしょうが、少なくともポップ君はラインメイジと戦っても勝てる程度の実力はあると見るべきでしょうね。
とは言え、彼は問題解決の手段として安易な暴力よりも対話を好む理知的な人物のようですし、勝ち負け云々を考えるのではなく戦いを避ける手段を考えるべきだと私は思います。
結論を言えば、あからさまにならない範囲で便宜を図りつつミス・ヴァリエールと友好関係を築かせるのが賢明ではないかと？」
「うむ、それが無難じゃろうな。
しかしそうなると今回の騒ぎが大きくなるのはちと都合が悪い。
どうせ授業を休む予定だった事じゃし、見せしめも兼ねてミス・ヴァリエールを自宅謹慎にして決闘禁止のルール違反には厳罰で臨む姿勢を示せば下手な手出しをする者もおるまいよ」

穏やかな笑みを浮かべ同意を求めるコルベールに答え、愉快げに笑って肯定するオスマンだったが心中は穏やかでない。
もし今後の対応を間違えれば、国内有数の大貴族であるヴァリエール家や個人的にはもっと怖い烈風のカリンを敵に回す状況だと言う事に今更ながら気付いてしまったからである。

＊

「おお！
『我らの拳』だ！
『我らの拳』が来たぞ！」
「何ですか、その『我らの拳』ってのは？」
シエスタを送って調理場を訪れたポップに突進する勢いでマルトーが声を張り上げ抱き付こうとしたが、するりとかわされ転びそうになったところを腕を引っ張って助けられると言ったやり取りを数度ばかり繰り返し、押し留めてから仕切り直しも兼ねて問い掛ける。
「お前さんは、いけ好かねぇ貴族の小僧をぶん殴った上に全力を出させてから勝ちやがった。
普通の平民が貴族に勝とうと思ったら不意打ちするか、媚びを売って油断させといてから騙し討ちにするくらいしか手がなくって、その場は勝てても後んなって腹いせに家族や親戚どころか下手すりゃ関係ない奴らまでぶっ殺されちまうってのに、きっちり負けを認めさせて自分は怪我なしと来てやがる。
だからお前さんは『我らの拳』なのさ」
「んなこたぁねぇ、メイジなんてのは魔法を使えるってだけの人間だよ。
俺の故郷にゃ人間離れして強ぇ戦士やら武闘家がゴロゴロいたし、知られてないだけで探せばこっちにもいるんじゃないですか？
確かに貴族に魔法を使える奴は多かったが、魔法が使えるってだけで偉いってな考え方はほんの少数だったし、そもそも魔法にあんま良いイメージがないですからね」

語る側のポップ本人にしてもトリステインの常識からして荒唐無稽な内容だと思っていただけに、マルトーら聴衆からは法螺だらけの愉快な与太話だと笑われても気にはならなかったが、間近で戦いぶりを見ていたシエスタのみが瞳をまるで夢見る子供のように輝かせていた。

そんなシエスタの様子を面白がったマルトーがいっそポップに弟子入りすればどうだと唆し、盛り上がっていた場の勢いもあって新たな弟子が増えたのは、ある意味で当然の流れだったのかも知れない。

〔憂鬱な里帰り　前編〕

決闘騒動の処罰としてお目付け役のコルベールを連れて3日の自宅謹慎となったルイズ、表面的には学院からヴァリエール領までの移動に必要な時間が片道2日半である事を考慮すれば停学一週間（ハルケギニアの暦で8日）を言い渡されたギーシュとは痛み分けのように思えるが、実家に報告の手紙を送られるだけのギーシュに対し家庭訪問されるルイズの方が厳しい処分を受けたと大半の者が見ていた。

「……殺される。

規則で禁止されている決闘をした上、罰で自宅謹慎になりましたなんて言ったらお母さまは確実に激怒するわ」

「安心なさいミス・ヴァリエール、昨日の内にオールド・オスマンが今回の経緯を手紙にして貴女の実家へ送っているそうです。

それに私もお母上の怒りが収まるよう取り成しするつもりですから元気を出しなさい」

虚ろな表情で小刻みに震えるルイズを心配してか、取り成すような口調で肩を叩くコルベールの背後、処置なしといった様子で肩を竦めるポップの隣にどことなく浮かれた表情を浮かべたシエスタが歩み寄る。

「あの私、貴族様の馬車に乗るの初めてなんです。

普段は荷馬車か乗り合い馬車だからちょっと緊張しちゃいますね」

「悪いなシエスタ、今回はこいつを使うから馬車はなしだ。

ルイズ、実家を想像しながらこいつを投げてみてくれ」

「何なの？

やれと言われりゃやるけど何か意味でも……」

ポップの差し出す金属の柄が付いた大き目の羽根飾りを死んだ魚のような瞳で受け取ったルイズがそれでも律儀に投げ上げた瞬間、同行者と判定されたポップ、シエスタ、コルベールと馬車が光に包まれて飛び去り、どこかの城内らしき庭園の池に浮かぶ小船の上へと落下した。

驚いて暴れる馬の声に駆け付けたらしき使用人らも含めて誰もが

呆然としていたが、知識の多さから状況と原因を理解したポップがバツの悪そうな苦笑いを浮かべて頭を掻き
「ルイズが使った『キメラの翼』は便利なんだが、目的地の付近に何かしら強い思い出がある場所とかがあるとそっちのイメージが優先されちまうみたいでな。
ここはルイズにとって、よっぽど思い入れの深い記憶がある場所なんだろうよ」
と、あまりフォローにならないフォローを入れたが、ルイズからは事前の説明不足を責められ好奇心に火がついたコルベールからは質問攻めにされ、貴族用の馬車に乗るのを楽しみにしていたシエスタからはジト目で見られてしまった。

＊

騒ぎを聞き駆け付けたルイズの母カリーヌから魔王級のプレッシャーが飛ばされ、幼少時のトラウマを発動させたルイズが池の水ではない水分を撒き散らしそうになったり、事情を説明しようとしたコルベールの不得要領な発言で逆に場の空気が悪くなるなどのちょっとしたトラブルはあったが、事前にオールド・オスマンから説明の手紙を受け取っていた事と場慣れしたポップの取り成しによって詳しい説明は夕食の後ですると約束しただけで一行は開放され、まずは濡れた身体を何とかすべく風呂場に案内された。
実際カリーヌ側からすれば、ヒステリックに騒いでいたルイズの淑女らしからぬ行動とコルベールの歯切れの悪い説明に不快感を抱いていただけであり、愛娘が魔法を使えるようになるかも知れないと書かれた手紙に一縷の望みを託しているのだからわざわざ邪魔をしようとは思わないし、件の家庭教師とやらも見た目に似合わず思わず決闘を申し込みたくなるくらいの実力者だと直感したので逆に期待していたりする。
それでも鋼鉄の規律を信条とするカリーヌは翌日から自宅謹慎３日の処分をきっちり受けさせると明言したが、とある縁から学院に来

訪した東方の賢人でルイズの家庭教師を引き受けた人物としか紹介されてないポップはお咎めなし、ギーシュとの決闘は使い魔の主人であるルイズが行ったものとして処理されており、色々と面倒な説明を嫌ったオスマンの手紙にも決闘の詳しい経緯や内容は書かれてない。

＊

視点変更：ルイズ

＊

「これから3日間、許可なくこの部屋を出てはなりません。
食事は運ばせますし、風呂とトイレは奥の扉、あなたが連れて来たメイドを連絡役として隣の部屋に控えさせます。
それと同行した教員と家庭教師ですが、彼らには謹慎期間中の授業を遠慮してもらう代わり、領内での自由行動を許可しました」
平坦な声で切り口上に述べたお母さまが立ち去り、付き添っていたシエスタにも呼ぶまで自由にしてて良いと告げてしまえば、暇潰しになりそうな本や遊具の類が取り除かれた部屋でする事はなく、謹慎中の立場で何をしたものかと歩み寄った窓際から外の風景をぼんやり眺める。
こうして一人になると考えてしまうのが、わたしの使い魔として召喚されたにも関わらず気付けば家庭教師となっていた黒髪の少年、地図では確認できないくらい遠くの出身らしい彼はポップと名乗り、口が悪くて無礼だけど食堂でしょっちゅう隣に座る風邪っぴきみたく変な目で見たりしないし、魔法を使えないからって憐れんだり馬鹿にする連中と違い対等な人間として扱ってくれた。
家族にだってわたしを憐れんだり辛そうな目で見られる事があったし、領民や使用人からは尊敬されるどころか腫れ物扱いで魔法に関する話題を避けるよう気遣われる始末、授業で指名される度に爆発を起こしまくった学院では鼻摘みの嫌われ者となっており、罵倒やから

かい以外の目的で話し掛けて来る物好きは変人で知られるミスタ・コルベールくらいしかなく、同世代の男の子とまともな会話したのは何気に初めてだったりする。

他に対等の会話をした男性は婚約者のワルドくらいだが、彼は十歳も年上かつ数年前に魔法衛士隊で出世してから音信不通となっており、今でも鮮明に思い出せる優しい笑みと言葉を再会した時にもくれるかどうかすら不明だし、そもそもが酒宴の席で交わされた親同士の口約束である以上、わたしの事などすっかり忘れて恋人を作ったり結婚しているかも知れない。

口約束と契約は違う事くらい知ってるし、だけどわたしは自分を特別扱いしてくれる人が欲しくって、ワルドが優しかったのは婚約者に対する愛情からじゃなく、それを誰も訂正してくれなかったのは子供の戯言と思い相手にしてなかったから……これ以上は考えても惨めになるだけね。

婚期に焦ったエレオノール姉さまに横取りされるとか、本当はちいねえさまが好きだからそっちに乗り換えるみたいな最悪の未来と比べれば、子供の頃に憧れた人が自分の婚約者だと勝手に思い込んでた痛い子って方が気分的にはいくらかマシだし、それこそ魔法が使えないわたしに愛想を尽かしての婚約破棄とかになったら立ち直れなくなるわ。

気性が荒いエレオノール姉さまは婚約者に逃げられてばかり、病弱なちいねえさまは子供を望めない身体と言われてて、残るわたしが婿を取らないとヴァリエール公爵家は断絶する以上、このまま魔法が使えなくても学院を卒業したら結婚させられる事だけは確実だ。

優秀な研究者でもあるエレオノール姉さまの婚約相手はすぐに見つかるが、魔法を使えないわたしだと家柄と財産が目当てで婿入りするみたいな汚名が付きまとう為、そうなると外部の人間ではなく一族を支える郎党の誰かと結婚させられそうな気がする。

この後、落ち込んだまま変な方向に思考が迷走し、昼食を持って来たシエスタが心配して声を掛けるまで続いた。

＊

「では、何か御用があれば控え室までお声を掛けて下さい」
シエスタに一人になりたいと告げて退室するのを見送り、改めてポップの正体と言うかどんな奴なのかを考える。
わたしに平民呼ばわりされてそれを認めるような言動はしてたが、そこらの平民にメイジであるギーシュを殴り倒せる度胸はないと思うし、足はそんなに速くなくても6体のゴーレムに追い掛けられて逃げ切るとかわたしだったらまず無理ね。
それと昨日の朝に渡された装飾品みたいなマジックアイテム、放り投げるだけで思い浮かべた場所に瞬間移動できるとか意味わかんないし、一昨日の授業中にわたしとミセス・シュヴルーズを助けた方法もあれだったのかしら？
東方までは飛べないだろうが、ポップのマジックアイテムは学院と家を一瞬で移動できたし、使用回数や条件は不明だけどかなり高価であろう事は間違いなく、他にも何か凄い薬を使って自分の怪我を治したとかミスタ・コルベールが言っていたので、実は大きな商家の跡取り息子が修行で行商中に召喚されたみたいな感じなのかも知れない。
東方にはこちらと異なる独自の文化や技術があると言われており、どこかの商人が王都で売り出した緑色をしたお茶と風変わりなお菓子とかお父さまがちいねえさまの薬として取り寄せた臭くて茶色い塊なんかも東方の産物と聞いてるし、何年か前に社交場で流行した折り畳めない扇や細長いヘアピンも東方のデザインを参考に作られたらしく、東方から嗜好品や装飾品の類を取り寄せるのは貴族や豪商が自身の力を示す為によくやるアピールである反面、それっぽく拵えた偽物の販売や交易隊のパトロン募集を騙った詐欺が横行している。

＊

東方に関する考察でおよそ2時間経過

＊

又しても思考が他所に逸れてしまったが、こうやって考えてもポップは出会って数日の相手だし、少し口が悪くて無礼だけどそんなに意地悪じゃなくって、不思議なマジックアイテムを持っててギーシュが油断してたとは言え決闘に勝ったくらいしか分かんないのよね。

参考までにシエスタの意見を聞きたくなって控え室を覗いたら熟睡してて、呼ばれるか夕食までに起きるつもりだったとか昼寝が趣味なんですとか、聞いてもないのに控え室にあるベッドの寝心地を褒めてたけど控え室で待機してるのも仕事の内だし、貴族の傍付きをしてるのに居眠りどころか堂々と昼寝するとは、この娘ってば大人しそうな見た目のくせに不真面目と言うか神経が太過ぎるわよ。

立場的に学院所属のメイドだから本来はミスタ・コルベール付きだし、こっちから一人になりたいと言った手前もあって文句を言い難く、起こした際にこちらが気の毒になるくらい謝られたのを改めて責めるってのも後味悪いから軽い叱責だけで不問とする。

何だか今日は考えが上手く纏まらないし、ここ数日の寝不足もあって夕食まで仮眠を取るとシエスタに告げたのだが、それなら愛用するマジックアイテムの予備があるからと強く勧められて差し出された枕を試してみたら、夢も見ないで熟睡したのか気付いたら明け方になっていた。

平民にも買えるくらい安い値段のマジックアイテムなんてどうせ偽物だと思っていたのに、少し変わった形と何かの花みたいな匂いがする以外はそこらにありそうな枕でこんなにぐっすり眠れるなんて驚きね。

……って、謹慎中なのに昼寝してたら次の日になってるとか、お母さまに知られたらエア・ストームでぶっ飛ばされるじゃないの！

その後、無駄と知りながら朝食を運んで来た使用人に口止めを頼んだが、昨日の夕食時には報告されてたけれど怒るお母さまをポップが取り成し、監視役のミスタ・コルベールからオールド・オスマンに報

告して追加の罰則を科すか否かを裁定してもらう事で何とか収まったらしく、何とか命拾いできた幸運を始祖ブリミルに感謝する。

＊

「ポップさんをどう思っているか、ですか？

第一印象は凄い力持ちでした。

こーんな大きな鍋を担いだまま走ってて、しかも中にいっぱい水が入ってたのにちっとも零してなかったんですよ！

だから怖い人かと思ったけど話したら凄く気さくな方で話してても退屈しないし、自然な流れでドアを開けたり荷物を持ってくれるとかの気遣いもしてくれて、私には弟しかいないけどもしお兄ちゃんがいるとしたらこんな感じかなって思いました」

朝食を食べ終え、昨日は寝てしまって聞きそびれたシエスタの意見を聞いてみたのだが、どうして水が入った鍋を背負って走るのか前後を説明しないとわけわかんないし、両腕を大げさに広げるものだから一人じゃ絶対に持ち上がらないサイズになってるし、そもそも水をいっぱい入れて走ったら撒き散らすかバランス崩して取り落とすかのどっちかになるわよ。

それとあいつが兄みたいな感じってのは何となく分かるけど、力持ちで気さくで話題が豊富で気遣いできるなら恋人にしたいとかは考えないの？

「えっとその、例えが恋人じゃない理由は、ポップさんが凄くて優しい人だとは思っているんですよ。

だけどやっぱり私もお年頃ですし、彼氏にするなら劇場で『烈風のカリン』役を演じているファビアン様みたいな美形とか、相棒のサンドリオン役を演じているクレマンさんのような渋い大人の男性が好みでして、何と言うかポップさんは家族とか友達よりも遠いけど他人じゃないくらいの距離感ですかね。

例えて言うならば、近所に住んでる仲の良いお兄さんとか頼れる仕事仲間みたいな、男女の関係は考えられないけど好ましい異性って感

じ、ミスタ・コルベールのような人って言えば分かりますか、間違いなく良い方なんだけど恋人は違うなってイメージですよね？」

……ノーコメントで、と言うか男性は見た目も大切だけど学院の生徒みたく内面が駄目だと意味ないわよ？

この後も変な勢いのまま異性談義が盛り上がってたらお昼になり、食事が終わってからは学院に勤める使用人や生徒のゴシップを語りたがるシエスタの圧力に負けて聞き役に徹し、気付いたら夕方になっていたので食事と入浴を済ませて今度こそポップの正体を考えようとしていたのだが、ワイン瓶を抱えた酔っ払いの襲撃でそれどころではなくなった。

翌朝、昨夜の乱行狼藉をすっぱり忘れていたシエスタには禁酒を言い渡し、恐らく善意だろうがワインとチーズを差し入れた犯人に文句を言ってやろうかとも思ったが、お母さまに知られれば間違いなく大事になるので不問とする。

＊

謹慎中の3日間、意図的に触れないようしていたが、そろそろ現実を受け入れテーブルに置いた羊皮紙と向き合う事にする。

帰宅した日の夜に良く考えてサインするよう告げられ渡された『魔法使い養成スペシャルハードコース受講申込書』って表題の契約書、副題に添えられたスペシャルハードの文言が気になり詳しく読み込んで見れば、怪我や危険な修行に文句を言わないとか最悪だと命を失う可能性すらあるみたいな恐ろしい内容が列記されていたが、ポップに問われた際に下手な冗談と思っていたにせよ『魔法が使えるようになるなら命くらいいくらでも掛けるし、どんな無茶苦茶な修行だってする』と答えた以上、気が変わったから難易度を下げたコースにしてくれとかは格好悪くて言い出せない。

ちょっと口が悪くて無礼だけどシエスタが優しいと評するポップなら脅かしてるだけだろうし、実際の授業はミスタ・コルベールが担当するだろうからには、本当に危険な行為をやらせようとしても止め

てくれるはずであり、恐らくこの書類はわたしのやる気と覚悟を試す代物でしかないはずだ。
もしかすると東方のメイジに伝わるとても危険な修行法を知っているのかも知れないし、恐らくあり得ないだろうけど実はポップもメイジでわたしを本物の魔法使いにしてやるって言葉が本当だったり、たまたま向こうの教本とかを持ってて翻訳してくれるだけの可能性もある。
少なくともオールド・オスマンが許可を出している以上、ポップの修行には授業を休んでも受ける価値があると判断したのだろうし、実際に魔法が使えるようになる可能性があるなら多少の危険は受け入れるつもりだ。
いくら考え込んでも魔法が使えるようになる可能性を逃す選択肢はわたしになく、何だかんだと昼食後まで悩んだものの覚悟を決めて書類にサインし、そこでポップに支払う賃金をいくらに設定すれば良いか決め兼ねていた事を思い出す。
手付けとして新金貨１００枚、食費などの必要経費と別途に月額エキュー金貨１５枚、働きに応じてボーナスを出すと言ったが、あれは貴族が住み込みの使用人を雇う場合の給与から算出した金額であり、相場があってないような家庭教師の給与は雇い入れる側の家格と財政状況で金額が変動するだけでなく、月謝にするのか支度金だけ渡して残りは成果に応じるみたいな支払い方法の違いもあるし、本当に魔法が使えるようになったとしてその給与が使用人と大差ない金額でしたとかお母さまに知られたら怒られるだけでは済まない。
とりあえずは最初に決めた給与を払うとして、目に見える成果を出せたらボーナスを支払うみたいな文言を契約書に入れれば、実際に魔法が使えるようになってから増額とかの対処が可能だし、逆に最初から好条件で雇って魔法が使えないままだとお父さまの怒りに触れたポップが詐欺師として牢屋に入れられたり、最悪だとそのまま無礼打ちにされて晒し首とかも大げさでなくあり得る。
何年も前になるが、ちいねえさまの病に効果があると称して麻薬の類を売り込んで来た男は、見せしめも兼ねてロマリア本国から呼び寄

せたブリミル教の高位司教から破門を言い渡した上で火炙りの刑に処されており、そこらも踏まえて契約書にサインしたのは自分の意思であるとお父さまに伝えなくてはならないが、事前にオールド・オスマンからお母さまに説明の手紙が出されているし、卒業まで2年間も時間があれば結果を出せなさそうなら逃がすとかの対処も可能な為、大怪我にだけ注意して後は今回の修行を受けてから考える事にした。

後に色んな意味でこの判断を盛大に後悔するのだが、当時のわたしはポップにそこまでの期待をしてなかった為に自分が何の書類にサインしたか理解してなく、それでも過去に戻れたとしてコースの変更やサインの拒否だけはしないと確信している。

＊

ルイズ視点終了

＊

ルイズの予想は半分くらい当たっており、少なくともポップは人死にの出る授業をするつもりはないし、コルベールが同行している理由は本人が休暇申請してまで監視役を名乗り出たからでしかなく、オスマンが個人授業を許可した理由に至っては駄目で元々くらいの軽い気持ちでしかない。

そして肝心の授業を行うポップだが、アバンに師事していた一年間で満了した受講者がいないスペシャルハードコースの授業内容に関しては、通常の特訓に加えて早朝と夕方も特訓する程度の知識であり、困った時は師匠に相談とばかりに異世界転移と弟子取りの報告も兼ねてマトリフが隠遁する洞窟に瞬間移動呪文（ルーラ）していたりする。

〔授業の準備と報告〕

ルイズが謹慎する3日間の自由行動をカリーヌから言い渡されたポップは、とりあえずコルベールから学院の授業内容と系統魔法に関する情報を大まかに教わり、解説付きで実演されたコモンや火系統と先日の授業でシュヴルーズが使用した土系統を参考にし、魔法力の流れを模倣しながら翌日の夕方まで色々と試行錯誤した結果、ドットのみではあるがいくつかの魔法を再現できるようになった。

とは言え、メイジがルーンを唱えるだけで発生する諸々の過程を人為的に再現している為、火球呪文（メラ）と効果内容が近いファイアー・ボールを発動しようとした場合、不慣れな事もあってか倍近い魔法力を消費する上に威力は半分以下で数秒のタイムラグが発生する。

普通に考えて無理のある行為と思えるだろうが、例えるなら未知の言語で書かれた文章を一枚の絵として模倣する作業に近く、書き起こす側が文字や文章の意味を理解できなくても読み取れる完成度に仕上げれば問題ない代わり、お手本の誤字脱字や悪筆などもコピーするし普通に文章を書くよりも手間暇が掛かるのと同じで、本来不要だったり間違っている部分も再現しているのでお世辞にも効率が良いとは言えなかった。

幸運にも参考元のコルベールとシュヴルーズはトライアングルメイジであり、何となくで魔法を使っている学生とは比べ物にならない洗練された技量を持ってはいるが、それでも魔法が発生する過程や基本的な原理が宗教者の説法により始祖の恩寵とされる社会では、先達が遺した経験則や個人の感覚を頼りにルーンの発声から手探り状態で研鑽するしかなく、過去に行われていた先進的な研究資料の大半は異端として焚書されている。

だからこそ学院の教員には高い技量を要求されるのだが、腕の良いメイジだから必ずしも優れた教師になれるかと問われればそうでもなく、生徒が決闘騒ぎを起こしても本気で止める気概のある者は少数であり、残る大半の教員は面倒回避と我が身可愛さに日和見する始

末、そんな教育体制で育った者が次世代を担うのだからトリステイン王国の未来は明るくない。

そんな訳でコルベールから得られた情報は少なく、本当に教員なのか疑うくらい大雑把で曖昧な説明を聞かされ唖然としたポップだが、実演された系統魔法を観察していた際に精霊魔法との互換性が存在する事を発見しており、精神論の延長線でしかないトリステイン方式は参考にしないと決めた。

そうなると自分が受けた教育課程を参考にすべきなのだが、短気で面倒臭がりなポップにアバンの懇切丁寧な授業を再現できるとは思えないし、生きるか死ぬかのマトリフ式を本人が希望しているからとそのまま適応するのは流石に色々と問題がある。

ルイズ本人の希望もあり書類まで用意したが、多少の暴力は仕方ないにせよ貴族令嬢かつ年下（とポップは思っている）の少女を虐待紛いの超スパルタ式で鍛えるとなれば、それなりの手加減を考えないと家族や監督役のコルベールが黙ってない。

少なくともルイズの両親から許可を得るまでは基礎固めを重視し、本来のスペシャルハードコースよりもかなり温いメニューで様子見になるだろうが、とりあえず3日間の修行で簡単な魔法が使えるようにすれば説得の材料として申し分なく、コモンくらいなら魔法力の流れを直接身体で覚えさせれば簡単に使えるようになるはずであり、どうしても無理そうなら火球呪文（メラ）なり真空呪文（バギ）を教えてそちらから魔法力の流れを覚えさせるまでだ。

コルベールに礼を言って別れたポップは、尊敬する先生と師匠のどちらに相談を持ち掛けるか少し考えたが、カール王国の復興に勤しむ先生より隠遁生活を送っている師匠の方が暇だろうと判断し、近くを通り掛かった使用人に少し留守にすると言付けて人気のない場所まで移動してから瞬間移動呪文（ルーラ）を唱え、トリステイン王国からホルキア大陸へと次元の壁を越えて跳躍する。

＊

「よぉバカ弟子、可愛い娘っ子を二人も置いてどこほっつき歩いてやがったんだ？
本来なら灸の一つも据えてやるとこだが、理由を考えたら気持ちは分からんでもないし、茶くらい出してやるからとりあえず中に入んな」
予想以上の魔法力消費に思わず座り込もうとしたポップだが、背後から竿と魚籠を持ったマトリフがタイミング良く現れそのまま洞窟内に連行された。
定位置とも言えるベッド脇の椅子に腰掛けたポップは、出された茶を飲みながらルイズに召喚される直前くらいまでの出来事をざっと説明し、それを瞑目しながら渋い表情で聞き終えたマトリフが額に手をやり大きく嘆息する。
「……魔法使いのお前が一人で破邪の洞窟を１７２階まで潜るとか、消耗を避けて戦わないよう逃げ隠れしながらだとしても正気の沙汰じゃねぇな。
洞窟内に漂う邪気のせいで迷宮脱出呪文（リレミト）は使えねぇし、強敵との戦いや怪物部屋（モンスターハウス）に踏み込んで魔法力が尽きたりとか、そうでなくても魔法を封じられたり使えなくなるような罠にでも掛かればなぶり殺しにされるだけだろうに、ミスったらフォローしてくれる仲間もいない状況で自己犠牲呪文（メガンテ）を食らいながら良く生きてたもんだ」
「まあ、先生と姫さんに貰ったシルバーフェザーや買い集めた魔法の聖水を持ち込んでたし、１５階の破邪呪文（マホカトール）を覚える以外は床を貫く程度に弱めた極大消滅呪文（メドローア）を真下に撃って１５０階まで移動するだけの作業に近くて、魔法力が足りなくなったら適当な小部屋か階段の途中に結界を張って瞑想するくらいだから体力的な苦労はそんなにしてねぇんだわ。
１５１階からは透明化呪文（レムオル）とか飛翔呪文（トベルーラ）で可能な限り戦闘を避けながらの探索作業と食料の補充に時間を取られたが、魔物を避けながら移動するのに慣れたら魔法使わなくても良くなった（しのびあしを習得）おかげで、無駄に広くて複雑な階層を巡るのが楽になったしな。
それでも何度か不意打ち食らって痛い目を見たが、魔法の連発とブ

ラックロッドの伸縮機能を使えば即死以外は切り抜けられる自信があったし、変な鏡に気を取られて自己犠牲呪文（メガンテ）を食らわなきゃ今でも潜り続けてたと思うぜ」

呆れるマトリフにそう軽い口調で返すポップだが、本人は危険と気付けなかっただけで危機一髪な状況を何度もすり抜けており、人類の尺度を超えた驚異的な運の良さと思い切りの良い行動をしていた事が上手く作用し、大半の怪物部屋（モンスターハウス）を入る前から察知して殲滅または回避するだけでなく、凶悪な罠が仕掛けられていても作動させずに通り過ぎる豪運っぷりを発揮していた。

「この野郎、人間の神が遺したと言われてる破邪の洞窟を極大消滅呪文（メドローア）でショートカットするとか、そんなイカれた発想したとしても本当に実行に移しやがるのは、それこそ神をも恐れぬ蛮行だって理解してんのか？

まぁ、大魔王が地上を消し飛ばそうとしてるのにロクな手助けも寄越さなかった神なんざ敬えとか言われてもお断りだし、それを阻止した功労者のお前が罰当たりだってんなら俺に残ってるなけなしの信仰を捨てるわな。

何はともあれ無事に帰って来たんだからそれで良し、最後に会った時は見れたもんじゃねぇ顔してやがったってのに、今は元通りとまでは行かないにしても落ち着いたようで安心したぜ」

「あの頃は頭ん中が悪い方向に煮詰まってて、破邪の洞窟をひたすら降りてたら何か凄い魔法とかアイテムがあるんじゃないかって思い込んでたが、今になって考えたらあそこは破邪系の呪文とかを契約する為の試練として人間の神が用意した場所らしいし、どうせ探すなら天界に行く方法とかにしときゃ良かったぜ」

「そこまで頭が回るようになったんなら大丈夫そうだな。

……嫌な話になるが、アバンやマァムらに会うのはしばらく止めとけ、どっちも妙な連中が張り付いてて面倒な事になっていやがる」

ポップの軽口に突っ込みを返していたマトリフだが、柔らかい笑みを浮かべて安堵の息を吐いてから表情を引き締め忠告する。

「お前が半殺しにしたってクソガキ、詳しくは知らんがオーザム騎士

団の生き残りだか関係者の息子らしくて、オーザムとリンガイアの復興作業を主導してた連中が新世代の勇者って祭り上げてたみたいなんだわ。
　それと新しい魔王が現れたって噂を広めたのもそいつらで、元はアバンの使徒だったのにバーンと戦ってる途中で魔王軍に寝返った卑劣な魔法使いとか言われてるらしいんだが、百獣魔団を打ち破った功労者としてお前の顔と名前が知れてるロモス以外じゃあかなりの信憑性があるんだとよ！」
「ってか、元から知名度の低かったロモス以外じゃメルルはマァムの従者扱いで俺も荷物持ちくらいに思われてたし、どーせ根拠もなしに魔物や魔族が悪さしてるって騒ぐから論破したり、下心丸出しでマァムに寄って来るのを邪魔された奴らが、ここぞとばかりに腹いせで広めたんだろうぜ。
　国を滅ぼされた連中がそれに煽られて、つまらねぇ八つ当たりの槍玉に挙げられたってとこだと俺は思ってるんだが、それとも師匠は何か別の理由があるとでも思ってんのかよ？」
　吐き捨てるように言ってそっぽを向くマトリフに対し、皮肉気な薄ら笑みを浮かべ受け流すポップだが、冗談交じりに行った質問に返って来たのはこちらも皮肉気な薄ら笑いだった。
「前にも話したかも知らんが魔王時代のハドラーを討伐した後、俺はパプニカの宮廷に相談役として招かれ一時だけ出仕してたんだが、根性のひん曲がった貴族連中につまらねぇ嫌味を言われながら飼い殺しにされるのが馬鹿らしくなって下野したんだわ。
　それと直接聞いた訳じゃねぇが、カール王国の騎士団長だったロカは職を辞してレイラとマァムが住む魔の森に引っ込んだし、地獄の騎士からヒュンケルを託されたアバンが国元で婿入りせず放浪してた理由も少し考えりゃ察せられるわな。
　お前は面倒事に巻き込まないつもりで姿を消したみてぇだが、それでも元からアバンの婿入りに反対してた貴族連中は責任問題がどうこう言い出しやがったし、マァムの方にも貴族や金持ちの息子とかが嫁に迎え入れようと群がっていやがった。

つっても待ちに待たされてたフローラ女王が反対派の連中を隠居に追い込んだらしいし、マァムの方もでかい岩石を叩き割って夫婦喧嘩は命懸けになるけどそれでも求婚するのかって聞いたら次の日からは激減したらしいがな」

マァムはバーン討伐の功労者な上に美人かつスタイルが良くて慈愛に満ちた性格の持ち主であり、加えてパプニカ王国のレオナ姫とは親友関係でロモス王国のシナナ王とも友好関係を築いている。

どの要素から見ても嫁に欲しい超優良物件であり、告白したものの保留に近い返答をされたポップからすると今すぐにでも駆け付けたくなるが、人間至上主義を拗らせた勇者気取りの青年とその仲間を半殺しにした上に拠点としていた街を廃墟に変えた事件で魔王呼ばわれされている現状、これ以上の悪評が広がって実家や故郷の村におかしな連中が押し寄せる事態だけは避けたく、自分が顔を出さなくてもマァムの遠回しなお断り（物理）で何とかなりそうなんだから場を引っ掻き回すべきではないと無理やり納得した。

なお、メルルにちょっかいを掛ける者は少なかった上、純然たる善意でマァムが撃退していたのでポップの出番はほとんどなく、誰も助けが来なかった場合には好きな人がいるから無理とストレートにお断りし、それでも迫るような輩は最初から嫌な予感がするので近寄らないようにしている。

「やっぱ、再会したらぶん殴られるんだろうなぁ」

「散々に心配掛けてんだからそこは諦めろ。

つーか、普通なら新しい男をこさえてても文句を言える立場じゃねえわな」

鼻水を垂らしそうな表情でひとりごちるポップに鼻をほじながら突っ込むマトリフ、意気消沈したまま姿を消して3ヶ月近くも音信不通な時点で愛想を尽かされたとしてもおかしくはなく、それでも殴られただけで元鞘に収まると考える辺りそれなりに仲が進展していたらしい。

＊

「……それと成り行きで弟子を取ったんだわ。
信じられねぇかも知れねぇが、こことは違う世界の人間で、そいつの召喚魔法に呼び出されてから何やかやあってそいつともう一人を弟子にした」
「何でそれを先に言わねぇんだ！
孫弟子に異世界とか随分と面白そうな事になってるじゃねぇか？
召喚魔法で呼び出されたって事は独自の魔法技術とかもあるんだろ？
孫弟子はそこそこ仕上がってから連れて来りゃ良いとしてどんな世界だ？
つーか、生活が落ち着いたら俺もそっちに行くから知らせろや！」
何となく途切れた会話を仕切り直すべく弟子取りの報告を行ったポップだが、孫弟子と異世界のダブルワードで変なスイッチが入ったらしきマトリフは大興奮し、全身を大きく揺り動かし矢継ぎ早に質問してから命令口調で訪問すると断言した。
つい先日ギーシュと茶番じみた決闘を行ったばかりのポップは、トリステインに蔓延る貴族至上主義とマトリフの傲岸不遜な性分は相容れないだろうと推測し、そうでなくても美人がいたらとりあえず胸や尻を触るどうしようもないエロオヤジがキュルケやロングビルを見て何もしないとは考え難く、どちらの方向でも面倒で始末に負えない揉め事を引き起こしそうな予感が脳裏を過ぎる。
「喜んでる師匠には悪いが、魔法技術の応用範囲が広いくらいで期待外れな世界だぜ？
それと異世界への瞬間移動呪文（ルーラ）は極大消滅呪文（メドローア）を連発するよかしんどいからな。
人々の生活基盤を支える魔法使いが貴族なのには納得だし、厳しい身分制度もあんま納得したかねぇが理解はできる。
理解はできるんだが、貴族の子供ってだけでこっちが平民だから頭を下げろとか意味の解らん因縁を付けやがるし、貴族の家に生まれたのに魔法を使えない娘を寄って集ってバカにしやがるのがどうにも

気に食わねぇんだわ。
つーか、そいつが弟子の片方なんだけど自分からスペシャルハードコースを希望するくらいやる気のある奴で、ちょいとばかり短気だけど真面目で律儀な性格しててさ、俺が面倒を見てやらなきゃって思わせる危なっかしさがあんだよ」
マトリフのトリステイン行きを思い留まらせようとマイナス要素を並べ立てるポップ、話している途中でルイズの教育方針を相談するつもりだったと思い出し、そのまま召喚された後に起こった大まかな出来事と系統魔法に関する報告を行ってから基本的な訓練メニューやノウハウを教わった。
ルイズが全裸で椅子を振り回し暴れたエピソードやギーシュとの決闘を笑いながら聞いていたマトリフだが、系統魔法の報告を行う際にしれっと再現して見せたポップの異常性に思わず鼻水を垂らし、アバンが弟子にした理由はこれだったのかと密かに納得していたりする。
この後、マトリフから『異世界の魔法を練習するなら変身呪文（モシャス）で化けて実際に使った方が感覚を掴めるんじゃね？』的なアドバイスを受けたり、破損していた輝きの杖と魔導士のマントを修理したと渡され感謝の言葉を述べたらツンデレ的な返答をされて微妙な空気になったり、ヴァリエール邸に帰還したポップの後頭部に半壊状態のまま召喚された場所で待ちぼうけを食らっていたブラックロッドがぶち当たったりした。

〔憂鬱な里帰り　後編〕

修行初日、ヴァリエール邸から少し離れた場所にある荒地で青空講習が行われていた。

「ルイズが魔法を使えない理由は次のどっちかだ。

その1、元から魔法を使うのに必要な能力がない。

その2、能力はあっても制御する部分に何かしらの問題がある。

その1は俺がここにいる時点でなしだから原因はその2、理由は知らねぇが魔法を使う過程に問題があって爆発したと見るべきだろうな。

それでルイズ、お前は今までどんな修行をしてたんだ？」

「どんなも何もルーンの正しい発音を心掛けながら魔法の効果を思い浮かべて杖を振る。

それを成功するまで繰り返すのが修行ってものなんじゃないの？」

ムッとしながらも質問に答えるルイズに呆れたような表情を浮かべたポップが嘆息する。

「魔法なんて常識外のもんを練習だけで理解しろってのが無茶だわな。

そんな気はしてたが、こっちの魔法は技術じゃなくて才能に分類されてるみたいだし、それともこっちでの魔法は宗教が絡んでるからあまり研究されてないのか？

話を戻すが、俺の故郷じゃ魔法ってのは突き詰めれば生成だと言われている」

「生成？」

「そう、生成だ。

身体の内側にある魔法力……こっちで言う精神力だな。

そいつを使って炎や風なんかの現象を生み出す。

細かい法則やらを説明するのは面倒だから根本的な部分を簡単に言ってしまえば力の変換だ」

「力の変換？」

オウム返しに首を傾げるルイズと真剣な表情で聞き入るコルベー

ル、元より魔法と縁のなかったシエスタは手元の羊皮紙に聞いた内容を忘れないようメモしているだけと言った感じだ。
「例として火炎系の魔法を挙げれば、魔法力をプラス方向へ働かせて物質の構成分子の運動を高めて炎を生成するって感じだ。
逆に、マイナス方向に働き掛けて分子運動を停滞させれば氷雪系の魔法になる。
補助系とか回復系みたくこっちの系統にない魔法もあるが、今んとこ関係ないんでそこらの説明は別の機会だな。
呪文の詠唱も大切だが、本当に重要なのは使う魔法に対する明確な理解とイメージの方だ」
「……えっと、東方では物質を形作る小さな粒を分子と呼んでいて、メイジがルーンを唱えて魔法が効果を表すまでのプロセスを解き明かしているとでも？」
意味不明の単語に面食らったかに見えたルイズだが、座学トップの優等生だけあって自分の知識と照らし合わせ理解した内容を纏めて質問する。
「まあそんなとこだ。
だけど戦闘に特化してるもんでこっちよりか汎用性は低いがな。
とりあえず、魔法によって精神力の使い方が違うってくらいに覚えとけ、それとこっちの魔法ってのは突き詰めれば感覚の技術だからいくら努力してもセンスのない奴には使えないってのが常識だ。
必要なのは知識より才能、自分が使える系統以外の魔法はどう頑張っても使えないし成長もしない。
平たく言えば、そいつの得意な系統が生まれた時点から決まってて使えない系統はどれだけ頑張っても使えないってこった」
「ちょっ、それってわたしには魔法を使えないって言っているのと同じじゃないのよ！」
「そこで変身呪文（モシャス）のカードの出番となる。
こいつはイメージした相手に変身する魔法が込められていて、目の前にいる相手なら知らない奴でも能力や技能まで化けられる便利な魔法のアイテムだ。

まずは、コルベールさんがルイズに化けて知ってる魔法を片っ端から使ってみる。
次にルイズがコルベールさんに化けて成功した魔法の練習をする。
これで理論上はルイズに系統魔法の才能がなくてもコモンだけは使えるようになるはずだ」
いきなりの全否定に沸騰しそうになるルイズを手で止めたポップは、ポケットから金属製と思しき数枚の札を掲げるように取り出し胸を張ったが、ルイズとシエスタは怪訝な表情を浮かべコルベールは固まっている。
それはマトリフの書を読んだポップが暖めていた構想と先日見た錬金の再現を兼ねて作り上げた自信作、使えば燃え尽きてしまう消耗品ながら魔弾銃と同じような効果を持たせた魔法のカードであり、それまであった魔法のスクロールを小型化した代物だった。
ドヤ顔で披露した研究成果に対する反応が思ったより薄かったポップとしてはガッカリだったが、再起動するや魔法のカードに込められた呪文が持つデタラメな効果に興奮したコルベールに詰め寄られ、何やらぐだぐだのまま説明を切り上げ場を仕切り直す。
「さて、ルイズの魔法訓練は明日からの予定だからそれまではシエスタと合同で修行するが文句言うなよ」
「合同で修行って？」
「ん、ちょいと前に最初の先生が勇者の家庭教師だったって言ったら偉く興奮して弟子入りしたいって言うもんでな。
俺も同じような感じの押し掛け弟子だったし、ルイズも姉妹弟子とかいた方が良いかなと思ってよ」
「……あんたの非常識さにもそろそろ慣れたけど勇者の家庭教師って何なのよ？」
「先生の名前はアバン・デ・ジニュアールⅢ世、今じゃカール王国の王様だけど若い頃は魔王を討伐した本物の勇者で、自分の後継者を育成すべく身分を隠して世界中を旅してた凄ぇ人だ。
俺は不真面目だったから、中途半端に学んで別の師匠に鍛えられたが、今でも先生の事を尊敬している。

そして教える流派はアバン流、シエスタは勇者のノーマルコースだけど基礎トレーニングはルイズと同じになるから午前中は姉妹弟子として面倒を見てやってくれ、俺はコルベールさんと少し話があるから離れるけどすぐに戻る」

言うが早いか好奇心に瞳と額を輝かせてルイズへと変身したコルベールに半ば連れ去られるようにしてポップは立ち去り、口頭で練習メニューを告げられただけで丸投げされたシエスタと未だに自分の使い魔候補に対する態度が定まらないまま弟子入りしたルイズが取り残され、何となくぎこちない雰囲気のまま走り込みが開始された。

とりあえずルイズに化けたコルベールは魔法を使って感覚の違いを探るよう告げて放置し、威力を調整した重圧呪文（ベタン）と回復呪文（ホイミ）の併用で倒れる暇もなく続けられる走り込みを皮切りに人類の限界に挑戦するようなトレーニングが始まったのだが、意外と言うべきかルイズもシエスタも基礎体力はもちろん気力と根性の両面に優れており、無茶と言うよりは悪い冗談のような修行を何とかやり遂げた。

実際はモチベーションの高さと真面目な性分から、やたらと走り辛い気はするものの体力が尽きる気配がない状況で投げ出すなんて選択肢が思い浮かばなかっただけであり、ギリギリになった頃合いを見計らって休憩を宣言しては効果を調整した回復呪文（ホイミ）で超回復を促し、増えた筋力分だけそれぞれの負荷を増やしていた事に気付かなかった事も大きい。

心構えだけで何とかなる問題ではないものの意識していなければ限界を突破しても成長率は落ち難く、ポップはそこらを考慮して限界と気付かないままに突破させる工夫を凝らしており、まずは限界が知りたいからと言って倒れて寝込む寸前まで走らせては、小休憩で体力が回復するのでそんなに辛い事をしているのではないと錯覚させている。

僅か1日の修行で半月は掛かる基礎作りを終えて引き揚げてみれば、娘の一時帰宅を聞き付け出先から急ぎ戻ったヴァリエール公爵が落ち着かぬ様子で待ち受けており、疲れてぎこちなく挨拶するルイズ越しにチラチラと盗み見るような感じでポップを睨み付けていたが、

背後から現れたカリーヌに何事か耳打ちされるやそそくさと退散し、多忙な公爵への挨拶は修行が終わる2日後の夕方で良いと告げられ、風呂に入った時に回復呪文（ホイミ）の効果で最高の状態になった肌と過酷な運動により劇的なまでに絞れた腰周りを確認した二人は、それぞれ不思議に思いながらも別のベクトルで修行に打ち込む意思を強くしていた。

＊

「それじゃあ、まずはアバン流について簡単に説明する。
我が流派で教えているのは、剣を基本に槍・斧・弓・鎖・素手格闘の6種に分類される戦闘法と魔法全般だ。
本来ならここから覚えたい技能を選ぶんだが、勇者とはあらゆる魔法と武術に長けた戦闘のエキスパートだからシエスタには全て覚えてもらうぜ。
それとルイズの方は、基礎訓練や魔法の授業で重複する部分はシエスタと一緒に教えるが、個人授業でスペシャルハードコース用の特別メニューを受けさせる予定だから覚悟しとけよ」
翌日、魔法の授業になると本来なら帰っているはずだったコルベールが生徒に加わり額と瞳を輝かせる。
「さて、俺の故郷の魔法は精霊魔法と言って覚えたい魔法と個別に契約するのが特徴だ。
魔法使いの家系はあるが、こっちみたく平民とか貴族みたいな身分に分かれちゃいない。
精霊が応えてくれないと契約できないって欠点はあるが、杖は魔法を使う上での補助でしかなく、秘薬なしでも重傷者を回復できるし慣れれば詠唱も必要なくなる。
系統魔法と比べると戦闘に特化しているが逆に応用範囲が狭くて日常向きじゃないのも特徴だな」
「ふーん、それって系統魔法じゃないけれど先住魔法とも違う感じよね。

つまり、東方には始祖ブリミルが伝えたのとは違う魔法があって教会に異端審問されないから研究も進んでいる……って、もも、もしかして、あっ、あんた魔法が使えるんじゃないの？」
「当たり前だ。
知らないものは教えられないし、精霊魔法は才能さえあれば誰でも覚えられる。
その代わり闘気技の方は才能がなくて何とか使える程度だから基本と応用くらいしか教えられないけどな」
事も無げに言い放ったポップは、そこらに落ちていた棒切れを拾うと地面に手早く図形を描き上げシエスタに向き直り手招きをした。
「シエスタ、ちょっとここに座って目を閉じたまま精神を集中させてみてくれるか？
それから頭の中で火の精霊に力を貸してくれって呼び掛けて……まあ、お祈りとかみたく頭の中でそんな風に考えるだけでいい」
「えっと、お祈りしてたら……そのっ、ふわっと暖かいような感じがしたんですけど？」
促されるまま地面に書かれた図形の中心に立ち、不安げで不得要領な表情を浮かべたまま膝を着き目を閉じて暫らく祈りを捧げたシエスタの肩がビクリと震え、半信半疑と言った風な様子で顔を上げ報告する。
「身体が熱くなったのは精霊が応えてくれた証拠さ。
試しに指先から火の玉を撃ち出すイメージで火球呪文って言ってみな」
「え、えっと……火球呪文ですヒャァッ!!」
おずおずと唱えたシエスタの指先から小さな炎が噴出し、どれだけ熟練したメイジだろうと杖なしでは魔法を使えないはずとの固定観念に囚われていたルイズとコルベールは驚きに言葉がなく、シエスタに魔法の才能がなかったらどうしようかと思っていたポップは安堵の息を漏らした。
「この調子で午前中は基本的な魔法に片っ端から挑戦してみる予定だが、精霊が応えてくれなきゃ契約できねぇし契約できててもレベルが

足りてなきゃ魔法は発動しないからな。
ルイズも興味があるのは結構だが、お前さんは魔法使いじゃなくてメイジなんだから試すなとは言わんが系統魔法の修行をメインにしろよ」
その後、回復呪文（ホイミ）の契約陣を描くやコルベールが割り込みで挑戦し、何をそこまでと言った必死の形相で祈りを捧げて成功したらしたで中年男が目に涙を浮かべて大喜びする姿に、見ていたシエスタや自分も試そうとしていたルイズがドン引きする。
端的に言って午前中はまともな修行にならなかったが、系統魔法ではないもののいくつかの魔法と契約して使えるようになったルイズはご機嫌だったし、興味はあったものの時間が許す限り片っ端から魔法と契約したシエスタはグッタリしており、念願の治療魔法を覚えたコルベールは見ていてイラッとするくらいに浮かれ騒いでいた。
何とも形容し難い異様な光景だったが、幸いにして目撃者はなくお祭り騒ぎに取り残された感のあるポップだけが生温い視線で見守っている。

＊

「ミスタ・コルベールの身体って思ったより筋肉あるのね」
「あのなルイズ、初めての変身で色々と興味があるのは分からなくもないが、とりあえず俺の話を聞け」
ひとしきり騒いで落ち着いてから昼食を挟んで午後、頬に手を当てクネッているコルベールの姿が気持ち悪かったのか、心持ち顔色を悪くさせたポップがコルベールから聞いた感想と独自の見解を踏まえた講義を行っていた。
「大切なのはイメージと集中力、後はひたすら理論と実践の繰り返しだ。
杖は普段ルイズが使ってるので構わないが、魔法を使う時に少しばかり感覚が狂うってコルベールさんが言ってたからいきなり成功するとは思うなよ。

まずはコモンで正しい魔法の感覚を覚える事から始めるんだが、こんな説明だけで感覚を掴めるんならとっくに魔法を使えるようになってるだろうし、最初の取っ掛かり部分を少しだけ手伝ってやっから後は自分で何とかしろよ」

背後からルイズを抱すくめたポップが持っている杖に手を添え、着火のルーンをゆっくりと唱えながら自分の魔力を注ぎ込むと杖の先に小さな火が灯り、ついでに羞恥心が限界に近いルイズの頬にも見て取れるくらいの朱色が灯る。

しかし悲しいかな、今のルイズは中身こそ誰もが認める美少女のままであっても外見は禿げ頭の中年教師でしかなく、この練習法を思い付いたポップにしても抱き締めた弟子の意外と筋肉質な感触や仄かに香る加齢臭に心の中で涙していた。

ちなみにシエスタはメイド服姿のまま教えられた動作で素振りを繰り返し、コルベールは満面の笑みを浮かべながら自分の左腕を右手で持ったナイフで傷付けては回復呪文（ホイミ）の呪文で癒すと言う端から見れば異様な行動を繰り返している。

まあ、シエスタの素振りは服装を気にしなければ平民向けの道場で普通に見られる行動であり、コルベールの猟奇的な行動も治療魔法の効率的な練習なのだが、ここにハゲオヤジをハグする少年＝ルイズとポップを加えると完膚なきまでのカオスがあった。

ちなみに、あまりにも自然な流れだったからかハルケギニアのメイジではないポップが着火の魔法を使った事に対する突っ込みはなく、この日の修行はルイズがコモンのルーンを失敗せず使えるようになった辺りで終了となり、調子に乗って回復呪文（ホイミ）を唱えまくったコルベールは早々に魔法力が尽きて屋敷に引き返していたが、居ても居なくても関係なかったのでスルーされている。

なお、この日もヴァリエール公爵とポップの間にまともな会話はなく、疲れを見せるルイズらへ食事は部屋に届けるからゆっくり休むよう勧めたカリーヌから修行の進捗に関する質問がなかった事もあり、ルイズが魔法を使えるようになったと言う報告はされなかった。

＊

翌日の修行も前日の無理がたたって貧血を起こしたコルベールが参加しなかった事と少しばかりの進歩が見えた事を除けば大差なく終わり、3日間の修行を通しての総括と言える模擬戦が行われようとしていた。

ちなみに、午前中の基礎トレーニングは共通だが、シエスタは体力育成として走り込みと素振りを中心に、ルイズの方は瞑想による魔法力の制御法や魔法力を放出させる応用技術を視野に入れたイメージトレーニングが中心となっている。

変身呪文（モシャス）でシエスタと同じ姿になったポップは木剣を手に取り、驚きに固まるルイズとシエスタをそのままに20メイルばかり離れてから振り向き、本物ならまず浮かべないだろう凄味のある笑みを浮かべながら構えた。

「さっき渡した加速呪文（ピオリム）のカードを使えば素早さが強化される。

逆に俺は変身呪文（モシャス）の効果で姿はもちろん身体能力までもがシエスタ本人と同じだ。

そこでこれからお前さんらには俺と戦ってもらうんだが、回復呪文（ホイミ）を使えば簡単な骨折くらいまでなら治せるからある程度の怪我は覚悟しとけよ？」

言うが早いか地面を蹴り突進するポップ、幼少時よりこの手の修羅場に慣れていたルイズはすぐさま加速呪文（ピオリム）のカードを使用してからファイアー・ボールで迎撃しようとしたが、バレーボールくらいの大きさがあった火球は無造作に振られた木剣に弾かれるようにして消し飛ばされ、時間差で奇襲を仕掛ける形になったシエスタの攻撃もサイドステップで簡単に避けられてしまい空を切るだけだった。

そのまま畳み掛けるように行われた連続攻撃は両者の速度差にも関わらず全て打ち払われ、タイミングを合わせて撃ち込まれたファイアー・ボールも半歩ばかり横の空間を通り抜けるだけでかすりもしない。

基本的に真面目で素直な性分のルイズは妹弟子のシエスタが平民

だからと見下したりせず親交を深めていたが、たった数日で阿吽の呼吸やアイコンタクトが成立する関係になれるはずもなく、付け焼刃の剣技は荒削りで無駄な動きが多い上にアドバンテージになりそうなルイズの魔法とて覚えたばかりで狙いが甘く正面から当てるのも難しいとなればお互いが邪魔になる。

だからこそ能力で勝るよう加速呪文（ビオリム）のカードを与え、後衛としてルイズとコンビを組ませて経験による戦力の差を埋めたのだが、２人は役割分担こそしたもののそれぞれがバラバラに攻撃していた。

速さと手数で勝るはずのルイズとシエスタは全力で挑むが効果はなく、ポップは変身した事で身体能力と使える魔法を大きく制限されてはいたが、それでも並外れた集中力と技量から繰り出される密度は低いものの巨大な火球呪文（メラ）でシエスタを足止めし、ルイズがやけっぱちで連発したファイアー・ボールも高密度なバギを展開して相殺、逆に無造作なようで的確な反撃と虚実を交えた駆け引きに惑わされた二人は、抵抗空しく木剣で身体のあちこちを何度も打ち据えられる。

「ホレホレ、どうしたどうした？

俺は本物のシエスタより遅いしそっちは二人掛かりなんだから、手数で圧倒するなり連携を考えてりゃ攻略法なんざいくらでも見つかるはずだろ？」

ここで二人が同時に魔法を使えば一矢報いれたのだろうが、練習不足かつ平民だからと遠慮したシエスタは自分から使おうと提案せず、魔法が使えるようになったものの劣等感を引き摺っているルイズも作戦に組み込もうと言い出さなかった。

そうなると手詰まりのジリ貧であり、攻撃を食らい続けた二人が全身青痣だらけになってまともに動けないと判断したポップは、これ以上の模擬戦に意味はないと判断し、捨て身で斬り込もうとするシエスタの木剣を片手で掴み取り終了を宣言する。

「忘れるな、戦いにおいて魔法や剣術はただの手段でしかない。

何をしたくて何ができるか、自分の能力や現状をきちんと正確に把握してその場その時の最善手を冷静に判断していれば、多少のレベル差くらいは簡単に引っ繰り返せるもんだ」

教える立場になって師の苦労を思い知ったポップだが、隙あらばサボろうとした自分と違い真面目で素直な弟子が可愛くて仕方なく、だからこそルイズの抱える葛藤を察して気の利いたアドバイスを送りたいのに良い言葉が出て来なかった。

優秀な師に教えを請える立場にありながら遊び呆けて時間を無駄にし、自分は凡庸な村人であると今の彼を知る者が聞けば噴飯物なコンプレックスを克服した現状、積み重ねた努力が無駄となり嘲笑される日々を送り続けたルイズに掛けるべき言葉と資格はあるのか、少し悩んだものの自分だったら触れられたくないと思ったので少し遠回りな言い方に留め別の話題に切り替える。

「それはそうとシエスタはアバン流の奥義を使えるようになるか少し試してみようか？」

そう言ってから近くに生えていた背丈より少し高いくらいの枯れ木に向き直り木剣を逆手に持って構えるポップ、精神を集中すべく目を閉じたのを不思議そうに眺めていたルイズとシエスタだが、数秒もするとポップの全身から陽炎のような揺らめきが湧き上がり、手に持った木剣が淡く輝いたのに驚きの声を上げそうになった瞬間、

「アバンストラッシュ！」

大声で叫ぶや地面を蹴ったポップが木剣で枯れ木を粉砕したのに揃って顎を落とした。

「これぞアバン流刀殺法の奥義アバンストラッシュ、今のはそれの真似事みてぇなのだが本物は城壁だって打ち砕く正に必殺技ってやつだ。

俺には武術の才能がねぇからシエスタに変身した状態で使えるか不安だったが、どうやら闘気技を使えるだけの素質はあるみてぇだし、これからの修行次第だけど頑張れば数年で覚えられるかもな」

なお、ポップに武術の才能がないと言うのは本人の誤解であり、実際は臆病者だった修行時代の彼には敵と切り結ぶような度胸がないと判断したアバンの評価でしかなく、本当に才能がなければバーンとの決戦で格闘戦を仕掛け生き延びる以前に、1対1で行われたシグマとの決闘に破れ死亡していたはずである。

とは言え、ポップは剣術なり槍術で戦うよりも初級の呪文を唱えた方が遥かに強く、斬り合いで減ったＨＰを魔法で回復するくらいなら最初から攻撃魔法で敵を殲滅した方が効率的であり、魔法を封じられるか魔法力を節約したいなどの理由でもなければ積極的に武器を使う必要性はない。

＊

実戦形式の訓練は、魔法が使えるようになって自信が付いたルイズの心をへし折り掛けたのと同時に、シエスタの心に確かな希望を灯して終わった。

肝心の魔法はコルベールの姿を借りていたのでモノにしたのは火系統とコモンのみ、クラスの方もドットでしかなかったが、たった３日間の修行で得た成果としては破格である。

そして意外にもと言うかルイズには闘気技の才能があった。

シエスタが闘気技の修行をすると聞いて何か思うところがあったのか、自分にも教えろとしつこかったので試しに練習させてみたところいとも簡単に出来てしまったのである。

しかし、出たのは闘気は闘気でも暗黒闘気であり、色々あって吹っ切れていたポップは自分の専門外なのでアドバイス程度になるがと前置きしつつも暗黒闘気の使い方を教えると約束してしまった。

それは劣等感に苛まれたルイズには自信が必要だと感じたからであり、兄弟子であるヒュンケルのように心の闇が晴れれば光の闘気に転じるのではないかと期待したからでもある。

ついでに武器の使い方も習うかと尋ねると少し悩んでから選んだのは鎖、ルイズ自身は趣味の乗馬で鞭を使っていたからと朗らかに理由を述べていたが、趣味の延長線で人を殴ろうとする発想にシエスタとポップは戦慄していた。

そもそも暗黒闘気の使い手が真っ当な思考回路の持ち主であるはずもなく、父の敵と誤解していたアバンへの復讐心を滾らせていた頃の兄弟子みたいなのが標準仕様であり、劣等感を拗らせながらもここ

まで素直に育ったルイズは根が良い子なのだと感心するのと同時に、何故か怯えながら謝り始めたシエスタを見て首を傾げる。

そんな事を思い出しながら入浴していたポップに報告会を兼ねた晩餐の招待が届き、どうせなら正装するかと輝きの杖と魔導士のマントを装備してルイズとコルベールの胃壁に大ダメージを与えるのだが、平民だからと誘われなかったシエスタや元より貴族かそれに近い人物と考えていた他の人々は顔色の悪い両名を見て不思議そうに首を傾げていた。

〔ヴァリエール家の晩餐〕

慰労と報告を兼ねた夕食の席で、ヴァリエール公爵は先日までの厳格な態度とは真逆の親馬鹿ぶりを見せ、残りの家族もそれぞれにルイズがお披露目したいくつかの魔法を見て大げさなくらいに喜び褒め称えていた。

もちろん、精霊魔法と暗黒闘気に関しては伏せてあるし、コルベールの意見もあってルイズが虚無であるとの予想は本人にも伝えてない。

「ポップさん、あなたは東方の生まれだと聞きましたが、これからもルイズの家庭教師を続けられるのですか？」

「はい、お嬢さんを一流のメイジにすると約束してますからね。いずれは故郷に帰る予定ですが、約束を果たすまでは家庭教師を続けるつもりでいます。

本人の希望でスペシャルハードコースになってますんで、親御さんからすれば見ていられないくらい厳しい修行になると思いますけどそこらは勘弁して下さい」

「もちろんです。

ルイズが何を言おうと気にする必要はありませんし、身分を気にして変に遠慮する必要もありません。

流石に死なせたり後遺症が残るような怪我をさせるのは許容できませんが、そうでなければ煮るなり焼くなり自由にして下さって結構です。

それはそうと報酬や待遇で何か不満や希望があれば可能な範囲で聞き入れるつもりですが何かありますか？」

食後に出されたワインを楽しんでいると穏やかな笑みを浮かべたカリーヌに尋ねられ、腕組みをしながら考え込んだポップは手入れの行き届いた中庭の花壇を思い出し答えを決めた。

「それでしたら、育てるつもりで手に入れた貴重な植物の種がいくつかあるんで、俺の代わりに育ててもらえませんか？」

「貴重な植物とあれば是非もありません。

それで、どのような植物なのです？」
「例えばパデキアの原種、どんな土地でも栽培可能となるよう品種改良される前の特殊な土地でしか育たない難しい植物ですが、改良種よりも強い薬効を持つその根を煎じて飲めばあらゆる病を癒すと言われてまして、生憎と俺には世話する時間と場所がないもんで……って、どうしたんですかそんな怖い顔して？」
行方不明になったダイの捜索で世界を放浪していた頃に興味を引かれるまま入手していた不思議な植物の種、そろそろ栽培に手を付けようとしていた矢先にデルムリン島での騒動があって荷物の中に死蔵されていた代物なのだが、一部を除いてルイズを成人させたような容姿な方の姉を除くヴァリエール家の人々が浮かべる形相を言葉にすると『殺してでも奪い取る』そのものだった。
場を取り繕うようなヴァリエール侯爵の申し出により、後で庭師にパデキアの種を引き渡す代わり収穫した根の一部を譲渡するとだけ約束し、ルイズが必死で宥めている金髪で目付きが鋭く強気そうな方の姉が呼び止めようとしているのに気付かぬふりをして退散する。

＊

「あんたの荷物をそこに全部並べなさい！」
「おいおい、いきなり押し掛けといて挨拶もなしかよ？」
偉く興奮した様子のルイズに苦笑いを浮かべ、そのままだとベッドの上にぶちまけられそうなカバンの中身を順番に取り出しテーブルの上に並べた。
「何この腕輪、飾り気がほとんどないのにとっても綺麗……」
「そいつはブラックロッド、知り合いの鍛冶師が作ってくれた逸品で、何度も命を救ってくれた俺の相棒みたいなもんだ。
手に持って魔法力を込めるとイメージ通りに変化して、ついでに攻撃力を増幅してくれるって便利な機能まである代物なんだが、正装するとなったら武器のイメージが強いこいつよりも以前にぶっ壊しちまったのを師匠が修繕ついでに強化してくれた輝きの杖になるんだ

よな」
何気に手に取った黒い腕輪の説明に訝しげな表情を浮かべるルイズだが、苦笑したポップが触れると両端に宝玉をあしらった漆黒の短杖に変化したのを見て目を大きく見開く。そこらで買える安物ではない立派な杖とマントを見て浮かんだ貴族疑惑に胃を痛めていた上、姉のエレオノールから言われて荷物検査をしてみれば明らかに希少そうなマジックアイテムがあり、更に異国の金貨や宝石類がぎっしり詰まった革袋は叩き売りでも軽く数千エキューに相当するだろうし、効果は不明ながら東方のポーションや用途不明な小物類だって持ち込む店さえ間違えなければ相応の値段となる。
これだけの荷物を持っていてただの平民とは考え難いが、例え貴族でなかったとしてもメイジかつ魔法を使えるようにしてくれた恩人である事には違いなく、だからと言って今更に態度や言葉使いを改めるのは何か違うような気がするので自分は雇用主だからセーフと心の中で理由付けし、それはそれとしてポップの身分を問わないままで正式な雇用契約を結ぶのは色々と問題があり、覚悟を決めて尋ねてみれば家出した武器屋の息子と間違ってないが正しくもない答えを返され、もっと詳しく説明しろと半切れ気味に詰め寄り口を割らせた。

＊

「俺が生まれ育った村は、地図に載ってるかも怪しいくらいの僻地にあってな。
武器屋を経営する頑固な親父と優しいお袋の三人家族で、食うに困らずたまに贅沢するくらいの恵まれた生活をしてたんだわ。
２年くらい前のある日、チンピラに絡まれてた俺を通り掛かった先生が助けてくれて押し掛け弟子になったんだが、それから1年くらいして魔族との戦いが始まって俺も巻き込まれるような感じになって、何だかんだあってから敵の大将を倒して平和になった後でお前さんに召喚されたって感じだな。
そんで先生は前に話した勇者の家庭教師で、師匠は先生の仲間だっ

た凄え魔法使いで大魔道士を名乗ってるんだが、どっちも本来なら俺なんかが弟子入りできるような相手じゃねぇし、何かが少しでも違ってたら今も田舎の村で退屈だけど平和に暮らしてたままだったと思うぜ」

時系列を並べただけで肝心な部分を曖昧に流してはいるが、魔法を習い始めて2年しか経ってないと聞いたルイズはそちらの方に衝撃を受けており、様々な意味で自分とは真逆なポップに白けたような半眼を向ける。

「……先生とやらに弟子入りできたのはあんたに才能があったからでしょうよ。

大魔道士ってのだって、あんたに見込みがなければ古い仲間の紹介でもわざわざ平民を弟子にはしないだろうし、実際2年かそこらでいろんな魔法を覚えられて人にも教えられるようになってる時点で才能の塊じゃない。

落ちこぼれのわたしが魔法を使えるようになったのもあんたに教える才能があったからだろうし、シエスタなんか平民なのに挑戦した全部の魔法と契約できてたんだから半分以上に失敗したわたしと違ってよっぽど才能があるんでしょうよね」

「俺は、そんな大層な奴じゃねぇよ。

確かに才能はあったんだろうが、最高の環境で一年近くも時間があったのに俺は、甘ったれて興味のない授業は適当に聞き流し、嫌いな修行をサボる事ばかり考えて隙あらば逃げ出し、そうやって楽な方へ流れてたツケを最悪の場面で支払わされる羽目になっちまった。

もし、あの頃に師匠との修行の一割でも頑張ってたら、相棒の負担をもっと肩代わりできたろうし、あんな結末にはならなかったはずなんだよ」

吐き捨てるように愚痴を言うルイズを見てほろ苦く笑ったポップは、普段の朗らかさが嘘のような後悔と自嘲が入り混じった力ない表情と重苦しい口調で述懐し、そのまま話題が途切れ重苦しい沈黙だけが残った。

＊

「……つっても知り合いの王族とかお偉いさんは気さくな人ばっかだったし、嫌な奴も何人かいたけど人に二股の責任を押し付けといて自分の方が偉いから頭を下げろみたいな道理に合わねぇ無茶苦茶を言われたのは初めてだったんだわ。

つーか、いくら偉くても間違ってる事は間違ってるし、自分から決闘ってか喧嘩を吹っ掛けといて負けたら身分を持ち出すようなダサい奴よりゃマシだが、あんなぐだぐだ言ってたのに杖を取られたら潔く負けを認めるとか拍子抜けしちまったぜ」

「あのねポップ、貴族の決闘では杖を落とした方が負けって明確なルールがあるのよ。

それとあんたの故郷でどうだったか知らないけどトリステイン王国では、貴族やその子供が一方的な理由で平民を無礼討ちにしても叱られるか名目だけの謹慎処分がせいぜいだし、それだって自領以外の平民とか他所の貴族と懇意だったみたいな理由があった上で悪質だと判断された場合に受けるかも知れない処罰でしかなく、公の場所で家名を傷付けるような恥を晒すとか大きな罪を犯したとしても何年かしたら平然と社交場に現れるくらい最近の貴族は腐っているってお父さまが嘆いていたわね。

今回はあんたが学院の教員であるミスタ・コルベールに身元を保証されていたし、ギーシュが勝ちを譲ったみたいな感じになってたからわたしの説明不足と監督不行き届きを問うような感じに誤魔化してるだけで、本来ならどんな面倒臭い方向に転がったかなんて想像したくもないわ」

空気を変えようと必死に頑張ったルイズの話題転換でギーシュとの決闘や貴族に対する態度を問われたポップだが、茶番で終わらなかったら凄く面倒な状況だったのだと理解し、コルベールから忠告されていた貴族に逆らった平民が縊り殺されても常識とされる歪な社会なのだと実感する。

「そりゃまた胸糞の悪いこって、俺はこの国の人間じゃねえからどっ

ちの味方もしないってかしちゃいけねぇと思ってるし、メイジが生活基盤を支えてる以上はある程度の特権を許されても納得できるんだが、逆転される覚悟さえあるんなら偉けりゃ何をしても良いって考え方もありっちゃありだわな」
「てっきり平民の味方をするかと思ってたのに意外と冷たいのね？」
「この国に骨を埋める覚悟もなく手出しすんのはいくらなんでも無責任だし、俺を褒めてくれたマルトーさんとか他の使用人にゃ悪いが、平民は貴族に勝てないから何を言われても従うしかないって考え方は少し違うと思うんだわ。
　本当は我慢できるから逆らわないだけじゃねぇかと思うし、実際に不意打ちとか騙し討ちみたいな方法で貴族が平民に殺されたって話も聞いてる以上、このまま横暴な貴族が増え続けるようなら平民も黙っちゃいないと思うがな」
「黙ってないとか言っても所詮は平民、メイジが杖を振ったらそれまでなんじゃないの？」
　貴族の横暴さを聞いてもそっけないポップに意外そうな表情で問うルイズだったが、
「例えば俺に喧嘩を吹っ掛けたギーシュ、あの時のまま成長してない前提ならそこらの平民でも１０人くらいが連携したら普通に勝てるし、飲み物に毒を入れるとか油断してるところを背後からグサリみたいな方法だったら女子供でも簡単に殺せるわな。
　油断してなくても実力があっても魔法を使える回数には限度がある以上、対処できる以上の数をぶつけられたら最後は押し切られて負けるし、休みなしに戦うのはよっぽどタフでもせいぜい数時間が限度、軍隊を纏めて吹き飛ばせるような奴がいても正面から戦わなきゃどうとでもなる。
　それこそ出される全ての食事と飲み物に毒が入ってないか、自分に話し掛けて来た相手が武器を隠し持ってないか、ベッドで寝てたら刃物で刺されたり家ごと燃やされたりしないか、街を歩いてて背後から弓を射掛けられたり上から物が落ちて来ないか、目に入る全ての人間が自分を殺そうとしてるかも知れないとなったら疑心暗鬼で頭がど

うにかなっちまうだろうよ」
具体的な例を出されては何も言えなくなり、またもや話題が途切れてしまった。

＊

「……ってかルイズ、俺に何か用事があって部屋を訪ねて来たんだよな？」
「そそっ、そうよ、そうだったわよ！
あんたが持ってる何か凄い種、それで不治の病を治せるかどうか聞いて来いってエレオノール姉さまから言われてたんだったわ！
ねぇポップ、そこんとこどうなのよ？」
「知らん、つーか、俺の知識は先生から聞いた昔話と種の効果が刻まれた石板を読んだくらいだからな。
それでもわざわざ遺跡の奥底に保存してた代物が雑草の種って事はねぇだろうし、普通の怪我や毒の類なら薬草や毒消し草なり回復呪文（ホイミ）とか解毒呪文（キアリー）を使った方が速い以上、それなりの効果は期待しても良いんじゃねぇの？」
「それなりじゃあ困るのよ！」
今度は自分からとばかりに話題を振るポップ、内心で予想していた通りパデキアの種に関する質問をされたが、アバンから聞いた昔話と旅の途中に立ち寄った遺跡で見つけた石板を読んだ程度の知識しかなく、それでもわざわざ意味ありげな台座の上に置かれた宝箱に雑草の種を入れたりはしないだろうと本人なりの予想を返すも、椅子に座り祈るような表情で聞いていたルイズが声を荒げながら立ち上がる。
「ちいねえさま……カトレア姉さまの病気とわたしが魔法を使えなかった事はずっと家族を悩ませてたのよ。
ここ数年はお母さまもお父さまもわたしに魔法の練習をするよう言わなくなってたし、本来なら思った事をはっきり言っちゃうエレオノール姉さまも魔法に関する話題だけは言葉を選んでいた……つもりだと思いたいけどまぁそこはどうでも良いわね。

ちいねえさまの病は、今までどんな高名な水メイジにも治療できないどころか原因すらわからなかった。
勝手な期待を掛けられたあんたにはさぞ迷惑な話でしょうが、東方の魔法や薬ならちいねえさまを治せるんじゃないかってわたしだけじゃなくエレオノール姉さまも思ってるし、態度には出さなかったけどお母さまやお父さまだって種の効果に期待してる。
ねぇポップ、今からあんたの魔法でちいねえさまを治せるか試してくれない？」
「別に魔法を試すのは構わねぇが変な期待はさせたくねえし、どうせなら明日の帰宅前にルイズがお見舞いに行くとかの用事でカトレアさんを訪ねるのに同行したとか、そんな感じで魔法の治療を試すのがメインみたいなのは避けてくれないか？」
愚痴交じりの説明でおおよその事情を察したが、エレオノールの鬼気迫る形相を思い出し安請け合いするのを躊躇したポップは、変な期待はさせたくないからと言い訳じみた理由で条件を出し、元より頼む側かつ帰る前にカトレアを見舞いがてら一緒にお茶でも飲もうと考えていたルイズはあっさり了承し、そのまま気が抜けたのか安堵の吐息を漏らし椅子に深く座り直す。

＊

「なぁルイズ、他に何か聞きたい事でもあんのか？」
「他に何かって言われてもねぇ……あっ、模擬戦でファイアー・ボールを斬ってたけどあれってどうやったの？」
エレオノールが望まないだろう報告をするのが嫌で部屋から出て行く様子のないルイズを見たポップは、何か聞きたい事でもあるのかとストレートに話題を振ってみたが、俯き少し考え込むような素振りを見せてから思い付いたような表情で顔を上げ質問した。
「あれはとある暗黒闘気の使い手が得意としてた技を魔法力でそれっぽく再現した劣化版だな。
理論的には簡単な技だからもうちっと慣れれば魔法を撃ち返せる

ようになると思うんだが、俺は魔法を反射する呪文を使えるからそんなに重要って感じでもないし、興味あんなら後でやり方を教えてやっから試してみるかい？」
「そそっ、そんなのやるに決まってんじゃないのよ！
理論が簡単だって言うんなら後でとかもったいぶらず今すぐ教えなさい！」
胸倉を掴む勢いで大興奮するルイズに苦笑したポップは、簡易かつ劣化版なフェニックスウイングの使い方を説明する。
「まずは闘気か魔法力を腕または手に持った武器に纏わせる」
「ふむふむ」
練習している技術の延長なので何とかなりそうだと頷くルイズだったが、
「そんで腕か武器を放たれた魔法に叩き付けながら横か上に押し流す感じで跳ね飛ばす。
当てる直前に闘気か魔法力を放出して周辺の空間ごと一気に押し流すイメージでやるのが成功させるコツだな」
「……」
それができれば世話はないレベルの雑な説明に無言のまま俯き小刻みに震え始め
「なっ、簡単だろ？」
「でででっ、できるかぁ！」
ドヤ顔で同意を求めるポップに声も枯れよとばかりに喚き散らした。

〔ちいねえさま〕

キレ散らかしたルイズがエレオノールへの報告を忘れたまま寝ようとして部屋に突撃されたり、うっかりポップから教わった魔法理論を話題に出して問い詰められ定期的なレポートの提出を条件にやっと眠れたかと思えば、早朝から特別授業と称して具体的な闘気の扱い方に関する概要を叩き込まれ疲労困憊なまま身を清めカトレアの見舞いに行って心配されたりもしたが、優しく穏やかな次姉との触れ合いでボロボロになった心身を癒され見る間に元気を取り戻した。

ルイズの愚痴を聞いたコルベールは自分も興味があるからと別室で一足先にレポートの執筆に取り掛かっており、何となく付いて来たシエスタは部屋の端に寄って姉妹の交流を微笑ましく見守っているが、隣でカトレアをガン見しているポップの存在は視界と意識から外している。

とは言え、ポップがカトレアを見ていた理由の大半は心の眼(偽)を使った生命力の観察であり、見た限り病人特有の気配が感じられない以上は虚弱体質の類だろうと内心で予想していたが結果は大きく違った。

ポップの見立てでは、カトレアの体調不良は膨大な魔法力に身体が耐えられず病気のような症状が起こっているだけであり、体内に流れる生命力にしても弱々しいのは虚弱体質に疲労や運動不足が重なっているからだろうし、呪いや毒物の類も疑っていたが内臓部分に少し淀みがある以外は健康と言えなくもない。

恐らく、消費されずに蓄積した魔法力が許容量を超えると負荷に転じて体調不良が引き起こされるのだろうと結論したポップは、とりあえずの応急処置と本格的な治療方針を定めようとしたが、そこでカトレアを治療した者に莫大な恩賞を与えるとヴァリエール公爵が布告していた事を思い出す。

ルイズから聞いた内容では、礼金はもちろんヴァリエール家が保有する男爵位と領地の割譲に加えてカトレア本人が了承すれば婿入りまたは嫁がせても良いと公言しており、国内外から高名なメイジや薬

師の類が我こそはと名乗りを上げたもののこれと言った成果は出なかったらしく、下手に自分だけでカトレアを治療したら恩賞を断るのが大変になるのは目に見えてるし、手柄の押し付けと修行も兼ねてルイズを巻き込む事にする。

＊

「結論から言うとカトレアさんは恐らくパデキアだけじゃあ治らない。

体調不良の主な原因は、推察だけどルイズと同じくらい強い魔法力に身体が耐えられず具合が悪くなっているだけで病気じゃないからだ。

普通ならとっくに死んでそうなもんだが、恐らく薬とか魔法で無理やり体力を回復させる事で騙し騙しに延命してるって感じだな」

「唐突な上にあっさり言ってくれるわね。

でも正解、私はもう何年も前から貴方が言ったように発作の度に魔法で治しては具合が悪くなるのを繰り返しているのよ。

違いがあるとすれば、最近は発作が起こるまでの時間がどんどん短くなっているくらいかしらね」

「じゃっ、じゃあちいねえさまは助からないって言うの？」

大まかな近況報告が終わり、改めて紹介されたポップが挨拶もそこそこに独自の見立てを切り出し、落ち着いた態度で受け入れるカトレアを見て悲痛な声を上げるルイズ、蚊帳の外だったシエスタは話の急展開について行けず不得要領な様子でおろおろと周囲を見回すが、

「このままだとな。

ところがどっこい、そんなカトレアさんを治す方法があるんだよ。

若い頃に無茶しまくって身体を壊した師匠の為に作った薬、あれと同じものを作って飲ませれば……」

「そそっ、そんなものがあるんなら早く出しなさい！」

「同じものを『作って』飲ませればって言っただろ？

それに手持ちにない材料とかもあるから取りに行かないとな」

「必要な材料って何なのよ？」
「ドラゴンの生き血、他の材料や命の木の実とかスタミナの種は手持ちと買い出しで何とかなるんだが、ドラゴンは超竜軍団の生き残りかギルドメイン山脈にいる野良竜を狩りに行かないといけないんだわ。
まあ、お前さんとシエスタの修行を兼ねるつもりだからもう少し先になると思うがね」
「ファッ!?」
状況を飲み込めないまま何やら恐ろしげな修行に参加させられる事が決定していた。
驚きで思わず変な声を漏らすシエスタだが、目の前でポップに更なる修行を要求するルイズと心配そうな表情を浮かべながら応援すると決めたカトレアに怖いから自分は行かないと言えるはずもなく、心情的には協力したいのもあって引きつった愛想笑いを浮かべてぎこちなく拍手する。
ポップ的には卒業まで2年間近くも時間があるし、鍛えた結果を考慮して前衛のシエスタを後方からルイズに支援させてスカイドラゴンみたいな下級竜を狩らせるか、仕上がり具合によっては普通のドラゴンと1対1で戦わせるまたは単独で群れに突っ込ませる予定でいた。
「とりあえず俺の魔法でも応急処置くらいなら何とかなるから安心しろ。
それと、薬とかで中毒を起こしてるかも知れんし、吸魔呪文（マホトラ）のついでに回復呪文（ホイミ）と解毒呪文（キアリー）も掛けとくかね？
後は適当に魔法を使って軽い運動もしとけばそう簡単に発作は起こらなくなると思うし、パデキアには滋養強壮の効果もあるから栽培に成功したら薬を作らなくてもある程度は健康になれるんだろうが、この際だからドラゴン討伐をルイズとシエスタの卒業試験にするってのも悪かねぇな」
そう事も無げに言って魔法を使うポップ、ついでに思い付いたリハビリプランを提示するも周囲は置いてけぼり状態で反応がなく、仕方なしに魔法を使用する際の注意事項や簡単なトレーニング方法をカ

トレアに伝授し、覚悟した途端に肩透かしを食らったルイズとシエスタは気抜けした様子で途中まで聞いていたが、ドラゴン討伐の言葉が出るや表情を引き締める。

病気の薬を求めて勇者とメイジが協力してドラゴンに挑む、言葉にすると陳腐だが英雄譚としては定番の胸躍るテーマであり、ハルケギニア(ヴァルディの)で最も有名なお伽噺(勇者)を彷彿とさせる試練に挑む己をそれぞれ想像した。

真面目な表情から一転してニマニマと気色の悪い笑みを浮かべるルイズとシエスタ、どうやら両者の脳内劇場では自身を主人公にした冒険活劇が上演されているらしく、それを優しい笑みを浮かべ見守るカトレアの隣でポップが状況を理解できず困惑する。

そうこうしている内に昼食の時間となり、やる気に満ちたルイズが帰宅を夕食前に引き伸ばして闘気技の実演を見たいと言い出し、お目付け役のコルベールも賛同したとなればポップに断る理由もなく、専門じゃないから駆け出し程度の拙い技になると前置きしてから先日の荒地に移動した。

＊

ぼんやり光っているだけの闘気剣と短距離かつ真っ直ぐ飛ばない闘気弾を練習中なポップは、見た目も気にして単純かつ参考になりそうな大魔王の技を実演する事にし、食らい役としてコルベールが錬金した土人形と対面する。

「まずは高密度の闘気を纏わせた掌底で魔法を撃ち返したりもできるフェニックスウイング、こっちは更に圧縮した闘気を纏わせた鋭い手刀で切り裂くカラミティエンド、そして闘気の障壁を前方に放って押し潰すカラミティウォール、俺の技量じゃ劣化版にもなってねぇただの物真似だけど見た目はそれっぽく再現できたと思うし、見ての通り闘気を操作する延長線上にある単純な技だから習得そのものは難しくないと思うが、ルイズはメイジなんだからやるなとは言わんが系統魔法の練習を優先して精霊魔法と闘気技は余技くらいにしとけよ？」

極めて強力な割りに恐ろしく単純な大魔王の技は、理論的には基本の応用なので見た目を真似るだけなら闘気技の心得さえあれば可能であり、フェニックスウイングで触れた個所を削られ、返す刀で繰り出したカラミティエンドに斬り捨てられた土人形をカラミティウォールが粉砕した。
「何か思ってたより簡単そうね」
「ふーむ、東方にはこちらにない不思議な技法が存在するとは聞いていましたが……よもやここまでとは思ってもいませんでしたぞ」
「ポップさんポップさん、将来的には私もこんな感じの技を教えてもらえるようになるんでしょうか？」
興味津々な表情で軽口を叩くルイズ、好奇心に畏怖が入り混じった様子で呟くコルベール、自分にも同じような技を教えてくれるのかと興奮して問い質すシエスタ、三者三様ながら悪くない反応にほっと息を漏らすポップだが、動かず脆い土人形が相手だったからこそ見栄えのする技を披露できただけであり、フェニックスウイングとカラミティエンドは体術の心得がある者に繰り出したなら簡単に避けられるくらいの大振りだったし、カラミティウォールにしても両手を広げた程度の幅しかなく、肝心の威力は手加減もあって棍棒を持って殴るのと大差ない。
「シエスタに教えるアバン流の奥義だってこれらの技に負けちゃいないし、参考になるかは知らんが他にノーザングランブレードって剣技もあるぜ？
こいつは飛び上がりながら闘気を纏わせた武器をぶち当てて爆発させる強烈な技だが、隙だらけになるから繰り出すタイミングを考えないとカウンターの餌食になるって致命的な欠点があるし、威力は高いけど闘気の消費量も多いから下手に無駄撃ちできない大技だな」
ポップのノーザングランブレードに対する評価はやや低目だが、強力な必殺技に隙が大きかったり消耗するみたいな弱点があるのはそんなに珍しくもなく、事前に相手の動きを止めるなどの小細工をするか仲間と連携すれば十分にカバー可能であり、どちらかと言えば使い手への良くないイメージに引っ張られての発言である。

実演しないのかと問うルイズに対し、武器に纏わせた闘気を当たった瞬間に爆発させられるだけの技量がないと正直に返答したポップは、理論を教えて実演もしたから後の授業で説明が楽になるなと軽い気持ちで考えていたが、早朝の授業で聞いた理論の半分も理解してないシエスタは今から闘気技の練習をするのだと誤解したらしく、恥ずかしそうに俯き消え入りそうな小声でアドバイスを求めた。

態度のおかしなシエスタに首を傾げたポップだが、すぐ傍で暗黒闘気を周囲に振り撒き高笑いするルイズを見てさもありなんと納得し、まずは魔法の修行で教えた瞑想をしたまま自身の内側に感覚の目を向けるよう指示する。

瞑想を始めてすぐに自身の生命力を感じ取れたシエスタを褒めてやりたいポップだったが、目の前に拙いながらも実演した全ての技をあっさりと再現してご満悦なルイズがおり、空気を読んだコルベールが作成した土人形に嬉々として襲い掛かる姿を尻目にフォローを入れた。

「ただの気休めに聞こえるかも知らんが、大ざっぱな説明を聞いただけであそこまで闘気を操れるルイズは俗に言う天才の類だわな。

少し瞑想しただけで生命力を感じ取れたシエスタにも間違いなく才能はあるし、普通だと月単位か年単位の修行をしてやっと闘気技の練習に入れるんだが、変身呪文（モシャス）でお前さんに化けた感想としては間違いなく闘気を扱う才能があるってかないと不完全でも奥義は使えねぇ。

シエスタは闘気の才能でルイズに負けたと思ってるかも知らんが、ルイズは魔法でシエスタに負けたと思ってるみたいだし、実際に全部の呪文と契約できたんだから魔法の才能で勝ってるのは間違いないんだぜ？」

「えっと、何て言うか私はミス・ヴァリエールに勝てないとか負けたくないみたいな競争意識は特に持ってないですし、心配しなくてもただのメイドが少し鍛えただけでそんな簡単に強くなれるみたいな甘い考えはしてないですよ？」

何とか捻り出した励ましの言葉をポカンとした表情で否定され拍

子抜けするポップだが、元よりシエスタには横暴な貴族に対抗するとか村を荒らす亜人を駆逐するみたいな目的がある訳でもなく、マルトーが焚き付けた勢いと子供の頃に遊んだイーヴァルティの勇者ごっこの延長で弟子入りした為、ハイテンションで暴れるルイズに引いている部分はあるものの天才って凄いなくらいの感想しかない。

その後、調子に乗って他の技を見たがったルイズの希望とお仕置きを兼ねて魔法力を使った闘魔傀儡掌（とうまくぐつしょう）を食らわせたのだが、心の琴線に触れる何かがあったのか甚く気に入ったらしく、軽い説明すらしてないのに見よう見真似であっさり習得してしまった。

とは言え、暗黒闘気の糸を指先から1本だけ撃ち出して終わりの劣化版でしかなく、技を使用している間は精神集中が必要な上に自分も身動きできなくなり、拘束力も成人男性が全力を出せば解除される脆弱さなので本家には遠く及ばない完成度だが、念の為に応用技である死体操作に関しては無生物を操れると嘘ではないが正確でもない説明でお茶を濁す事にしてなし崩しに始まった修行を終了する。

＊

「……それじゃあちいねえさま、次は夏季休暇に帰るからどうかお元気でね」

「楽しみに待っているわよルイズ、それとポップさん、貴方とお会いできて良かったわ」

「へっ？」

「私としてはこのまま我が家の婿に入ってもらいたいんだけど、残念ながら貴方の心にはルイズではない誰かが住んでいるようね。

肝心のルイズも貴方を兄のように慕っているみたいだし、私の病気は薬が届くまで少し調子が良くなっただけと誤魔化しておくから安心なさい」

名残惜し気な表情で挨拶するルイズとは対照的に悪戯な笑みを浮かべたカトレアは、朗らかに答えてから居並ぶ動物を避けて部屋の端に立っていたポップの下まで歩み寄ると優しく抱擁し、頬に軽く口付

けしてから耳元に息を吹き掛けるような小声で囁いた。
幸いにして他の目撃者はシエスタとコルベールだけであり、硬直していたルイズが正気に戻り覚えたばかりのフェニックスウイングでポップを張り飛ばしたが、本家の上辺だけを真似た劣化版にもならない模倣技なだけに回復呪文（ホイミ）で治らないものの大したダメージはなく、それでも感情任せに振るって良い技ではないと厳重注意し、その際に暗黒闘気の副効果を教え忘れていた事を思い出す。
とは言え、妹弟子のシエスタもそうだが家族のカトレアや教員のコルベールにもおいそれと教えて良い内容ではないし、自分に自信が持てたルイズの笑顔が曇らないよう説明する為にはかなり言葉を選ぶ必要がある。
言い淀んだポップに代わり淑女のする行為ではないとコルベールが説教し、続けてカトレアも親しい相手でも人に気安く暴力を振るうのは良くないと叱った為、涙目で反省と謝罪の言葉を口にしながら頭を下げるルイズを責める空気でもなくなり、そろそろ学院に帰還する時間が迫っている事もあって暗黒闘気の副効果に関する説明は後回しになった。

＊

中庭には使用人が手入れした学院の馬車と見送りに来たカリーヌが待っており、一行を代表したコルベールと別れの挨拶を交わしてすぐに立ち去ったのだが、朝の時点で視察先に戻ったヴァリエール公爵とルイズから聞き出した魔法理論の検証に勤しんでいるエレオノールの姿はなく、ポップが瞬間移動呪文（ルーラ）を唱えると全員が光の矢となって大空に消え去る。
こうして自宅謹慎を兼ねた修行は予想以上の成果を得て終了し、後は夕食を済ませてそれぞれの生活に戻るかと思われたが、1週間の不在中に学院側でもちょっとした騒ぎが起こっていた。

〔学院への帰還と二つの決闘騒ぎ〕

「では、私は馬車の返却とオールド・オスマンへの報告があるのでお先に失礼するよ」
「……わたしも部屋に戻るわ」
「えっと、私もこの時間だったらまだ仕事が残っているので手伝いに行かないといけないので失礼しますね」
　夕食まで少し時間を残して学院に帰還した一行、まずはコルベールが借りていた馬車の返却とオスマンに謹慎を監督していた報告があると告げて歩み去り、叱られて落ち込んでいるのか元気のないルイズは部屋へ戻るとだけ告げてよろめき去り、それを見送ったシエスタも仕事に戻るからと挨拶もそこそこに木剣を持ったまま走り去り、特に用事のないポップは中途半端な時間をどうしたものかと考えていたが、そこへ鬼気迫る形相で駆け寄って来た金髪巻き毛の少女に左腕を掴まれてしまった。
「いたわねルイズの使い魔、あの時のメイドはどこにいるの!?」
「あの時ってどの時……ってか、金髪フリルのバラ男とやり合った時ならシエスタか？
　シエスタなら仕事の手伝いに戻ったから多分だけど厨房か食堂にいるんじゃね？」
「きっ、金髪フリルのバラ男って、彼の名前はギーシュ、ギーシュ・ド・グラモンよ！
　仮にも決闘した相手の名前くらい覚えてなさい！」
「あれを決闘とか言われるのは不本意だが、まぁ確かに親しくもない相手を変な呼び方するのは失礼っちゃ失礼だな。
　それでギーシュだったか、シエスタの名前は知らなかったみたいだし、あいつがどうかしたのか？」
　話しぶりからギーシュの関係者ではと考えていたポップだが、ふと先日の決闘騒ぎでギーシュが落とした香水を送った相手がこんな巻き毛だったなと思い出し、シエスタとは面識がなさそうな様子からし

てギーシュ側で何かしらの問題が起きたのではと会話の水を向ける。
「ヴィリエ・ド・ロレーヌに決闘を申し込んだのよ。
でもね、ドットのギーシュがラインのロレーヌを相手に勝ち目なんかあるはずないじゃない？
勝敗なんて見えていたのに、勝てるはずがなかったのに、それでもギーシュは杖を手放さなかった。
見てられなかった私がギーシュの負けでいいから許してあげてって……彼はとても怒っていたけれど直撃は避けていたにせよ何度も魔法を受けた身体は限界だったみたいで、気が抜けたのかそのまま倒れてしまったわ。
居合わせたクラスの子が処置した後に私も手持ちの秘薬で治療しといたし、明日にでも目を覚ますと思うけれどそしたら彼はもっと怒るんでしょうね」
「謹慎が終わった途端に決闘とか、負けたばっかなのにちっとも懲りてないねぇのな」
悲しそうに述懐する少女に対し、呆れ交じりに嘆息するポップだが、それだとシエスタを探していた理由が思い当たらない。
「そうじゃないのよ！
ここ数日、ロレーヌから平民に負けた貴族の面汚しと侮辱されても事実だからとギーシュは我慢してた。
でもね、平民が思い上がらないよう現実を教えてやらねばならないとか言い出したのを聞いて止めようとしたのが決闘の理由なの。
ギーシュは、貴方とあの時のメイドを守ろうとしたのよ！」
「こりゃシエスタが危ねぇな。
すまねぇ、悪い予感がするもんでギーシュの見舞いは後にさせてもらうぜ！」
言うが早いか少女を置き去りに走り去るポップだが、ギーシュとの決闘で精神力を消費したものの平民二人を処分するくらいなら問題なしと判断したヴィリエの行動が早く、厨房に駆け込みシエスタの居場所を聞いた時点で既に手遅れだった。

＊

ヴィリエ・ド・ロレーヌは、風系統の高名なメイジを多く輩出する家に生まれた風のラインメイジであり、同学年の中では例外的な留学生（トライアングル）を除くとトップに近い実力者（ライン）だが、自己評価の高さに由来する傲慢な性格が災いして友人は多くない。

後先を考えない性分なのか過去に何度もやらかしており、平民に負けたギーシュが気に食わなかったのかほとんど言い掛かりに近い理屈で決闘を持ち掛けた上、元々のランク差があって有利な相手に怪我を負わせ貴族の誇りを守ったと言い張っている。

当事者が秘密にしていれば大丈夫と考えているようだが、本来でもそれなりに問題だったろうこの行動も改めての決闘厳禁を言い渡した直後に行われたとなれば学院側として見逃せるはずもなく、何もなければ事情聴取から厳罰の流れが待っていた。

「イヤァァァァッ！」

「グホァッ！」

乾いた破裂音と共にヴィリエの身体が放物線を描いて宙を舞う、数メイルの距離を一瞬にして踏破したシエスタの右腕には根元から折れ砕けた木剣が逆手に握られており、チップ状になって舞い散る木片が次の事実を告げている。

つまりは、立会人が決闘開始を告げてから数秒で距離を詰めたシエスタにより、”詠唱する間もなく木剣が粉砕するような打撃を叩き込まれたヴィリエが見せ場もなく倒された”と言う事だ。

数秒の滞空時間を経て地面に落下したヴィリエだったが、起き上がるどころかピクリとも動かず呻き声すら上げていないのを不審に思った誰かが声を上げると追従するよう観衆が騒ぎ始める。

「どうやら気絶してるみたいだから医務室に運んでおくぜ」

少し前に駆け付け様子を見ていたポップがヴィリエを抱えて走り去り、入れ違いで現れたコルベールが呆然とするシエスタを連れ去った後になってようやく他の教師らが騒ぎを聞き付け現れたが、聞き取りをしようにも意味不明で要領を得ない証言と半狂乱で支離滅裂な

言動をする生徒ばかりでまともな現場検証すら出来なかった。

＊

「……全く、たった数日の修行でここまでやるとは思わなかったぜ。
不完全なアバンストラッシュを見ただけであそこまで再現されるなんざ、シエスタの将来性を考えると恐ろしくなるな」
胸部圧迫による肋骨数本の骨折と臓器損傷、吐血してないのが不思議なくらいの重傷だが、これを僅か数日の修行と木剣でやったのだからシエスタは本物の天才と言える。
効果を調節した回復呪文（ホイミ）でヴィリエの負傷を跡形もなく治療してから睡眠呪文（ラリホー）で深く眠らせたポップは、実戦レベルまで育った弟子に喜びと呆れの混じった評価を下した。
そのまま医務室を出たポップは広場へと引き返し、状況が掴めず困り果てていた教師に声を掛け私見ながらと説明する。
細かい事情は知らないが無理やりに決闘を仕掛けたヴィリエは、破れかぶれになって突進して来たメイドに驚き後退しようとして足を滑らせ、それと同時に唱えていたエア・ハンマーが発動して棒切れを吹き飛ばしたが、本人は転んだ拍子に頭でも打ったのか気絶したのを周囲の連中が勘違いして大騒ぎになっていると、時間なしの即興で考えた嘘は言っている本人すら穴だらけと思う内容だった。
この無理筋にも程がある説明に納得した教師の報告により事件は穏便に処理され、以前にも同様の騒ぎを起こしていたヴィリエが１０日間の停学処分を受けて謹慎している間にメイドと決闘して負けた『間抜け』と言う不名誉極まりない二つ名を拝領し、逆にシエスタの方は木剣１本で貴族に勝った凄いメイドとして株を上げ、威張り散らしていた貴族の小僧が負けたと聞いて大いに溜飲を下げたマルトーから後に我らの剣なる称号を送られる事となる。

＊

「おーいルイズ、食堂に来なかったみたいだが寝てんの……何やってんだ？」
「別に、何でもないわよ」
興奮したマルトーのしつこいスキンシップに辟易しながら食事を終えて部屋に戻ったポップだが、明かりも点けないまま毛布を被って右親指の爪を噛むルイズが乱れたベッドの縁に背を預け座り込んでおり、闘気の使い過ぎで具合が悪くなったかと心配するも顔色はそこまで悪くないし、見た限りどうやら何か気に食わない事があって拗ねているだけらしく、口では何でもないと言いながらじっとりとした半眼が理由を聞けと催促していた。
どうにも面倒臭くはあるが、ここで気付かぬふりをしたら後々でもっと面倒な事態になるのは目に見えており、加えてルイズの様子がおかしい原因に心当たりがあったポップは、これを機会に触り部分のみだった闘気と暗黒闘気の違いや危険性に関してきちんと説明しておく事にする。
「まぁ、あれだな。
闘気ってのは生命力に精神力って言うと紛らわしいから感情の力と呼ぶけどを添加してるんだが、使い手の気合っつーか気分で威力が増えたり減ったりする反面、生命力を燃やしている以上は使い過ぎたら具合が悪くなったり無理したら気絶するってのは今朝の授業で教えたよな？
そんで、生命力ってのは体力とか活力も含んでるから普通は途中で気絶しちまうもんなんだが、お前さんみたく感情の起伏が激しい奴は昂った自分の感情に振り回されて生命力を根こそぎ燃やし尽くしちまう危険性があるんだわ。
つっても素人が練れる闘気の量なんざ微々たるもんだし、そこらの説明はシエスタが闘気を練れるようになってからでも良いと思ってたんだが、お前さんは少しの説明で闘気を練れるようになって見ただけの技を覚えちまうくらいのはっきり言っちまえば俺の手に余る天才だ」
途中で脅かすような文言はあったが、色んな意味で凄いと思えた相

手に天才とまで言われて悪い気はしないルイズ、しかし話はまだ終わってない。
「技術的な部分で俺の先を行くようなら先生が書いた指南書を翻訳するし、何なら仲間とか知り合いに声を掛けるつもりだからそこは心配すんな。
問題なのはお前さんの適性が暗黒闘気である事、暗黒闘気には毒と似たような追加効果があって、自分のものじゃない暗黒闘気が身体に留まっている間は回復魔法やアイテムを使っても怪我が治らなくなるし、方法は知らんが火とかの属性を宿らせられるって事だけは知ってる」
「……何だか悪役みたいな危ない力だってのに、あんたは叱ったり使うなって言わないのね？」
「お前さんがどう思ってるかは知らんが、修行してきちんと使えるようになった系統魔法も人を傷付けたり殺せたりする危ない力だし、極端に言っちまえばペーパーナイフや服の飾り紐だって悪用すれば簡単に人を殺せる危ない道具って事になるんだぜ？
それに簡単な説明であっさり暗黒闘気を出せちまった以上、悪い面ばかり強調して危ないから使うなとか日和った事を言ってるよりかは、心を磨いて光の闘気を出せるようになった方が良いし、例え暗黒闘気しか使えなくってもお前さんが道を踏み外さなきゃ何の問題もないわな」
どう聞いても物語の悪役が使いそうな能力に気後れするルイズだが、前向きなようでただの楽観論とも取れるポップの意見に拍子抜けし、それと同時に自身が良くない感情の持ち主である事への後ろめたさが少しだけ薄れたような気がした。
誰かに見られないよう心の奥底に閉じ込めていた泣き言ばかりを喚き散らすもう一人のルイズ、幼い頃から気高く誇りを持って正しく生きよと教えられ育った自分にあってはならないと否定していた弱い側面だが、憎悪や羨望などの貴族である以前に人として恥ずべき暗い感情が力になると言うのであれば、勇気を出して向き合うのも良いかと思えて来るのだから現金なものである。

ポップと出会ってから渇望していた魔法を使えるようになり、敬愛する次姉の身体を治療する道筋が見えた現状、得体の知れない怪しげな力に頼る必要性は欠片とないが、心を磨けば光の力になるかも知れないと聞いて試さない理由はなく、何より暗黒闘気を使っていると自身がとても凄い存在になったかのように感じられるので、禁じられてもないのにわざわざ手放すと言う選択肢はありえない。

それに考えてみれば、今までだって無能と馬鹿にされ危ないから使うなと罵倒されてもお構いなしに魔法を使い爆発させていたのに、手足の曲げ伸ばしや呼吸と同じくらい馴染んだ暗黒闘気をそんな連中に遠慮して封印する義理はないし、ポップだって道を踏み外さなければ問題もないと肯定してくれており、危険な副作用や追加効果があるにしても使い方と心の持ちようを間違えなければ良いだけだ。

「暗黒闘気が心の力だって言うんなら、わたしの中にいる弱くて情けないわたしと向き合わないといけないのよね？」

「まっ、自分の弱さを認めるってのは口で言うだけなら簡単だけどそう簡単には行かないもんだ。

負の感情に流されないよう自制心を鍛えるだけじゃなく、お前さんがメイジとして成長すればそれが確かな自信となって心の弱い部分を受け入れる土台になるだろうし、もしも道を間違えそうになったら俺がぶん殴ってでも止めてやるから気負いなさんな」

決意を込めた表情で訊ねるルイズに対し、そこまで大層な覚悟をする必要はないと言いたげに答えるポップだが、この後すぐに夕食を食べそびれたルイズの腹の音が鳴って色々と台無しになり、癇癪を起す前にマルトーから預かっていたクックベリーパイを投げ渡して素早く退散したポップは、ギーシュの見舞いと治療を兼ねて男子寮に向かう事にする。

＊

「……以上がポップ君の授業から聞き取った魔法理論になります」

「東方では宗教に横槍を入れられず様々な分野で自由な研究が進んで

おるとは聞いておったが、よもや魔法の仕組みを原理部分から解き明かしておるとは予想外にも程があるわい。
　して、ミス・ヴァリエールへの口止めはどうなっておるかね？」
「残念ながらミス・ヴァリエールの長姉に知られており、研究用の資料として定期的なレポートの提出を命じられたそうです」
　場面は切り替わり学院長室、ルイズの自宅謹慎に随行したコルベールがオスマンへの報告を行っていた。
「ふむ、確か王立魔法研究所（アカデミー）に勤めておるエレオノール女史であったか、例え誰ぞが名誉欲に駆られたとしてもヴァリエール公爵家の長女から研究を取り上げる度胸の持ち主はおらんじゃろうし、ちと短気に過ぎる性分が心配ではあるが末妹の立場が悪くなるような真似はすまいよ。
　とは言え、学院側でミス・ヴァリエールが提出するレポートの監督をしておかねば、今のトリステインにはまだ早い技術や知識を広めてしまうやも知れんし、あまり気は進まんが近い内にエレオノール女史が先走らんよう釘を刺す必要がありそうじゃな」
「……時にオールド・オスマン」
「何じゃね？」
「いつまでミス・ロングビルに変身したままでいるつもりなのですか？」
「これは異な事を言うのミスタ・コベルール、わしは東方のマジックアイテムにどれだけの持続性があるのかを学術的な探求心に従い試しておると言うのに、ここぞとばかりに女子の身体を堪能しようとするエロ爺を見るような目をするでないわ！」
　資料用としてコルベールから渡された変身呪文（モシャス）のカードを躊躇なく使用したオスマンは、嬉々としてロングビルに変身してすぐさま上着を脱ぎ捨てており、現在も真面目な表情で事前の策を述べながら下着姿のまま自身の尻や胸を撫で回している。
「語るに落ちましたね。
　今すぐ変身を解くのであれば、このままミス・ロングビルには何も言わずに納められますよ」

「ふふん、これを見てもそんな善人顔ができよるかの？」
「そっ、そのポーズと視線はいけません」
「……ええ、ええ、その破廉恥な恰好と表情はとてもいけません。
ミスタ・コルベールには、何がどうして、わたくしの姿をした人物が、机の上でストリップを披露しているのか、十分に納得の行く説明をして、頂きたいのですが、勿論、宜しいですよね？」
表情こそ真面目なコルベールだったが、視線は捏ね回されている胸と尻を頻繁に行き来しており、挑発的な笑みを浮かべたオスマンが乳房を持ち上げるようなポーズで流し目を送ると見る間に赤面し、背後から響いた途切れ途切れに段々と重圧感を増す質問を聞いて真っ青になった。
「ミッ、ミス・ロングビル、預けたシエスタ君のフォローはどうなさったのですか？」
「他の使用人が嬉々として引き受けてくれました。
それよりもミスタ・コルベール、状況からしてそちらの人物はオールド・オスマンと考えても宜しいのでしょうか？」
「うむ、わしはポップ君が持っていた他者に変身できるマジックアイテムの実験でロングビル君の姿を借りておったんじゃが、そこでふと変身したまま上着を脱いだらどうなるか疑問に思ってしまったのだよ。
つまりこれは、研究者としての学術的好奇心が抑えられなんだ結果であり、決してこの機会に女子の身体を堪能しようと思ったとか、モテない中年男の助平心を弄ぼうみたいな悪戯心が生じたとかではないんじゃよ？」
ほぼ巻き添えのコルベールだが、上着を脱ごうとしたオスマンを止めなかった時点で助平心があったのは間違いなく、両者の何とか誤魔化そうとする態度は怒れるロングビルに対して逆効果となり、激しい折檻と普段からの愚痴を含む長い説教が深夜まで行われる事となる。

〔二人で街ぶら、デートにあらず〕

魔法を使えるようになって大きく変化するかと思われたルイズの学院生活だが、先日の爆発騒ぎの後でルイズに魔法を使用させようとする物好きな教員がいるはずもなく、魔法の使用よりも雑談と座学に偏っているコルベールの授業では指名される機会すらない。

普通に生活していると魔法を使う機会はほとんどなく、遠くの物を取るのに念力を使うかどうかな上、使うつもりはさらさらないもののアンロックを唱えるのは明確な校則違反であり、他にも相応の理由がない限り魔法を気安く使ってはならないと定められている。

とは言え、具体的な罰則すらない注意喚起程度の緩い規則であり、わざわざ遵守しているのは実行不能かつ生真面目な性分のルイズくらいのものだったが、魔法を使えるようになったから嬉々としてルール違反をすると言った発想はなく、目に見える変化としてはゼロ呼ばわりされても凄みのある笑みを浮かべるだけで反論しなくなった事くらいだった。

絡まれるかと懸念していたポップもオスマンが聴講生として公式に遇すると発表していた事に加え、自宅謹慎から戻った翌日に貴族の証であるマントと杖を身に付けルイズの授業に同行していた為、ヴァリエール公爵家の客分として貴族に準ずる地位を付与されたのではないかと思われており、教員や他の生徒に対し敬意こそ足りないが無礼でもない態度で接する事もあって身分の判別が難しく、詳しい事情が判別するまでの様子見を兼ねて遠巻きにされている。

そしてヴィリエに絡まれたシエスタだが、落ち込んだり怯えるかと思いきや翌日には平然と朝の修行に参加しており、使用人相手に決闘を挑んでも勝って当然負けたら大恥な上に罰則を食らうとあっては新たな挑戦者が現われるはずもなく、マルトーの激しいスキンシップと妙な特別扱いを除けばこれまで通りの日々を送っていた。

＊

ポップが譲り受けた新装版アバンの書は、既存の武術全般とアバン流闘殺法独自の戦闘技術を比較解説する地の章、古今東西の様々な闘気技や呪文を網羅した海の章、勇者としての心構えとアバンの訓示が記された空の章からなる。

暇があったら読めと渡されていたマトリフの書は、主に錬金術や薬草学など魔法以外の分野についてマトリフが編纂した世界で一冊だけの教本であり、実用的な知識が必要最低限の文章で書かれているだけの内容は読み手を選ぶが、外見や若さに似合わぬ知恵者のポップは熟読して大半の内容を理解し、残りの大まかな部分も文章として暗記していた。

そんなポップが手に持っている絵本のタイトルはイーヴァルディの勇者と読むらしいのだが、生憎と見た事もない文字なのでそのままでは読めやしなかったし、いくらなんでも知らない文字で書かれた本の文章までは暗記できない。

コルベールから教わったリードランゲージの魔法で大まかな内容を知るのは簡単だが、書かれた文字に込められた意図を自分が知っている語意に置き換えるこの方法だと正確な内容を読み取れているか怪しく、規格外の魔法力があるからと言って呪文を唱えながら読書をするのも面倒である。

リードランゲージを込めた眼鏡も作ってはみたが、文章を理解する分には問題なくても内容が意訳される欠陥はそのままになっており、仕方なく内容が簡単な子供向けの本を図書室から何冊か借りて来るようルイズに頼んだ際、とある読書好きの生徒から強くお勧めされた一冊がこの本だった。

翻訳された文章と描かれた挿絵の場面から本来の文言を推察し、単語の意味と文法を理解するパズルじみた作業ではあるが、子供向けの絵本は内容が簡単なだけに読み解き易く、ほんの数日で基本的な読み書きを行えるようになってはいるものの絵本から学べる語彙はそんなに多くない。

語学の才能でもあったのかポップは辞書を片手に着々と語彙を増やしており、教員であるコルベールに加えてルイズとシエスタも指南

役を買って出たが、研究者気質かつ好奇心旺盛なコルベールは雑談や質問ばかりでまともな授業をしているとは言い難いし、下町言葉やタルブ訛りなどの本来の授業から外れた事柄を教えようとする上に教材として女性向けの恋愛小説を勧めるシエスタも同様、具体的な授業内容が思い付かず暇な時間に覚えた言葉の発音や普段使いするかどうかを聞かれて答えるだけのルイズが最も学習に貢献している。

「買い物に行くわよ」

「ん、キメラの翼ならもうないぞ？」

「こっちはあんたが魔法のカードを簡単に作れるって、ミスタ・コルベールから聞いて知ってるのよ。

幸いにも今日は虚無の曜日だし、お母さまからあんたへの支度金を渡すついでに口座を開設するよう手紙が来てて、ついでに家を建てる以上はベッドとかの家具も使い古しよりは新品が良いでしょ？

残念だけどわたしは瞬間移動呪文（ルーラ）と契約できなかったし、契約できたシエスタもまだ使えそうにないって言ってた以上、トリスタニアに行く方法はあんたにカードを作らせるか馬で移動するかのどっちか、乗馬は好きだけど時間が惜しいからカードを作ってよね」

「それが人にものを頼む態度かよ？

まぁ、俺もゴールドは使えなさそうだから手持ちの宝石とかを換金しときたかったし、家具は中古でも良いが寝具くらいは新品を買っときたいしな。

つーか、魔法のカードを作るのはそれなりに魔法力を消費するし、お前さんだけなら手を繋げば飛翔呪文（トベルーラ）で運べるからそっちで良ければ連れてってやるよ」

早朝の修行と食事を終えのんびり読書していたポップに宣言するルイズ、公式な聴講生としての立場を保証したオスマンに男性が女子寮で寝起きするのはどうかとコルベールが進言し、受け入れたものの男子寮や教員棟に移動させると部屋割りで揉めるのが目に見えており、かと言って使用人の宿舎に住ませると生徒から低く見られそうな為、暇を見て利用者が少ないヴェストリの広場に居住用の小屋を建てる事が決まっていた。

カリーヌからの手紙にはルイズの口座にポップへの支度金を振り込んだから新規で口座開設の手続きを行うよう書かれており、金額への不満や追加の要求があれば速やかに連絡するよう追記されていただけでなく、身分証明としてヴァリエール家の家紋が彫られた鎖付きのメダルと身元を保証する内容の書類が同封される念の入用である。

そしてルイズの口座に振り込まれた金額は1万エキュー、平均的な男爵領の年間総税収または下級貴族の俸禄２０年分に相当すると言えば大金に感じるが、国内有数の大貴族であるヴァリエール公爵家の家格と財力に加えてポップが成し遂げた実績を考慮すればまだ足りないくらいであり、ここで変に支払いをケチるのは貴族として以前に親としての面目が立たない。

特に急ぎの用事がなかったポップは、ルイズの態度に思う所はあったものの宝石類の換金がしたかった事もあって買い出しには同意したが、何かある度に魔法のカードを作らされるのは嫌なので飛翔呪文（トベルーラ）による移動を提案した。

ルイズとしては移動時間が短縮できれば問題ないので否はなく、異性のポップと手を繋ぐ事に対しても特に抵抗感がなかった事からあっさり了承し、馬どころか下手したら風竜よりも早い飛翔呪文（トベルーラ）と視界内瞬間移動呪文（ルーラ）の併用で数分も掛からずトリスタニアに到着する。

＊

「まずは銀行であんたの口座を開設するわよ。

ちょっと安くなるけど宝石とかの買い取りとかもやってるし、高く売りたいのなら出入りの宝飾店を紹介しても良いわよ？」

興味深げに街並みを観察するポップの左手を掴んだルイズは問答無用とばかりに歩き出し、到着した銀行で口座開設と貯金の移動を手早く済ませると支配人に別室での相談を取り付けた。

万年金欠な貧乏貴族向けに銀行は質屋のような業務も行っており、持ち込まれた宝飾品や美術品から別宅などの不動産までを担保に金銭を貸し付けるだけでなく、普通に持ち込まれた貴金属や自作したマ

ジックアイテムの買い取りなども行っているが、これは支払い能力はないけど見栄っ張りな貴族側の無茶振りに応えただけで、名目上は銀行側が献上した資金に対する返礼として質草を下賜した事になっている。

そんな訳で渋々と言った様子で現れた支配人だったが、テーブルの上に次々と並べられる大粒の宝石類と貴金属を見て態度が一変し、興奮した様子の鑑定士と思しき人物が口を開こうとする前に視線で黙らせた。

「本来であれば宝石類や貴金属の買い取り価格は専門店より安くなりますが、この品質と点数であれば臨時オークションを開催しても良いと思います。

オークションが終わるまでの預かり保証金は3万エキュー、こちらの手数料として売り上げの5%を頂き売れ残った品は最低入札額で買い取りたく思っておりますが、どうでしょうご了承いただけますでしょうか?」

「こっちの相場とか分らんから全部お任せします」

お手本のような営業スマイルを浮かべて提案する支配人に対し、何となく貧乏性で拾い集めていた諸々の品を処分したいだけのポップに否はなく、翌月に行われたオークションでは巨大な宝石もそうだがいくつか混じっていた魔法の装飾品に予想以上の高値が付いて大荒れとなるのだが、そこらは本筋と関係ない余談なので詳しい描写は省略する。

＊

中央通りに面して庶民向けから上流階層向けまで様々な店が整然と立ち並ぶブルドンネ街とは対照的に、裏通りのチクトンネ街は崩れ掛けた廃屋や道端に張られた粗末なテント小屋に胡乱な輩が住み付き半ばスラムと化しており、職にあぶれたゴロツキ紛いの浮浪者が物陰から獲物を物色するような無法地帯ではあるが、魔法学院の制服を着用した少女を相手に絡みたがる命知らずはいなかった。

貴族の娘を誘拐すれば身代金が取れると考えるかも知れないが、面子を潰された貴族の報復は損得勘定や後先を考えない苛烈なものとなる事が多々あり、一族郎党を引き連れて住人の皆殺しくらいは普通にやらかすので計画的な犯行はあっても突発的に誘拐を企てる者は少なく、それ以前に衛士隊の怠慢で見逃されている部分があるチクトンネ街の住人は貴族との揉め事を可能な限り避けている。

目的地の寝具店で買い物を済ませたついでに立ち寄った武器屋だったが、商品棚に陳列されていた銃器を見つけたポップはルイズが止めるのも聞かず好奇心を全開にして弄り回していた。

ポップの世界でも銃器や大砲は既に存在しているが、個人の魔法や武術の強力さに加えて工業的な分野での技術不足から歩留まりが悪く、大国の軍隊ならともかくそこらの武器屋ではまず取り扱ってないし、そもそも需要がないので取り寄せもできない。

少なくともポップの知る範囲では、ベンガーナ王国にあるデパートや専門店を訪れ大金を積むか、武器屋を兼業する錬金術師にでも作ってもらうしか入手方法はなく、それが他の武器と大差ない値段で置いてあれば興味も引かれると言うものである。

銀行から引き出した小遣い銭では足りなかったので、取り引き用に残しておいた小粒の宝石を支払いに充てようとした辺りで横槍が入った。

「ちょっとポップ、銃なんか見てないで剣を買いなさい。あんたはわたしの従者なんだから、貴族に仕える者が相応しい武器を使ってないとわたしの恥になるんだから銃は絶対に駄目よ！」

「そう言われてもな。ここに置いてある武器の大半は品質の低い鋳物だし、残りもわざわざ買うくらいなら自分で錬金した方がましってもんだぜ。つーか、いくら見た目は立派でもまともな刃もない鉄塊なんざ剣とは呼べねぇよ」

不機嫌さを隠そうともせず噛み付くルイズを宥めていたポップだが、思わず漏らした本音に今度は店主の機嫌が目に見えて悪くなる。

「ちょっと待ちなよお客さん、それじゃあウチの商品がガラクタばか

りだと言ってるのと同じなんじゃないですかい？」
「あー、ちょいと言い方が悪かったな。
だけど、武器屋の倅としてここの品揃えを見るとどれも儀礼用ばかりで実戦向きじゃねぇように思えてね。
侘びと言っちゃ何だが、錬金で悪いけどこの剣を受け取ってくれよ」
言うが早いか輝きの杖を抜いたポップがルーンを唱え、無骨だがしっかりとした作りの長剣を錬金してから固定化を掛け店主に手渡す。
モデルとしたのは魔界の名工ロン・ベルクが適当に打ったと嘯いていた長剣、飾り気がなく取り回しの良さと切れ味を追求した逸品ではあるものの伝説クラスと比べたら数歩ばかり劣る無銘の業物を上手く模倣しており、固定化による強化もあって剣の振り方を知っている者が振るえば鉄を斬れる名品となっていた。
「昼寝の邪魔をしやがって、デケェ声でガチャガチャ騒いでんじゃねえぞ！」
受け取った剣を見た店主は大喜びで謝罪を受け入れようとしたが、それを遮るように店の隅に置かれていた樽から不機嫌そうなダミ声が響き渡り、面食らった表情のポップとルイズは不思議そうに顔を見合わせる。
「黙れボロ剣、屑鉄として鋳潰されたくなきゃ商売の邪魔をするな！」
「ハッ、投げ売りでつまんねえ三下傭兵に振われるくらいならこのまま溶かされた方がマシってもんだ！」
「それってインテリジェンスソードよね？」
「へいっ、どっかの物好きがこさえた根性曲がりのボロ剣なんですが、ご覧の通り口が悪くて買い手が付かないんですわ」
「ボロとは何だこのインチキ野郎、てめはいつも相手の足下見てぼったくろうとしてやがんだろうが！」
「言い方は悪いが商売ってのは全部じゃないがそんな面もあるもんだろ？
それより鋳潰すくらいなら俺に見せてくれ、インテリジェンスソー

ドってのは初めてで興味があるんだ」
　樽から引き抜いた古ぼけた大剣に対し怒鳴り付ける店主、留め具の部分を動かし反論する大剣を見たルイズが正体に思い当たり、コントじみた口論を傍観していたポップが大剣に興味を示し、受け渡された大剣は文句を言うかと思いきや急に黙り込んでしまった。
「……おでれーた、その若さで歴代の使い手に見劣りしない強さだと？
　どんな修行をしたんだおめえ、こんなのチグハグとかデタラメってレベルじゃねえぞ！
　絶対に損はさせねえから俺を買え、って言うか頼むから買ってくれよ」
「そこまで言うなら俺は間に合ってるから代わりに弟子を紹介するよ。
　才能は底なしの本物、順調にレベルアップすりゃ大陸最強は硬い未来の勇者で、家事が得意な若くて可愛い女の子ってお買い得物件だぜ？」
　これまでとは様子が一変して神妙な声を出し懇願する大剣、買うつもりはなかったポップだがシエスタに買い与えるのも悪くないと思い直す。
「なあ店主、こいつはいくらだい？」
「あー、デル公でしたら新金貨で５０と言いたいとこですが、こんなにも立派な剣を頂いたお礼としちゃ釣り合わないかも知れませんが差し上げます。
　それと物は相談なんですが、お貴族様の都合が良い時で構わないんで錬金した剣を持ち込んで下されば高値で買い取りいたしますぜ？」
「ちょっとポップ、そんな汚くてオンボロな剣を持って帰るのは止めときなさいよ。
　あんたがさっき錬金で作った剣の方が……って言うか、自分で作れるならそもそも買う必要なかったわね。
　こいつはわたしの従者で家庭教師だからお金には困ってないし、わざわざ錬金で作った剣を売らなくても給与が足りなければいくらで

も出すってお母さまの手紙に書いてあったからお金に困ったらすぐ相談なさい」
「くれるってんならありがたく受け取らせてもらうよ。
とりあえず剣は暇を見て作っとくから新型の銃とか珍しい武器があれば、トリステイン魔法学院のポップ宛てで連絡してくれないか？
宝石払いで良ければ前金でこいつを預けるし、とりあえず俺の名義で４万エキューの貯金があるからその範囲を超えてなければ現金で支払えるぜ」
ポップの提案を聞いた店主は大喜びで了承し、前金代わりとして差し出された宝石の詰まった布袋を素早く受け取り、店を後にする二人を気色の悪い猫なで声と大仰なお辞儀で見送りする。
「それでお前さんには銘とかあるのか？」
「俺の名は魔剣デルフリンガー、これでも六千年の時を生きた伝説の名剣よ！」
「……うそくさ」
銘を問うポップに決め声で答える大剣、隣で見ていたルイズはぼそりと感想を漏らすが突っ込むつもりはないらしく、ブルドンネ街の高級レストランで昼食を済ませてからあちこちの店を見て回り、夕方近くまでトリスタニア観光を楽しんでから瞬間移動呪文（ルーラ）を使い学院に戻った。

〔雪風の考察〕

「さて、こいつをシエスタに渡して来るとするかね」
「わたしは部屋に戻るけど本気でそのオンボロ剣を渡すつもりなの？」
「ちと騒がしいのは気になるが、こんなになるまで使い込まれた剣の記憶ってのは無駄じゃねぇだろうし、例え無駄でも作りそのものはあの店にあった他の剣よりかしっかりしてるから少なくとも大剣の練習用には使えるさ」
　昼の街歩きでも騒がしかったデルフリンガーはルイズに留め具をがっちり固定されており、恐らく文句でも言おうとしているのか小刻みに震えてはいるものの声はなく、封印を解いてもどうせ出てくるのは罵詈雑言の類だろうと予想したポップは気付かぬふりをしたまま調理場に向かった。
　土産と聞いて喜んだシエスタだったが、汚れ草臥れ錆の浮いた片刃の大剣を渡された上にダミ声で挨拶されたとあっては愉快なはずもなく、機嫌取りに差し出した祈りの指輪を見て今度は逆に恐縮されたりしたが、本筋とはほとんど関係ない内容なので詳しい描写は省略する。

＊

視点変更：タバサ

＊

　任務や用事がない虚無の曜日は、部屋全体にサイレントを掛けてゆっくり読書するのが私の過ごし方、使えるお金の問題で図書館の本ばかりになるが、長い歴史を誇るトリステイン魔法学院の蔵書は在学中に読み切れる分量ではなく、学術書の他にも卒業生が寄贈した小説や旅行記など様々な分野の本が揃っている為、金銭的な余裕がない身

としてありがたく利用させてもらっていた。
そろそろ昼なのでついさっき読み終えた推理小説を本棚に戻し、食堂へと移動しながらここ数日で気になっている事柄を思い返す。
まず一つ目はキュルケの機嫌が良くない事、原因はいつも言い争っていたヴァリエールが挑発を一笑に付し取り合わなくなったからであり、これに関しては素直でない励ましの言葉が裏目に出た結果なので特に不思議とも思わないが、どちらかと言えば浮かべていた笑いの方が気になっている。
あれは精神的な優位性から来る嘲笑の類であり、ほんの少し前までの追い詰められた小動物みたいな余裕のなさとは正反対の落ち着きぶりだが、たかが使い魔を召喚できたくらいの事であんなに性格が変わるとは思えないし、自宅謹慎で里帰りした一週間の間に何かが起こったと考えるべきだ。
キュルケはヴァリエールに何度も絡んでいるが、先祖代々の因縁とやらはあっても個人的な嫌悪の感情はないらしく、競り合える機会があったらとりあえず勝負を仕掛けるくらいの感覚でおり、学科試験の成績では全敗しているものの実技が不戦勝になっているので結果的に引き分けとなっている。
傍から見ればキュルケの行動は空回りでしかなく、魔法を使えば爆発するヴァリエールと張り合おうとする行為そのものが嫌味でしかないし、向こうからすれば馬鹿にしていると思われるだけであり、実際に周囲の生徒が辛辣な言葉を掛けるようになった原因と言えなくもない。
入学からの数ヶ月は公爵令嬢だからと大半の生徒は不満があっても関わらないようにしていたが、キュルケだけは親の爵位など知った事かと失敗魔法に対する文句を正面から堂々と申し入れただけでなく、ヴァリエールも聞き入れず無視するか理屈にならない反論はしたものの特に報復などは行わなかった為、日和見していた何人かが聞こえるかどうかの距離で遠回しな嫌味や不満をこっそり吐き捨てるようになり、それを聞き咎められなかった事に味を占めて段々と声の大きさや言葉遣いに遠慮がなくなって行った。

感覚が麻痺した生徒の中でも特に考えが足りない数名はヴァリエールを日常的に罵倒するようになり、それ以外の大半もそれを諌めたり忠告するような様子はなく、まともに魔法を使えない事を揶揄する意味でゼロのルイズと蔑称じみた二つ名が付けられる頃には、公爵家の三女に対する不敬を何とも思わないようになっていたが、先日の授業でミセス・シュヴルーズに指摘されてやっと実家の存在を思い出したようである。

今更になって謝罪しても手遅れだろうと思うが、性格的に考えて自宅謹慎で里帰りしたヴァリエールが親に泣き付いたとは思えないし、やるならもっと早くに行動しているはずだから報復する可能性は低く、やり返される覚悟もなく調子に乗っていた連中が勝手に怯えているだけだ。

＊

食堂に着いたのでとりあえず思考を中断し、テーブルにずらりと並べられた様々なパイ料理の山を崩す作業に取り掛かる。

虚無の曜日は事前の連絡なく出掛ける者が多い為、どうしても大量の残り物が出るので大皿に盛った料理を自由に取り分ける方式を採用したらしいが、本日のメニューはフィッシュパイやステーキパイと言ったアルビオンのパイ料理がメインであり、食材の味がしなくなるくらい大量の香辛料を使ったトリステイン料理は申し訳程度の品数がテーブルの中央に並べられていた。

学院に勤める料理長は腕が良く、本来なら過剰な香辛料に埋もれる素材の味を殺さず引き出しているが、馬鹿舌の多いトリステイン貴族からの評価は賛否が分かれており、他国の料理を貧相と貶しながら珍しい食材に濃厚なソースがたっぷり掛かっていればそれで満足するような連中が多く、キュルケから聞いた話では勤めていた店の支配人と揉め事を起こし路頭に迷っていた所をオールド・オスマンが雇い入れたらしい。

実際の真偽は不明だが、わざわざトリステイン風にアレンジしたパ

イを出す辺りからして自分の舌と腕に自信があるのは間違いなく、本来なら風味付け程度にしか入ってない香辛料が味を壊さない限界まで使われており、一人前サイズかつ冷えても食べられそうな味付けになっている事から余った分を使用人に配る前提で作られたのではと思えるが、学院で出される食事の献立を決定する権限は料理長にあるので文句を言う筋合いはないし、そんな無駄な行動をするよりも夜食用に肉系とベリー系のパイを何個か持ち帰った方がよほど建設的である。

＊

昼食を終えて夜食も確保できたのでゆっくり読書を再開と行きたいが、食事前に考えようとしていた残りを先に片付ける事にした。

二つ目の気になっている事柄はヴィリエ・ド・ロレーヌが起こした決闘騒ぎ、自信過剰で尊大な性格に加えて相手の実力も量れない三流かつ個人的な因縁もあった為、メイドに絡んで返り討ちになったと聞いた際は思わず間抜けと評価してしまったが、腐ってもラインである彼がメイジ殺しでもない平民と戦って負ける程に弱いかと問われれば断じて否だし、ふらりと現れたヴァリエールの使い魔が述べた目撃証言にはいくつもの疑問点がある。

背後や物陰から襲われたならともかく、双方の距離が十分に離れた対面方式の決闘では、走って殴り掛かるよりもルーンを唱える方が圧倒的に早いし、突進に驚いて後退しようとしたら転んで頭を打ち気絶するとか普通に考えてそんな偶然はまず起こらない。

何より、収束させるのが難しいエア・ハンマーで木剣を粉砕しようとしたら持ち主の腕ごと吹き飛ばしそうなものだが、翌日に給仕している姿を確認したメイドは怪我をしているようには見えなかったし、奇跡的な偶然の積み重なりとするよりは何者かが見えない位置から別口でエア・ハンマーを撃ち込んだと考える方が自然であり、そうなると犯人は教員または生徒の誰かとなるが特定はかなり難しそうだ。

ヴィリエ・ド・ロレーヌは普段から不快な行動を繰り返していたし、

威勢の良い無責任な発言である程度の賛同を得てはいるもののそれ以上に嫌っている者の方が多く、直接の付き合いがない上級生や下級生にも悪い噂が伝わっていると以前にキュルケから聞いている。

見苦しい行為への義憤や個人的な嫌悪などの動機を抱く者は何人もいるだろうし、離れた距離から嫌がらせで撃ち込んだエア・ハンマーがメイドの木剣に当たって加速させたとも考えられるが、そんな無理のある推理よりも確実な手段と納得できる動機を持つ人物が1人だけ存在していた。

それはゼロのルイズことルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール、彼女の失敗魔法であれば誰にも気付かれないよう木剣を爆破するくらいは容易いし、機会がある度にわざと聞こえるような大声で辛辣な言葉を吐き掛けられており犯行に及ぶ動機があるだけでなく、いきなり表れた使い魔の男が無理のある証言を行った理由は彼女が自分の犯行を誤魔化すよう指示したからだと考えられる。

ヴァリエールが失敗魔法を制御できるようになったと仮定すれば、曖昧な証言しか集まらなかった理由が迎撃しようと待ち構えていたら至近距離で木剣の爆発に巻き込まれ気絶したものと説明できるし、自宅謹慎から戻った彼女が何らかの理由で馬鹿げた決闘騒ぎに乗じて失敗魔法を発動させた結果、誰にも気付かれなかった事で変な自信を持ったと考えられなくもない。

この推理に問題があるとすればヴァリエールの性格であり、真面目かつ頑迷な彼女が闇討ちじみた行為に手を染めるとは思えないし、木剣を持っていたメイドに怪我がなかった理由を説明できない事もあって確信は持てないが、善良に見えていた人物が力を手に入れ傲慢不遜な性格に豹変するとかの事案はそんなに珍しくもなく、考えてみれば失敗魔法を使った際に煤けてはいても大きな怪我をしていなかった上、普段からあれだけ爆発させていながらも周囲に気を使って魔法の使用を止めようとはしなかった。

もしかするとヴァリエールは失敗魔法で爆破させる対象を元からある程度選べていたのかも知れないし、単純に自分を馬鹿にするような奴らは巻き込んでも良いくらいの考えだったか、そもそも周囲の被

害やメイドに危険が及ぶ可能性に気付かず杖を振っていただけの可能性もある。
伝聞だらけの不確かな情報を繋ぎ合わせた憶測ではあるが、使い魔の男が行った無理のある証言や何者かがエア・ハンマーで横槍を入れたみたいな苦しい推理よりは、ヴィリエ・ド・ロレーヌを気絶させた真犯人はヴァリエールであるとした方が諸々の疑問点を説明できると言うものだ。
三つ目の気になっている事柄はヴァリエールが召喚した使い魔の男、召喚された直後は黒焦げで意識がなく爆発に巻き込まれて死んだと思っていたが、全身のあちこちに火傷はあったものの翌日には青銅と決闘して勝利するくらい元気になっており、しかも自宅謹慎に随伴した日の昼食時に聴講生として迎え入れる事を決定したとオールド・オスマンが発表し、帰って来たら何故か立派な杖とマントを身に付けていたのだから訳が分からない。
見た限りではあるがそれなりに鍛えられた身体をしていたし、青銅との決闘では先制攻撃と挑発で冷静さを奪い立ち位置や相手との距離を上手く調整する事により、まともな連携もなく襲い掛かる6体のゴーレムを術者から引き離した後、取って返して迎撃する時間を与えず降参させている。
他の生徒は茶番と決め付けていたが、青銅の経験不足を差し引いてもあの使い魔がメイジ殺しとして通用するだけの実力者であるのは間違いなく、決闘を見ている途中からもし私が彼と戦う事になったとしたらどう対処するか考えていた。
体術そのものは場慣れした素人か訓練を初めたばかりの見習い騎士程度でしかなかったが、目の良さに加えてあれだけ走り回っても息を切らさないスタミナや失敗魔法の爆発に巻き込まれても重傷を負わなかったタフネスにも注意すべきであり、純粋な殴り合いだと競り負けるであろう上に私の魔法は威力不足気味なので削り切れるか怪しく、距離を詰められたら畳み掛けられて終わりと考えた方が良さそうである。
とは言え、手加減せずに戦うならエア・カッターの連発や距離を

取ってのウィンディ・アイシクルとかで有利に戦えるだろうし、それこそ方法を問わなければレビテーションで浮かせてから落とすを繰り返したり、拘束や操りを使って無力化させるなどで相手を傷付けずに無力化できると思うが、メイジをまるで恐れてなかったあの態度からするに何かしら奥の手を隠し持っているのかも知れない。

予測不能な戦闘能力も気になるが、もっと気になるのが立派な杖とマントを身に付けている事であり、いくら子煩悩で知られるヴァリエール公爵だろうとたかが使い魔をそこまで優遇する必要はないだろうし、オールド・オスマンに聴講生として受け入れるよう働き掛ける義理もないはずだ。

動いた理由として考えられそうなのは、病弱で知られるヴァリエール家の次女にマジックアイテムまたはポーションを献上して効果があったとか、彼の持つ技術や知識が有用であると認められ陪臣に取り立てられたなどが考えられる。

東方はエルフとの戦争に明け暮れる野蛮な地だと言われているが、エルフに対抗可能な兵器類の開発だけでなくあらゆる分野で技術や知識の研究が盛んに行われており、ゲルマニアで開発されたとされる銃器は交易路を通じて伝来した代物が原形になっているらしく、あの使い魔が学者や技術者の類であったのなら公爵家として囲い込まない選択肢はない。

それこそ学生や見習いだろうと東方の技術や知識を理論的に説明可能なら貴族待遇で迎える価値があるし、方便ではと疑っていた東方の賢人と言う触れ込みが事実だったのならオールド・オスマンが聴講生として迎え入れたのにも納得であり、高度な教育を受けられるのであればマジックアイテムやポーションの類を持っていてもおかしくなく、むしろ彼が何かしらの知識や技術を持ってないと考える方が不自然だ。

答え合わせを兼ねてあの使い魔の男と会話してみるのも悪くないが、彼の主人であるヴァリエールとは同学年でキュルケから色々と聞いてはいるもののまともに会話した事がなく、わざわざ休日の午後を潰してまで会いに行かなくてはならない程に重要な相手でもないし、

慌てなくても機会があった際に話し掛ければ良いので読書を再開する事にする。

＊

タバサ視点終了

＊

ギーシュ・ド・グラモンは軍人家系の四男坊として生まれた土メイジであり、ランクこそドットながらワルキューレと命名した青銅製のゴーレムを7体同時に操る技巧派として一目置かれているが、自己陶酔的で女好きなお調子者と残念に過ぎる性格からそこまで高い評価はされてなく、平民との決闘で敗北したにも関わらずそれを正面から責め立て馬鹿にする者はヴィリエと数名くらいだった。

何せ決闘と言っても最初に不意打ちで殴られて以降は喜劇じみた追い掛けっこをして最後の締めに降参した程度でしかなく、凄惨な私刑を期待していた悪趣味な者からは殺すと宣言したものの怖じ気付いたギーシュが茶番で誤魔化したと不評だったが、それ以外の者からは肩透かしを食らったけれど後味の悪い結果にならなくて良かったくらいに思われている。

ここ数日までは悪い意味で注目の的だったが、メイドに決闘を挑んで自滅した間抜けが現われたおかげでそちらに興味の対象が移ったらしく、何やかやで顔を合わせないまま謝りそびれたルイズの部屋を訪ねるも留守であり、どこかへ出掛けたかと厩舎に問い合わせるも馬を貸し出してないと言われ学院内を探す事にしたが、図書館や広場などを見て回り通りすがりの使用人に聞いても見つけられないまま日が暮れようとしていた。

折角の休日を無駄に消費した巡り合わせの悪さを嘆息し、これなら気まずくなってしまった恋人との関係修復を優先すべきだったと内心で後悔するギーシュだったが、ふと歩いていたアウストリの広場か

ら学院正門の方を見ればあれだけ探していたルイズが歩いており、これ幸いと駆け寄ろうとしたら横合いから現れたキュルケが何やら話し掛けたので足を緩める。
　いつもより不機嫌そうな様子のルイズと対面するキュルケの表情にはどこか余裕がなく、途切れ途切れに聞こえる会話も普段とは真逆の陰湿で最低限の配慮を投げ捨てたような発言がいくつもあり、このまま何も聞かなかった事にして引き返したくなった自分に活を入れたギーシュは、今にも杖を抜きそうな二人が決定的な言葉を吐く前に止めなければと遅らせていた足を速めた。
「待ち「「決闘よ！」」たまえ！」
　割り込もうとしていたギーシュの言葉にタイミング良く重なるキュルケとルイズの声、元より仲の良くない二人は顔を合わせるだけで嫌味と皮肉を言い合う関係だが、感情的になって罵り合う事はあっても決闘を申し込んだのはお互いに今回が初めてであり、どちらも相手から投げ掛けられた挑発の言葉が余程に気に食わなかったらしく、生半可な仲裁では杖を降ろすどころか耳も傾けてくれそうにない。
　そのままヴェストリの広場に行こうとしていた2人だが、いきなり足元から生えて来た土製の大きな手にそれぞれ左右の脚を掴まれ勢い良く顔面から転倒し、下手人であろうギーシュを今にも殺しそうな形相で睨み付ける。
「いきなり何するのよギーシュ、ヴァリエールの前に貴方を焼き焦がしても良いのよ？」
「ねぇミスタ・グラモン、粉微塵に爆破されるのと原形がなくなるまで殴られるのならどちらがお好みかしら？」
「……僕が言うのもどうかと思うが、決闘した者は厳罰に処すと先日オールド・オスマンが発表したばかりなのを忘れてないのかね？
　ルールのある腕試しであるならばともかく、感情のままに傷付け合うと言うのであれば僕はこのまま先生方に報告「「あぁん？」」……するのは流石に空気を読めてない行動だと思うのでしないが、それはそれとして止める為とは言えレディに不快な思いをさせた事は謝罪するよ」

灼熱の怒りを瞳に宿し艶然と微笑むキュルケとハイライトの消えた無表情で淡々と告げるルイズ、あまりの恐ろしさに思わず悲鳴を上げたくなるも何とか飲み下したギーシュは、不敵に見えるであろうと本人だけが思っている不格好な笑みを浮かべ震えそうになる声で仲裁しようとしたが、途中で挟まれたドスの利いた唸り声と悪鬼羅刹のような形相に心を折られてしまった。

顔色を青くして視線を逸らすギーシュを見たキュルケとルイズは、まるで自分達が脅しているかのような状況に気付いて落ち着きを取り戻し、それなら引き合いに出された通りルールのある腕試しで決着を付けようと言う流れになってそのまま3人でヴェストリの広場に向かう事にする。

なお、成り行きで審判役を申し付けられたギーシュは、魔法による的当てを笑顔で提案するキュルケとそれをあっさり了承するルイズを見て少し疑問に思ったが、使用人宿舎の軒先に掛けてあったロープで両足を縛られ自分が審判役と言う名目の的にされるのだと察し、地面に引き倒された恨みで塔の上から吊り下げるのはやり過ぎと抗議するも完全に無視されてしまった。

〔土くれのフーケ〕

明けて翌朝、初めての任務で使命感に燃えるルイズと使用人仲間から大まかな事情を聴いて心配するシエスタに軽い修行をさせたポップは、2人と別れマルトーに頼んであった人数分の弁当を受け取ると出発の時間にはかなり早いが待ち合わせの厩舎へと移動した。

厩舎には寝不足なのか顔色の良くないギーシュが先に来ており、特に会話もないまま気まずい時間が流れて案内役のロングビルと身だしなみを整えに戻っていたルイズが前後して現れ、最後にキュルケが合流したので準備を終えた馬車に乗り込み出発する。

ゆったりとした並足で走る馬車に乗っているのは、待ち合わせの時間ぎりぎりに現われたキュルケを責めるも度量のなさを指摘され怒るルイズ、やはり寝不足だったのかマントに身を包み居眠りするギーシュ、シエスタに渡しても受け取り拒否されない品はないかと荷台の隅で様々な道具を広げるポップにあれこれ質問するコルベール、その横でいつの間にかしれっと紛れ込んでいたタバサが本を読むふりをしながら聞き耳を立てており、案内役と御者を務めるロングビルは内心で自身の不運と迂闊さを嘆いていた。

(あぁクソッ、オスマンの爺いに脅されたとは言え土くれのフーケともあろう者がガキどもの引率ってかい!

しかも間抜けでお人好しなコッパゲだけならともかく、見た目と違って切れ者な東方人の小僧も付いて来てやがる。

どうせ今も使い魔のネズミとは別に遠見の鏡か何かでこっちを覗いてるんだろうし、こんな事なら打ち合わせてた通り衛兵と教師が駆け付けるまでゴーレムを暴れさせたら包囲される前に逃げ出すって爺いの筋書きに従っときゃ良かったよ。

まっ、教師も衛兵も臆病風に吹かれたのか誰一人として現れなかったし、いつも広場の端にある小屋で何かしてるはずのコッパゲが今日に限って留守だったり、おまけに本来なら強力な固定化が掛かってるはずの宝物庫の壁が壊れるとか、これでお宝を盗み出さなきゃ逆に怪しまれちまうからねぇ。

後は爺ぃの注文通り、お宝を回収したタイミングでゴーレムにヴァリエールの小娘を襲わせて小僧の実力を試すだけってかい。
ガキどもに抵抗されたら少し面倒臭くなりそうだけど怪我で済ませて命は取らないつもりだし、運悪くおっ死んだとしても逃げなかった本人と杜撰な計画を考えた爺ぃの自己責任なんだから後で何か面倒が起ころうと知ったこっちゃないさね)
何かあってもゴーレムで蹴散らせば良いと高を括るロングビルこと土くれのフーケ、彼女はモシャスのカードを使用したオスマンに誤魔化していた本来の実力が露呈し、冗談交じりに鎌を掛けられ過剰反応した事で正体を見破られ、官憲に突き出さない代わり協力するよう強いられている。
緩み切った教員や衛兵に活を入れる目的である程度暴れたらそのまま逃げ去る予定だったが、本来ならゴーレムが少しばかり殴った程度ではびくともしないはずの壁が壊れた事で予定が大きく狂っており、仕方なく侵入した宝物庫で追い掛けて来たオスマンと話し合いフーケとしてのアジトに宝物を置いてから誰かに回収させると決定し、元より盗み出す予定で受領書を書いていた重く(破)て用途(壊)不明な金属製の(の)筒(杖)を渡され、馬に乗って数時間の距離を往復して帰り着いたのは深夜遅くになっていた。
疲れていたので入浴は諦め夜食用に取り置きしていたパイで空腹を誤魔化し、ベッドに潜り込もうとしたら手紙を背負ったオスマンの使い魔がやって来たので仕方なく受け取り、書かれていた追加依頼の内容にこのまま宝物庫に駆け込み適当なマジックアテムを持ち逃げしてやろうかとも思ったが、相手は悪ふざけが好きな助平老人に見えて数百年を生きるとも言われる凄腕メイジであり、ルイズをゴーレムに襲わせるまでは指示に従いその後は成り行きに任せて身の振り方を決める事にする。
穏便に事件が解決したなら辞職して口止め料代わりの退職金を受け取れば良いし、死人が出たらそのまま破壊の杖を叩き売って治安が悪化しているらしい故郷へ逃げ帰るか、いっそ土くれの悪名が広まってないゲルマニアやガリアで盗賊家業を続けるのも悪くない。

寝不足と苛立ちから捨て鉢な思考をするフーケだが、仮に間違ってルイズに被害を加えようものなら子煩悩な両親が国外だろうと追い掛けて確実に報復するだろうし、例えそれがキュルケやギーシュだった場合でも追手が賞金稼ぎやグラモン家の私兵に代わるだけで絶望的な未来が待っているのは大差なく、本人に全く自覚がないまま人生最悪の貧乏くじを引かされていた。

馬車がアジト近くの森に到着する頃になってもキュルケとルイズの言い争いは続いており、仮眠したギーシュは顔色が良くなったものの暗い雰囲気に変わりはなく、ポップとコルベールの会話に混ざっていたタバサは女性視点のアドバイスを行う代わりにいくつかのアイテムを受け取っている。

苛立ちに外れ掛けたロングビルとしての仮面を被り直したフーケは、途中離脱する口実としてアジトがある森の奥には馬車が入らずここから先は徒歩になるので案内を終えたら自分は留守番に戻ると告げた。

こうしてルイズの初冒険は幕を開けたのだが、最大戦力であるポップは本当の危機に陥るまでアドバイスはしても助けるつもりはないし、次点の戦力であるコルベールも偵察優先で積極的に戦うつもりはなく、戦闘に参加できそうなのは反りの合わないキュルケと疎遠なタバサに居ないよりはマシ程度なギーシュのみであり、本来なら救済アイテムとして使用可能な破壊の杖もガンダールヴのルーンがなければただのガラクタでしかない。

〔ゼロから踏み出す第一歩〕

「では、出発しますぞ」
「ちょい待った、その前に全員で任務内容と行動指針を確認しとこうぜコルベールさん。
　それじゃあ、ギーシュ、ルイズ、キュルケ、タバサの順番でここへ来た目的と何をすべきかを思った通りに答えてくれるか？」
「学院に侵入した盗賊の追跡調査、できそうなら盗まれた宝物を奪い返す……じゃないのかね？」
「そんなの盗賊をぶちのめして奪われた宝物を奪還するよ！」
「正しくは盗賊から宝物を奪還し、可能だったらなら討伐する、よね？」
「偵察と可能であれば宝物の奪還、交戦や討伐は任務の内容に含まれない」
　さり気に案内役のロングビルと並んで歩き出そうとするコルベールだが、まともな打ち合わせをしていない事に不安を覚えたポップは任務内容を確認するような質問をし、予想通りルイズとキュルケが自分のやりたい事と目的を混同していると分かり嘆息した。
「ギーシュとタバサが正解、盗まれた宝が本当に価値ある代物ならオスマンの爺さんが宝物庫で被害を気にせず捕まえるなり、逃がした時点で信頼できる誰かに取り返して来るよう頼むか自分で追い掛けていただろうし、可能なら奪還しろってのは無理そうなら諦めるって意味だわな。
　だから今回の任務は、泥棒に入られて何もしないのは外聞が悪いから取り戻せれば良いな程度の駄目元で追手を募ったんじゃないかと思うし、宝物を取り返せず逃げ帰ったとしても生徒に責任を負わせるような真似はしないと思うぜ？」
「恐らくポップ君の言う通りだと思いますよ。
　市中の噂だと土くれは人死にを出してないらしいですし、宝物を盗まれたのは評判の良くない貴族や商人ばかりと聞いていますからね。
　少なくとも相手が熟練した高ランクの土メイジである事は間違い

なく、ミスタ・グラモンとミス・タバサが言った通り今回の任務は偵察または宝物の奪還が目的である以上、フーケと遭遇したとしても無理に戦って怪我や命の危険を冒す必要はないと思いますよ」
「それはちょっと違っていてよミス・ロングビル、フーケが打ち壊した建物の瓦礫に押し潰されたり立ち向かって蹴散らされた使用人や護衛が亡くなっているらしいし、被害者が何か後ろ暗い事をしていたんじゃないかって感じの噂が流れているだけで確たる根拠はないみたいなのよね。
この世に誰からも愛されるような貴族や商人がどれだけいる事か、土くれなんて庶民に義賊とか持て囃されていても所詮は他人の財産を横取りするような輩、本当に悪を憎む心を持っているなら宝物を盗んで終わりだなんて中途半端にも程があるし、これまでの被害者よりも酷い悪評の持ち主が何人も放置されている時点で警備が甘くて高く売れそうな宝を持っている人物が狙われただけなんじゃないかしら？」
ポップの言葉に表情を暗くするギーシュと無反応なタバサ、キュルケは呆れ交じりの納得顔で不満そうなルイズに何か言おうとしていたが、続くロングビルのフーケを持ち上げるような発言に眉を吊り上げ皮肉気な口調で反論する。
キュルケの母国であるゲルマニアは実力主義の風潮が強く、魔法以外の分野でも優秀さを示せば出自を問わず成功できる懐の深さがある反面、言動に中身が伴ってない小者や卑劣な手段を嫌っており、ただの押し込み強盗を義賊と崇める平民やそれを捕まえられないトリステイン貴族を不快に思っていたが、昨日の今日でギーシュと気まずくなった話題を蒸し返すのも空気が悪くなるのでそこらは追求せず内心に留めた。
「使用人や護衛が死んだって、怪我の治療とかはしなかったのかよ？」
「命に係わる重傷を治療できるのは水のスクウェアくらいだし、そもそもヒーリングは怪我の度合いに応じて高価な秘薬を消費するのだよ。
例え負傷者の近くに高ランクの水メイジがいたとして、更に運良く

大量の秘薬を用意できる状況にあったとしても平民の使用人や護衛に治療費が支払えるとは思えないし、雇い主にしたって屋敷や店舗を壊され宝物も盗まれた後となれば余分な出費を嫌がるだろうからね。

悪評に関しては、後始末に掛かった費用を取り戻す為の手っ取り早い手段として、貴族なら増税を商人も人員整理や給与の引き下げとかを行うのだと思うが、それでやはり土くれに狙われたのは悪党だったからに違いないとされているんじゃないかな？」

不思議そうに尋ねるポップに本人なりの推察を交え説明するギーシュ、一見して贅沢な暮らしをしているイメージのあるトリステイン貴族だが、外面を取り繕う為に多額の借金を抱え高価な調度品や家宝の類はあっても現金は裕福な平民の貯蓄よりも少ない事が多く、商人は金銭的な余裕がある場合でもフーケに宝物を奪われた時点で風評被害により信用を喪失し、どちらにしても受けた被害は最終的に弱者の懐から回収される。

薬草の効果に興奮していたコルベールを大袈裟だと思っていたポップだが、トリステイン王国で大怪我を負うと比喩抜きに貧富の差が生死を分けるのだと理解し、ヴァリエール家に薬草の材料となる植物の栽培を追加で依頼すべきかコルベールに相談しようと考えていた。

てっきり不満を言うかと思われたルイズは大人しく口を閉ざしていたが、内心ではポップから教わった回復呪文（ホイミ）を広めれば色々な問題が解決するけど教会から何を言われるか分からないし、最悪だと異端扱いされそうだから黙っているべきだけどそれは卑怯なんじゃないかと葛藤していたりする。

＊

「ちょいと話が逸れちまったが、ルイズとキュルケは泥棒を捕まえたいのかゴーレムと戦いたいのかどっちなんだ？」

「盗賊をボッコボコのギッタギタにするにはゴーレムも壊さないといけないんじゃないの？

罪には罰を与えるべきだし、このまま放置してヴァリエール領に来られでもしたら良い迷惑だわ」
「あたしはこのままフーケを野放しにするのが気に食わないだけで、野蛮なヴァリエールみたく好戦的じゃないからゴーレムと戦わずに済む手があるのなら誰かを囮にして逃げるみたいな方法でもない限り反対しないわよ」
出発前から躓いた感のある空気を無視して切り出すポップに対し、何言ってんだコイツみたいな表情で問い返すルイズとその発言にげんなりした表情を浮かべ当てこすりながら自身の意見を述べるキュルケ、呆れた表情のコルベールと無表情なタバサは口出しせずに黙って成り行きを見ており、どこかぼんやりとした表情のギーシュとロングビルは聞いてる様子がない。
「つーか、あれだけデカいゴーレムなら森の中に逃げ込めばまず追って来れないし、どうしてもゴーレムと戦いたいってんなら無茶をしない限り止めやしないが、爆裂呪文（イオラ）と同じ効果がある『爆弾岩の欠片』って名前のまんま投げる爆弾みたいなアイテムを使うのも手だぜ？
こいつは消耗品だが俺には必要ないし、ここへ来る前にいたダンジョンでそこそこの数を拾ってるから逃げる時の足止めに使うか、手段を選ばないならいっそ投げまくってゴーレムを壊しちまうのもありかもな」
「確か爆裂呪文（イオラ）って大岩を粉微塵に吹き飛ばせる危ない魔法だったわよね？
そんな物騒な代物を投げまくれとか、あんた頭おかしいんじゃないの！」
「「「「「……」」」」」
キュルケの疑問に冗談交じりの返答をするポップだが、隣で聞いていたルイズは真に受けたのか呆れ交じりに罵倒し、つい最近まで魔法を爆発させていた人物の自己紹介じみた発言に全員が無言でジト目になり、その場が痛いくらいの沈黙と何とも言い難い空気に包まれた。
「まぁ、俺は手伝わんがアドバイスと逃げる時間稼ぎくらいはするか

ら頑張りな。
　タバサとギーシュにゃ悪いが、泥棒と出くわしたら一戦交える覚悟をしといてくれ」
「僕だって土くれには思う所があるし異存はないよ」
「そう言えばタバサ、あなたの使い魔がいれば逃げるのも楽になるんじゃないかしら？」
「既に待機させてある」
「どうやら方針が決まったようですし、改めて出発と行きましょうかミス・ロングビル？」
「……それでは、フーケのアジトと思しき場所へ案内します」
　軽く流して仕切り直す面々、無視される形となったルイズは予想外の塩対応に不満そうな表情を浮かべポップに不満をぶつけようとしたが、待ってましたとばかりにキュルケが割り込んで口論となり、盗賊のアジトに向かおうとしている状況下で騒ぐ危険性をコルベールから諭され声量こそ落としたものの言い争いは止めてなく、溜息を吐いたタバサがウインド・ブレイクで吹っ飛ばし『次はエア・ストーム』と告げる事でやっと収まり、改めて案内役のロングビルを先頭に森の奥にあるアジトへと出発する。

＊

「あそこに見える小屋がフーケのアジトだと思われます。
　わたくしは馬車に戻り待機していますので、皆さんは無理のない範囲で任務を頑張って下さい」
「ミス・ロングビルもお気を付けて、森の途中で熊や狼などが出没しないとも限りませんからな。
　では諸君、まずはこれからどうするべきか相談したい思うのだが、何か考えや意見があれば遠慮なく申し出なさい」
「考えも何もあのボロ小屋をファイアー・ボールで焼けば中からフーケが飛び出すんじゃないかしら？」
「ツェルプストーにしては悪くない意見ね。

薄汚い盗賊が相手なら遠慮してやる義理はないし、小屋から飛び出して来たら真っ先にぶっ飛ばしてやるわ！」
「……奪還任務で初手から焼き討ちしようとか、下手をしなくても取り戻すべき宝物に被害が及ぶのではないかね？
フーケなら小屋を燃やされてもゴーレムで内側から叩き壊すだけだと思うし、それなら僕と何名かが正面から襲撃を仕掛け足止めしている隙に別動隊が宝物を奪還するって作戦はどうだい？」
「発想が物騒かつ短絡的、小屋の内部からは全く物音が聞こえないし、まずは誰かに様子を探らせてから対策を考えても遅くない」
森を抜けた先には丸く切り拓かれた広場があり、そこにぽつんと建つ朽ち果てた窯と壁板が外れた物置が併設したボロボロの小屋には人の住んでいる気配がなく、元来た細い小道へと引き返すロングビルを見送ったコルベールは茂みに身を隠したまま偵察方法の意見を募ったが、面倒そうなキュルケと不機嫌で戦意が高まっているルイズは焼き討ちを主張し、ギーシュとタバサが否定とそれぞれの対案を提示した。
「ふむ、皆の意見は焼き討ち2、奪還1、偵察1ですか、意見を出してないポップ君はどう思われますかな？」
「俺としては、小屋の持ち主が不明な時点で焼き討ちは止めとくべきだと思いますよ。
見た感じからして生活してる気配がない以上、ここは人目に付かないよう休憩する為の仮拠点か何かだと思うし、廃墟みたく見えるけど誰かの持ち家をフーケが勝手に使ってるだけかも知れないから燃やすのには反対だな。
まずはタバサが提案した通り、小屋の中に人がいるかどうか調べてから対応を考えれば良いんじゃないですかね？」
コルベールに意見を求められたポップは、焼き討ちの問題点を指摘してから無難なタバサの提案を支持し、それにキュルケとギーシュが賛成するように頷きルイズは少し不服そうにしていたものの反対意見を口にする程でもなく、まずは偵察役が小屋の様子を調べる事にする。

誰が偵察に行くかで少し揉めそうになったが、公平を期して監督役のコルベールが作成したクジを3人で引く事になり、当たりを引いたルイズが渋々ながらも了承し、不満げな表情で足を踏み出そうとした所をポップが呼び止め懐から取り出した何かを差し出す。
「こいつは守りのルビーって名前のお守りみたいな代物なんだが、妹弟子のシエスタにデルフの奴をプレゼントして姉弟子のルイズには何もやらないってのもどうかと思ってたし、本当は後で渡すつもりだったがお前さんの性分からするとフーケのゴーレムに突撃しそうだから今ここで装備しとけよ」
「……ちょっと無礼な発言だったけどプレゼントに免じてとやかく言わないであげるわ。
金の台座が少し派手だけど嫌味にならない落ち着いたデザインは中央に埋め込まれた大粒のルビーが映えるって言うか、こんな高価そうな代物を気軽に渡せるとかあんたって何気に物凄い大金持ちだわよねぇ」
「あら、ヴァリエールには勿体ないくらい素敵な外套の留め具（マントピン）じゃないのよ。
ねぇポップ、お子様なヴァリエールよりも宝石が似合うあたしには何かプレゼントしてくださらないのかしら？」
「ふむ、そのルビーは見た限り錬金で作られた模造品とかじゃなさそうだが、粒の大きさと透明度から察するに飛び込みでも軽く数百エキュー、高名な土メイジによるきちんとした鑑定書を添えれば千エキュー前後で売れるのではないかね」
「ヴァリエールには気前良く宝石の装飾品を渡し、自分で望んだとは言え私にはポーションが数本、主従と他人ではあるがこの差はどうかと思われる」
気取った口調と満更でもない表情で守りのルビーを受け取ったルイズは、指で摘まんだまま上下左右に動かしながら装飾部分と宝石のデザインを褒めていたが、実家で荷物検査したりオークションに預けた際に見た無数の宝石や装飾品を思い出し、そう言えばこいつ凄い金持ちだったなとジト目でポップを見やり、どうにも決め兼ねていた給

与と待遇の問題を実家に相談(丸投げ)しようと決意した。
　そんなやり取りを興味深げに見ていたキュルケが冗談交じりにおねだりし、土メイジとしての鑑定眼を発揮したギーシュが大まかな取り引き価格を見積り、先程したアドバイスのお礼に聖水と魔法の聖水を受け取っていたタバサがここぞとばかりに便乗する。
　横合いで見ていたコルベールは苦言を呈しようとしたが、元より拾い物ばかりで金銭的にそこまで執着のないポップは苦笑いしながら片手で制す。
「そんならキュルケには帰りにでも手持ちの宝石から好きなのをやるし、タバサも興味ありそうに見ていた装備品なり宝石から適当に持って行けよ。
　何ならお前さんも巻き毛で金髪の彼女に渡すプレゼント用として宝石か装飾品の類はいるかい？」
「いや結構、君と僕はそこまでしてもらうような関係じゃないし、付き合っている女性へのプレゼントくらい自分で確保しなくては男が廃ると言うものだ」
「ヴァリエールってば随分と気前の良い使い魔を呼び出したものね。
　ここまで甲斐性があるのなら空を飛べたり炎を吐けなくても許せるし、魔法は使えなくても前衛として敵の足止めくらいは任せられるでしょうからあたしのフレイムやタバサのシルフィードには負けるにしても当たりの部類と言えるのでなくて？」
「ハハッ、見る目のないツェルプストーの節穴眼でも分かるくらい当たりって言うか、こいつは歴代最高の大当たりってのが正解よ」
「召喚される使い魔は当たりなのが前提、外れを引いたと思うのはメイジとして自身の実力を過大評価しているせい。
　そして使い魔が風竜だから人間に勝るとするのは早計であり、現に彼は様々な宝物やマジックアイテムを所持しているだけでなく、ヴァリエールが魔法を使えるようになった原因またはその切っ掛けに関与したと思われる」
「慧眼ですぞミス・タバサ、私が東方の賢人と評した彼の知識は魔法理論にも及んでいるのです！

分子と呼ばれる小さな粒こそが物質を構成する……」
「……それじゃあ行って来るわね」
「気を付けて行って来いよ」
「タバサってばミスタの演説に興味があるの？」
「事実であれば大変興味深い」
大盤振る舞いのついで気味に問われ淡々と断るギーシュの表情は硬く、満面の笑みを浮かべて軽口を叩くキュルケとは対照的であり、何故かやさぐれた半眼で反論するルイズに突っ込んだタバサがポップの正体に触れようとするも興奮したコルベールの演説に流れをぶった切られてしまった。
上擦った声で魔法理論の内容を早口で喋り続けるコルベールに気勢を殺がれた様子のルイズが歩き出し、お義理程度に見送りの声掛けを行うポップの横で聞く態勢に入ったタバサにキュルケが興味本位の質問を投げ掛けており、暗い表情で俯いたギーシュが無言のまま拳を握り絞める。

＊

「残念ながら誰もいなかったわよ！」
「……ここらで偵察ってのは、ドアを蹴破ってそのまま踏み込む事を言うのか？」
「ヴァリエールみたいな野蛮人はさて置き、偵察と言ったら普通は相手に見つからないよう忍び寄り見聞きした情報を持ち帰る事だと思うわよ」
「どう見ても押し込み強盗か殴り込みの類だと思われる」
「確かにと言いたい所だが、辛うじて威力偵察と呼べるかも知れないね」
「ミスタ・グラモンに同意ですが、今回は様子見を目的としているので不適合ですな」
小屋の正面まで歩み寄ったルイズはおもむろにケンカキックを繰り出し、倒れた扉が舞い上げる埃に咳き込みながらも油断なく飛び込

んだ後、崩れた暖炉の中や積み上げられた薪とテーブルの下などを見渡して人間が隠れていそうな場所はないと判断したのか、半切れ気味の大声で叫んだ。
段取りと違い過ぎる蛮行に思わず偵察の定義を確認するポップに対し、嘆息してから首を横に振って答えるキュルケはやや引き気味であり、相変わらずの無表情だが声に呆れを滲ませるタバサと疲れた声で茶々を入れるギーシュに同意しつつも訂正するコルベールらが、不機嫌そうに小屋から出て来たルイズに冷ややかな視線を向ける。
コルベールとポップが正座させたルイズに説教している間に小屋の調査を行ったキュルケらは、唯一の収穫と言える古びた木箱をタバサの魔法で罠がないか調べてからギーシュのワルキューレで外に運び出し、蓋を開けようとしたタイミングで地面が微かに震え始めた。
「この振動はゴーレムが出現する前兆のようだね。
諸君、フーケが近くに潜伏しているようだ、注意したまえ！」
「言われるまでもないわよ！」
「待てルイズ、いきなり突撃しようとするんじゃねぇ！」
ギーシュの警告する声にこれ幸いと立ち上がったルイズが止めようとするポップを無視して駆け出し、背中合わせになったキュルケとタバサの横を駆け抜け伸び上がった地面に飛び蹴りをかましたが、体積を増やしながら成形中の土塊に埋まり込みそうになり慌てて離脱する。
小山のような土塊が見る間に人型となり、コルベールの制止を振り切りルーンを唱えたキュルケのフレイム・ボールが炸裂した個所とその周辺を焼き焦がしたが、荷役に使っていたワルキューレを突撃させたもののあっさり踏み潰されたギーシュは右往左往し、棒立ちになっているタバサは待機させていた使い魔を呼び寄せ共有している視界からフーケを探す算段らしく、ゴーレムの周辺を跳ね回り繰り出すパンチやキックで命中個所を破壊しているルイズが本人の意図はさて置き囮と足止め役を兼ねていた。
「こりゃ駄目だな」
「何ですと！」

「皆がバラバラに行動して連携も何もあったもんじゃないし、飛ばし過ぎてるルイズとキュルケはそろそろ息切れするんじゃないすかね。
おっと、いくら生徒が心配だからって余計な手出しは無用だぜコルベールさん、俺だって飛び出したいのをぐっと我慢してんだからな？」
生徒の奮闘に思わず応援の声を上げていたコルベールだが、ルイズとキュルケの攻撃はゴーレムに有効打を与えてはいるもののそれだけであり、ポップが指摘したように連携もなく漫然と行われる攻撃では再生速度を上回るダメージを与えられそうになく、慌てて参戦しようとするも強い視線と言葉で留められ大人しく見守る事にする。
差し伸ばされたゴーレムの腕を登ろうとして振り払われたルイズは、咄嗟に受け身を取ろうとしたものの着地がうまく行かず数メイルばかり線を描いた後、そのまま離れた場所にいたポップとコルベールの正面まで転がって来た。
「見た感じ怪我はなさそうなものの顔色が悪いし、そろそろ生命力が尽きそうなんじゃねぇのか？
つーかルイズ、お前さんはメイジなんだから余技で教えた闘気じゃなくて練習した魔法をメインに使って戦えよ」
「あんたは使い魔なんだからもっと真剣にご主人様の事を心配しなさいよ！
確かに具合がちょっと悪くなってるし、どうせなら系統魔法を使いたいんだけど、あれだけ大きなゴーレムに通用しそうな魔法なんて使えないわ」
「まっ、お前さんが使える魔法で通用しそうなのは爆発くらいのもんだわな。
ゴーレムを足止めしてる間に他の連中と協力して爆発を使えば、再生が間に合わないくらいのダメージを与えられるかも知れんぜ？」
呆れと疑問交じりの言葉を掛けるポップに、ほとんど心配されなくて拗ねたような悔しさ交じりの声で噛み付くルイズだが、色々な意味で受け入れられない打開策を提示され思わず逆上する。
「そんなの嫌よ！

やっと魔法を爆発させず使えるようになったのにわざと失敗しろですって？
しかもツェルプストーと協力するなんて冗談じゃないわ！」
「威力だけなら爆発がぶっちぎりだし、普通に魔法を使えるようになってからは狙いが定まるようになったんだろ？
作戦としてはフーケのゴーレムをギーシュが足止めしてる間にルイズが爆発を、キュルケとタバサはそれぞれ最大威力の魔法を唱えて胴体の真ん中くらいに撃ち込むって感じだ。
つーか、意図した場所に爆発を起こせる時点で失敗じゃねぇし、いくら強かろうと面子に拘って仲間の足を引っ張る奴はゼロ以下のマイナスだぜ」
「ちょっ、ちょっと待ちたまえ、僕のワルキューレが何体あってもアレを押さえ込むなんて無理だよ！」
「1体だけでいいからアレと勝負になるくらいデカいのを作れ、質量が足りない分は中を空洞にして土を詰めときゃ良いし、呪文を唱え終わるまで足止めできりゃ後は壊されても問題ないんだからそこまで難しい注文じゃねぇだろ？」
少し離れた場所で聞くともなしに会話を聞いていたら急に引き合いに出され、ギョッとしたような表情で訂正に駆け寄ったギーシュの肩に手を置いたポップは、瞳を覗き込むようにして視線を合わせ力強い声で断言した。
「……1体だけで良ければやってやれなくもないが、僕の実力では等身大のワルキューレと同じように動かすとか無理だし、土の重量で動きが遅くなるだけじゃなく、破損箇所を修復するなんて高等技術も無理だからあまり多くは期待しないでくれたまえよ？」
「相手はあれだけ大きなゴーレムを作って動かしてる上に再生までしてるし、いくらフーケが凄腕のメイジでもかなり無理してるはずだ。
お前さんの役目は時間稼ぎなんだから負けても問題ないってか、勝つと期待されてないんだから気負わず好きなようにやってみな。
それとこれはルイズにも言っとくが、意地を張って残ると自分だけじゃなくて仲間が巻き込まれるんだから逃げろと言われたら素直に

逃げろよ？」
「おいおい、僕だってそこまで無謀じゃないさ。
グラモン家には命を惜しむな名を惜しめって言葉はあるが、個人的な感情で仲間や部下の命を危険に晒すのは名誉ある行動じゃないよ」
肩に置かれた手から力強い意志のようなものを感じ取ったギーシュは、念押しするようなポップの言葉に吹っ切れた明るい口調で返答してから気取った仕種で迫り来るゴーレムに向き直り、造花の杖を構えると落ち着いた力強い声音でルーンを唱え始める。
「キュルケとタバサは自分の使える最強の魔法を、ルイズは爆発を同じタイミングで使うんだ。
三人でゴーレムの胴体を狙えば、そのまま砕けるか少なくとも大ダメージを与えられるはずだからな。
やらせといて言うのも何だが、これはやらなくても良い事なんだからゴーレムを倒せそうにないと判断したらそのまま撤退するぞ！」
「あたしたちは討伐隊じゃないから勝てそうになければ逃げるのは当然の判断ね」
「試す価値はある」
「むう、私も普通に魔法を撃ちたい。
だけどドットじゃ強力な魔法は使えないし、失敗じゃなくて成功と考えるなら爆発を使わない手はないわね。
今回はポップの言葉に騙されてあげるけど帰ったら特訓に付き合ってもらうわよ！」
やる気に満ちたギーシュを見て笑みを浮かべたポップは、吹き飛ばされたルイズの下へと駆け寄っていたキュルケとタバサに向き直り、畳み掛けるような口調で指示を与えるが、内心では極大爆裂呪文（イオナズン）や極大消滅呪文（メドローア）でゴーレムを消し飛ばしたい衝動に耐えていた。
どう考えても空気の読めてない行動だし、自分は部外者だからアドバイスや軽い手助けをするくらいまでと決めてはいるが、それでも見ているだけなのはとても歯痒く、更に戦い方が稚拙で杜撰となると思わずそこを代われと叫びたくなり、自分を見守っていたアバンの気持ちを想像したのと隣で心配そうな表情を浮かべるコルベールの姿に

何とか思い留まる。
幸いにしてキュルケとタバサはポップの指示にあっさり賛成し、ルイズも少し不満を言っただけで特に反対する様子はなく、それぞれに杖を構えルーンの詠唱を開始したので、何かあれば割り込めるよう戦闘の邪魔にならず全体が見渡せる位置まで移動した。
前後して完成した巨大ワルキューレは、普段とは比べるべくもなく稚拙な辛うじて人型と言える程度の代物だったが、造形に拘る彼がそこまでしてもフーケのゴーレムと比べると半分くらいの大きさしかなく、操作の方もぎこちない動作でタックルと言うより倒れ込みながら抱き付こうとするのがやっとの体たらくであり、精神力を限界ギリギリまで注ぎ込んだ状態で今にも倒れそうな表情を隠す余裕もないギーシュの姿に、これ以上の時間稼ぎは無理だと判断したポップがルイズらに警告の声を上げようとした直後に事態は急変する。
「ぼっ、僕にだって意地くらいはあるんだぁぁぁ！」
「何と素晴らしい、私はミスタ・グラモンを信じておりましたぞ！」
「ここで持ち直すとか、意外と根性あるじゃねぇか」
追い詰められていたギーシュが雄叫びを上げた途端、近付こうとしても相手にされず振り払われるだけだった巨大ワルキューレが、それまでとは比べ物にならない激しさでフーケのゴーレムに掴み掛かり、鉄に変化した拳で殴られた各所を変形させながらも辛うじて足元に縋り付き歩みを止めさせた。
ギーシュの善戦に思わず快哉を叫ぶコルベールと感心した様子のポップ、少し遅れてルーンを唱え終えたルイズらの魔法がゴーレムに炸裂し、炎と氷雪に包まれた胴体の中央部が爆ぜて大穴が開いた状態となり、巨大ワルキューレに寄り掛かるような姿勢で動きを止める。
そのまま崩れ落ちるかに見えたフーケのゴーレムだが、まだ続けるつもりなのかぽっかり空いた大穴を急速に再生させており、逆に精神力が尽きたのかギーシュは糸が切れた人形のように倒れ付し、巨大ワルキューレも全身を包む青銅の外装ごと中の土が崩れ落ち始めていた。
「惜しかったけど今一歩及ばずか、俺じゃなくて先生だったらもっと

良いアドバイスをして危なげなく勝てたかもと思っちまうな。
　ここまで頑張ったのに俺が手出しするのはちと無粋な気もするが、今のルイズとついででギーシュにゃ成し遂げた自信が必要なんで、どんなつもりなのか知らんけど勝ち目の薄い延長戦は遠慮してやってくれよ」
　苦笑いしたポップが懐から取り出したブラックロッドを細長く伸ばし、突き刺した先端から発動させた爆裂呪文（イオ）が止めとなってゴーレムは崩れ落ちたが、立ち上る土煙のせいもあって傍目には折り重なって崩れ落ちているようにしか見えない。
　泣き笑いの表情を浮かべ座り込むルイズの下に駆け寄るポップとコルベール、大喜びして抱き付くキュルケの胸に顔を埋もれさせながら満更でもなさそうな様子のタバサ、　全力を出し切り気絶したギーシュを放置してそれぞれの健闘を褒め合うお祝いムードになっていたが、心配になって戻って来たロングビルからフーケの行方を問われ我に返る。
「後はフーケを見つけてぶちのめすだけね！」
「この人数で森の中に隠れているフーケを見付けるとかまず無理だし、あたしは精神力の使い過ぎで疲れたから捜索には参加しないわよ」
「見通しの悪い森で奇襲される可能性を考えると追跡は無謀、それに任務は偵察または破壊の杖を取り戻す事であってフーケの討伐ではない」
「ミス・タバサの言う通り、オールド・オスマンから依頼された内容は偵察または破壊の杖の奪還であって、フーケの捕縛や討伐は諸君らが請け負った任務の範疇ではありませんぞ！」
「追跡の前に奪われた宝物を探すのが先だとわたくしは思いますよ」
「それなら確か、怪しい木箱があるって小屋から運び出したんじゃなかったか？」
　戦意も高らかに追跡を主張するのはルイズだけであり、精神力を使い過ぎ色々と面倒になって来ているキュルケはやる気がなく、森での待ち伏せを警戒するタバサは任務外である事を理由に反対し、それに

同調したコルベールが任務内容はフーケの討伐ではないと強調する横から先に破壊の杖を探すべきだとロングビルが訂正を入れ、ゴーレムと戦う前に小屋の中から怪しい木箱を運び出していたとポップが指摘した。

一足飛びで木箱に駆け寄り蓋を開くルイズ、中には緑色で無骨な装飾とベルトが取り付けられた金属製の大きな筒が1本だけしか入ってなく、どう見ても杖と呼べるような代物ではなかったもののロングビルが奪われた破壊の杖であると明言し、現物を見た事があるコルベールも間違いないと念押しした為に任務達成となり、フーケの追跡に関しては多数決の結果1対5で中止が決定される。

同意を得られなかったルイズは不満そうな様子だったが、広大な森の中にいるかどうかも不明な容姿すら判らない人物を探すのは困難を極めるとロングビルが諭し、更にポップから闘気の使い過ぎで生命力が減っているから激しい運動をしないよう注意された事もあって大人しく引き下がり、気絶しているギーシュの運搬は精神力を消費してないコルベールが行うと名乗り出た。

「皆も頑張ったが、1番は気絶するまで精神力を使ってゴーレムを止めたこいつだと思うぜ。

かなり無茶したから帰るまで起きないかも知れねぇが、圧倒的な格上相手にあそこまで食い下がれるとか大したもんだ」

「左様ですぞポップ君、同じ土メイジながらミスタ・グラモンはドットでフーケは恐らくトライアングル、本来であれば勝負にならないはずがあそこまで善戦するとは、生徒が成長する瞬間に立ち会えるとは何とも感慨深いものがありますな」

「確かに誉めてやっても良い活躍をしたと言えるわね」

「あなたが言えた立場じゃないわよヴァリエール、活躍したのは認めてあげるけどゴーレムの周りを跳ね回られて凄く邪魔だったし、魔法を失敗せず使えるようになったからって少し勘違いしてるんじゃないのかしら？」

皆がレビテーションで浮かんだギーシュを称賛してるのを横目にタバサは、ゴーレムの残骸に歩み寄りディテクトマジックを使い調べ

ていたが、原形を留めてない土の塊からは何の情報も得られなかったらしく、無表情ながら残念そうに嘆息してから振り向くとキュルケとルイズが懲りずに言い争いを再開しており、視線と仕草でポップとコルベールに警告を行い宣言した通りエア・ストームをお見舞いすべくルーンを詠唱する。

タバサの八つ当たりが込められた巨大な竜巻は、言い争いに夢中で気付けなかったキュルケとルイズを大空高く打ち上げた。

〔これにて一段落〕

「キュルケ向けに手持ちの宝石や装飾品から良さそうなのを並べといたが、タバサは装備品とかに興味があるみたいだから先にそっちを見るかい？」
「……ねぇポップ、ここに並んでいる品々ってヴィンドボナの一等地にある店でも揃えられるか怪しいくらいのハイグレードばかりなんだけれど、貴方って召喚される前はどこかの王室御用達みたいな大商人の関係者だったりしないわよね？」
「一番良いのを希望する」
「俺はしけた田舎にある武器屋の息子だし、王族の知り合いは何人かいるけど部下になった覚えはないってか、取り引きとかは前に持ち物を換金しようとしたら呼び出し食らって市場が荒れるから国で買い上げるって言われた事が一度あったくらいだな。
一番良いのって言われても何を見せれば良いか分からんのだが、とりあえずその身体に合ってなさそうな長い杖の代わりにこんなのはどうだい？」
破壊の杖を奪還した帰りの馬車は、空高く打ち上げられトラウマが再発したルイズにこっそり睡眠呪文（ラリホー）を掛けて気絶したままのギーシュと同じくマントに包んで隅の方へ寝かし、ポップが念の為に持ち込んでいたリュックサックから取り出し並べた品々を見て恐々と質問するキュルケ、シエスタへのプレゼントには不向きとしていた装備品を見せるよう強請るタバサ、自分は辞退すると言い出したがそれだと他の面々が受け取り辛い空気になると指摘され撤回するコルベール、手綱を握ったまま会話に参加してないロングビルも内心では自分に声を掛けられるのを期待していた。
直感で決めた内側から淡い光を放つ透き通った（命の）青い宝石（石）を手にご機嫌なキュルケ、どれもこれも魅力的に思えて長々と考え込んだタバサはいくつかお勧めされた中から表地と裏地にそれぞれルーン模様と動物柄が織り込まれたスカーフ（疾風のバンダナ）を選んでおり、コルベールは取り出

したものの必要ないと即答され詳しく説明しなかった先端部分に赤い宝玉を埋め込んだ杖にしたが、キーワードを言うだけでルーンの詠唱や精神力の消費もなしにファイアー・ボールと大差ない火の玉をいくらでも撃てるマジック(魔道士の杖)アイテムと言われ硬直する。

そして御者の交代を申し出たコルベールと入れ替わりで荷台に移動したロングビルは、遠慮している風な小芝居に国元へ仕送りしていると本当の情報を交えた言い訳をしていたが、予想以上に感激した様子のポップから銀行にある預金や貴金属類を残らず全て渡されそうになったので慌てて固辞し、何とか断ろうとしたものの小粒の宝石や異国の金貨が乱雑に詰め込まれた布袋を1個は1個だからと無理やりに押し付けられた。

ポップから渡された宝物を売り飛ばしてゲルマニアに行けば、貴族の身分と土地を買っても余りそうな大金を得られるかも知れないが、故郷の森で隠れ住む妹分は人前に出たら命を奪われてしまう立場だし、面倒を見ている子供の生活費もこれまでに稼いだ貯蓄があれば変な贅沢をしない限り問題なく、元より実家から逃亡する際に持ち運べる範囲ながら多少ばかりの財貨を持ち出してる。

そもそも食料類は隠れ家があるウエストウッドの森に生えている果実や木の実と畑からの収穫物で賄えるし、塩と嗜好品や衣服などの購入費も数年に相当する金額を持っていたが、追手の気配を感じないまま生活環境を整えこんな暮らしも悪くないかと思い始めた頃にふと欲が出た。

顔(フェイス)を変える風と水のスクウェア(チェンジ)スペルと同じ効果があるマジックアイテムを手に入れれば、人の世では暮らせない妹分を幽閉じみた隠遁生活から解放できるのではないか、そんな世間知らずの浅い考えで意気揚々と旅立ったものの数か月と持たず持ち出した路銀を使い果たし、日々の生活すら危うくなって身体を売るよりはと盗みに手を染めてから捕まる事なく現在に至る。

平和ボケしたトリステイン王国の貴族は警戒心が緩く、酒場などで何度か隣の席に座って酌をしたりおべっかを使い手や背中を触られても咎めなければ何の疑いもなく雇い入れようとするし、その手の誘

いを行う輩は溜め込んでいる財宝の一部を盗み出しても心が痛まない輩ばかりな上に当時はメイジの盗賊が少なかった事もあり、順調に成功を重ね土くれのフーケを騙る食い詰めメイジの模倣犯が現われるまでになっていた。

偽フーケは貴族を専門とする本家と違って裕福な平民もターゲットにするし、恨まれ過ぎないよう全部は奪わないとか可能な限り犠牲者を減らすみたいな配慮もなく、下手をすれば内輪の人間による自作自演やゴーレムが暴れた際の犠牲者を装った殺人事件も起きていたりするが、怠惰な衛視は領収のサインが残されているからフーケの仕業と言った感じの杜撰な捜査しか行わない。

そうやって後ろ暗い思いを積み重ねて貯蓄していたのに、軽くお涙頂戴の誇張話をしただけで気安く金銀財宝を差し出されてしまえば、これまでの数年間が無駄な遠回りだったように感じ、思わず押し付けられた布袋を投げ捨てたい衝動に駆られる。

とは言え、馴染みの故買屋に持ち込めば少なくとも数万エキュー以上で売れる量だし、およそ数千エキューもあれば使い捨てではない変装用のマジックアイテムを予備も含めて作らせるくらいは容易く、何となればトリステイン王国で断絶した貴族の領地と爵位を買い上げる事すら可能だ。

帝政ゲルマニアで貴族になるよりも亜人に滅ぼされた貴族領の名跡を買い叩いた方が安上がりであり、アルビオンで不自由な生活を送る妹分や子供らと移り住むのも悪くないかもと真剣に検討するロングビル、ブリミル教会の存在は心配だが復興したばかりの領地に赴任して来る物好きな神官はまずいないし、トリステイン王国に落ち延びていたサウスゴータ家の旧臣や盗賊家業を通じて知り合った連中に声を掛ければ人手不足も解決できる。

これまでに犯した罪とフーケの名前は模倣犯の誰かが背負ってくれるだろうし、亜人の問題は腕利きのメイジを何人か雇って大規模な討伐を行えば良く、荒らされた水路や農地の修復が少し面倒なだけで復興作業そのものは数年もあれば完了すると思われる上、屈指の大貴族であるヴァリエール公爵家の三女とグラモン伯爵家の四男にコネ

が出来たのも運が向いて来た証拠かも知れない。

＊

布袋を握り締め何やら考え込み始めたロングビルを放置し、敷布の上に並べたままだった宝石や装飾品で無表情ながら抵抗しないタバサを飾り付けるキュルケ、高価な品は受け取らないだろうがギーシュにだけ何も渡さないのもどうかと思いコルベールに意見を求めるポップ、いくつか候補を考えてから小袋に入ったナッツ類（種と木の実）の詰め合わせを渡す事にしたが、食べ物くらいなら受け取るだろうみたいな流れで決まったので効果を説明しないままとなり、後にモンモランシーと差し向かいでワインを酌み交わす為の誘い文句に使用された。

そんなこんなで学院に帰り着く頃にはギーシュとルイズも目覚めており、馬車の返却手続きを行わなくてはならないロングビルと別れ学院長室に移動した一行は、監督役のコルベールが詳しくは後でレポートを提出すると前置きしてから破壊の杖は取り戻せたものの、フーケは取り逃したと簡略に報告し、危険な任務を成し遂げた生徒らにはオスマン直筆の感状功績を称えて送られる証書、活躍した経緯や内容と賞賛の言葉が綴られる。と私費で謝礼金を出すと決まったが、平民かつ立場上はルイズの使用人であるポップに対する褒美を出すのは色々と面倒が起こるだけでなく、本人も辞退したので口頭による感謝の言葉を述べただけで終わりとなる。

少し変形となるが貴族社会的に部下の活躍は主人の手柄として評価される為、今回のケースではオスマンから報奨を受け取ったルイズが改めてポップに対する論功行賞を行うのが道理であり、例え主従関係だろうと他家の家臣に頭越しで感状や褒美を出すのは筋違いの行為でしかなく、貴族社会のルールやマナーを教える学院の長がそこらを無視する訳にも行かなかった。

フリッグの舞踏会を楽しむようルイズらに告げ退出を促したオスマンは、使い魔を通して得られた情報の裏付けを行うべく残ったコルベールにあれこれ質問し、嬉々として提出された魔道士の杖の効果を

確認して思わず卒倒しそうになる。
どう考えても普通ではないポップを聴講生として遇するとした自身の英断に安堵した直後、使い魔から受け取った宝石を詳しく鑑定して狂ったように爆笑するロングビルの映像が送られて来て思わず吹き出しそうになり、怪訝な表情を浮かべ調子でも悪いのかと問うコルベールの気楽さに内心で腹を立てながら退出させた後、諸々の面倒と責任を丸投げできる相手がいる事に感謝してヴァリエール家に報告と相談の手紙を書いた。
後に送られたルイズとオスマンからの手紙を読んだヴァリエール夫妻は、ポップを猶子本作での解釈は家督相続権のない養子、家族に準じる扱いで身分保障の最上級と言える。に迎え入れようとするが、準備段階で使用人から報告を受けたカトレアから身分や財産を与えられる事を面倒に考える人物のようだと言われて考え直し、使い魔品評会の前日に参観も兼ねて訪問するとの返答を行う事にする。
なお、学院訪問に同行するか確認されたエレオノールは、預かったパデキアの種の栽培に協力を申し出た婚約者原作でバーガンディ伯爵が婚約破棄した時期は不明、本作では園芸などに詳しい土メイジで珍しい植物の栽培に行き詰っているとカトレアから相談の手紙を送られたものとする。と仲が深まって色々と忙しいらしく、ルイズに命じて提出させた魔法理論のレポートを仲の良い同僚に丸投げするくらい研究と交際にのめり込んでおり不参加、ヴァリエール夫妻が訪問すると知った教員らはこれまで黙認されていた虐め問題に関する詰問と勘違いして大騒ぎになるのだが、そんな未来を予想できるはずもなく手紙を書き上げたオスマンはこれで問題解決とばかりに処理済みの書類箱へと投げ入れた。

＊

「そう言えばポップ君、正式な舞踏会などに参加した経験はありますかな？」
「うーん、祝勝会とか記念パーティーみたいなのだったら何度か、そん

時に少し踊ったくらいで本格的なダンスパーティーは経験ないっすね。
　とりあえず一般教養として礼儀作法とか社交ダンスも恥をかかない程度には教わってるし、細かな部分はこっちのルールと少し違ってるかも知れねぇけど学校生活やルイズの実家で見た限りマナーとかはそんなに大きく違っちゃいないと思いますよ」
「ふむ、確かに君の立ち振る舞いや言葉使いは見た限り生徒に劣るものではなかったですし、ミス・ヴァリエールのご両親に対する挨拶や会話も客分として招かれている以上は砕けた態度を責めた筋合いでなく、食事のマナーなども含めて各所に多少の差異が見られる程度でしたね。
　先程も話題にあったフリッグの舞踏会は、新入生の顔見せを兼ねて行われる教師や生徒らが親交を深める為の堅苦しくないパーティーですし、ポップ君の立場はオールド・オスマンの決定で聴講生となっていますから気兼ねなく参加して下さい」
「俺としては知り合いの少ないパーティーに出るとか遠慮したいんすが、ルイズからは風呂で身体を洗ったらまともな服に着替えるよう念押しされてますし、マルトーさんにも良い材料が手に入ったから今夜の料理は期待しとけって言われたんで参加はするつもりです」
　汚れたからと風呂場に向かうルイズらを見送り、自身も手早く入浴を済ませたポップは忙しそうに働くシエスタやマルトーの邪魔にならないようコルベールの研究小屋を訪れていたが、そこで舞踏会の参加経験はあるか問われ過去に何度か参加したパーティーの記憶を思い起こし、無難な答えを返しながら身内の宴会を除けばお義理で顔見せしたら帰る程度だったなと嘆息する。
　まともに参加したパーティーはロモスで行われた祝勝会くらいのものだし、大魔王討伐後は世界中を駆け巡り復興の手伝いや行方不明になった相棒の捜索に忙しく、義理や付き合いで式典の類に何度か顔見せした事はあってもずっと上の空か途中退場しており、これを経験に含めるべきか少し迷ったものの軽く流してそろそろ準備するからと会話を切り上げた。

＊

フリッグの舞踏会が行われている本塔上階の大きなホールを訪れたポップは、いつもの恰好（旅人の服）から荷物の底に押し込めていた礼服に着替えており、取り回しが悪い輝きの杖と魔導士のマントも短杖サイズに縮めたブラックロッドと動き易い薄手のマントに交換している。

礼服はアバンとフローラの結婚式用に仕立てた代物であり、目立つ装飾を減らし落ち着いた暗緑色に変更した以外はパプニカの法衣と似たようなデザインだが、特別な素材や縫製技術の類は使用してなく防具としては布の服と大差ない。

とりあえず会場内にいる知り合いを探してみたポップは、ホール中央で無数の男子生徒に囲まれたキュルケが苦笑いを浮かべているのを発見し、その視線を辿ると黒いパーティドレスの首元に疾風のバンダナを巻いたタバサが電光石火の早食いを披露しており、更に少し離れた会場の隅で普段と大差ない派手な服装をしたギーシュが心持ち清潔感の増したコルベールと真剣な表情で何やら話し合っていた。

それ以外にも顔と名前を知っている程度の人物は数名いたが、わざわざ自分から話し掛けようと思えるくらい親しい者は忙しそうに給仕をしているシエスタのみであり、仕事の邪魔をするものどうかと思い遠くから小さく手を振る程度に留めている。

「今なら、おっさんがパーティーに参加したがらなかった気持ちを理解できるな」

うんざりした口調で吐き捨てるポップに向けられる様々な感情、恐怖、嘲笑、不快、侮蔑、敵意、嫌悪、興味、忌避、懐疑、大半は不本意ながら元の世界でも何度か経験しているが、ここまで露骨かつ好意的な視線がほとんどない状態なのは初めてであり、ルイズやマルトーに参加するよう言われてなければそのまま踵を返し部屋に戻っていたかも知れない。

弟子の晴れ姿を見るまでは我慢と自身に言い聞かせ人気のないバルコニーへと移動したポップは、途中でシエスタから受け取った肉料

理の皿とワインの壜をホール側の壁にある枠に置いてから生徒の来場を告げる声が響くのを適当に聞き流し、生徒の大半が入場を終えてそろそろ追加の料理を取りに行こうかと考え出した頃になって漸くルイズの番となった。

「ヴァリエール公爵が息女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢のおな～～～り～～～！」

桃色の長髪をバレッタで纏め白いパーティドレスの裾をなびかせ意気揚々と入場するルイズだが、豪華な衣装や人形じみた美貌とは裏腹に勢い込んだ鋭い視線で会場内の人々を威嚇するよう見渡し、今更ながら魅力に気付いて群がろうとしていた男子生徒らが怖じ気付き足を止めてしまっただけでなく、格の違いを見せつけられる形となった女子生徒の大半も居心地悪そうに顔を逸らしており、いつかライバルとして競い合える日が来る事を心待ちにしていたキュルケのみが正面から眼光を受け止め不敵な笑みを浮かべている。

なお、何故か半泣きのモンモランシーに詰め寄られていたギーシュとコルベールは宥めるのに忙しく、少し前まで料理を堪能していたタバサも満足したのか既に姿を消しており、お子様としか見てなかったルイズの大人びた姿に驚いたポップは思わず開いた口に含んでいたワインを垂れ流し、準備を手伝ったシエスタは周囲の反応を見て口元に小さな笑みをこっそり浮かべていた。

妙な緊張感に包まれた会場の空気を変えようと奮起した楽士らが舞踏会（クーラント）の定番曲を演奏し、キュルケは我も我もと群がる男子生徒を押し退けルイズの下へ行こうとしていたが、何とかモンモランシーを落ち着かせたギーシュがダンスを申し込んで了承されたのを皮切りに、進行方向で何組かの男女が次々と踊り始めたのを見て今日は無理だと切り替える。

バルコニーにポップがいるとシエスタから聞いたルイズは、パーティー開始直後に公爵令嬢が抜け出すのもどうかと思い会場内をお義理程度に歩き回ってみたが、誰からもダンスを申し込まれるどころか視線すら合わせられなかった。

＊

「せっかくのパーティーだってのにこんなとこ来てて良いのかよ？」
「こんな場所にいるのはお互い様だし、わたしが歓迎されてないのはあんたも見たでしょ？」
　話し掛け易いよう会場内を回ったのに誰からもダンスを申し込まれなくって、おまけに挨拶どころか視線も合わせられないまま除け者にされるとか、こんな居心地の悪いパーティーなんてこっちから願い下げよ！」
　どんな顔をして良いか分からないまま無難な言葉を掛けるポップに対し、不機嫌な表情を隠さず投げ遣りな口調で吐き捨てたルイズは、いつもと違い腹立ち紛れの癇癪を起して切れ散らかしたり落ち込むと言った気配はないが、壁際に置かれていたワインを引っ掴みマナーなど知るかとばかりにラッパ飲みする。
「歓迎されてないって言うが、お前さんはちょいと頑固で思い込みの強い部分はあってもお世辞抜きに頭が良くって努力家な上に家柄も凄くて嫌う要素はないと思うし、今でも可愛いけど将来はカトレアさんみたいな美人に成長するだろう事は請け合いなんだが、こっちの貴族は魔法が使えないってだけでこんなに陰湿な真似をするとか神経を疑う連中ばかりだな」
「そんな風に面と向かって褒められると少し照れるわね。
　でも残念、トリステイン王国ではどんなに他の分野で優れていようと魔法を使えなければ、それだけで欠陥品の烙印を押されるのよ。
　だけど今のわたしは魔法を使えるようになっただけじゃなくて暗黒闘気って他の連中にはない力があるし、何よりあんたが言ってたちいねえさまを治療する薬に必要な材料を手に入れる為にもこんな事で落ち込んでいる場合じゃないわ！」
　何とか励まそうとするポップに皮肉気な笑みと口調で答えるルイズだが、内心を吐露している途中で自分には病弱な姉を治療すると言う大きな目標があったのだと思い返し、こんな所で折れたり腐っている場合じゃないと決意を改めたのと同時に、フーケ撃退や宝物の奪還

で学院の人々から受け入れられるかも知れないと思っていた事に気付いた。
とは言え、皆から拒絶された時点で残り火にも等しかった思いは消え失せており、かと言って燃えるような怒りや凍える絶望が沸き上がるでもなく、頑張っても埋められない溝があるのだと奇妙に凪いだ心で受け入れたルイズは、小さく息を吐いてから面食らった様子のポップに向き直る。
「ありがとう、あんたがわたしの使い魔で良かった。
使い魔召喚の儀であんたを召喚する前のわたしは、ゼロのルイズと馬鹿にする奴らとそれに癇癪を起すくらいしかできない自分が大嫌いで、いつか魔法を使えるようになったらちいねえさまを治したいとか思ってたくせに夢を叶える為の努力を無駄と諦め投げ出しちゃってたし、我が事ながら格好悪いと思うけどそんな情けなくてどうしようもない落ちこぼれだったのよ。
例えどれだけ凄い幻獣や竜種だろうと召喚に応えてくれなきゃ無意味だし、そこらの動物とか平民が召喚されてたら爆発で死んじゃってたかも知れないだけじゃなく、わたしは落ちこぼれのままでちいねえさまの病気が治る可能性も「止してくれ！」っていきなりどうしたの？」
「……前にも言ったが、俺はそんな褒められるような奴じゃねぇんだよ」
穏やかな口調で感謝の気持ちを述べるルイズの言葉に割り込み叫んだポップは、陰鬱な表情で顔を左右に振りつつ嘆息してから絞り出すような小声で告げた後、胸元から青く透き通った涙滴形の小さな宝石を細い鎖で留めたペンダントを取り出した。
「これはアバンの印、心の力に応じて光る効果があるお守りみたいな代物でな。
以前の俺は何の疑いもなく光らせられたんだが、少し前に相棒の故郷を襲った連中を怒りに任せて半殺しにした上にアジトもぶっ潰しちまって、そしたらどうやって印を光らせてたのか分らなくなって、何とかしようにも試そうとするだけで変な汗と震えが止まらなく

なったんだ。
　お前さんに色々と偉そうな説教を垂れてたが、言ってる本人は自分を信じられずにいる臆病者だと知ってがっかりしたかい？」
「別に、わたしは自分の使い魔が臆病者だからって幻滅なんてしないし、ペンダントが光るかどうかはあんたの問題だからそんなの興味ないわ」
　許されざる過去を懺悔する咎人のような悲壮感が漂うポップに対し、途中までは興味深そうだった表情を徐々に顰め最後に不快そうな口調で突き放すルイズ、追加の料理を持って来たは良いが割り込める雰囲気じゃないと自分に言い訳して邪魔にならない位置から見守っていたシエスタは、ここまでの流れを無視した告白と塩対応に感動で泣き出す寸前から思わず真顔になる。
「興味ないって、俺からしたら大問題なのに手厳しいな」
「これでもあれやこれやと下世話な質問をしない程度には気遣っているのよ。
　あんたの過去を追及したってわたしには何の得もないって言うか、ご主人様に褒められてるんだから素直に感謝するのが従者の道理、ドットとは言えわたしが魔法を使えるようになって、ちいねえさまの健康状態が良くなったのは間違いなくあんたの手柄、それに契約した時点であんたがわたしの使い魔で家庭教師なのは間違いないし、自分には資格がないとか言い訳して逃げたりするのは絶対に許さないんだからね！」
「……まぁ、約束しといて逃げるのは最低野郎のやる事だからな。
　そんじゃ辛気臭い話はこれまで、今夜はせっかくのダンスパーティーなんだし楽しまないのは損ってもんだ。
　コホンッ、宜しければ私奴（わたくしめ）と一曲お付き合い願えませんかレディ？」
「良くってよジェントルマン、わたしがリードするからステップを合わせなさいな」
　ぼやき口調の掛け合いから一転、咳払いしてから跪き気取った台詞を述べたポップが差し伸ばした手を取り不敵に微笑み了承したルイ

ズは、会場内から聞こえる音楽に合わせて優雅に踊り出す。
「何だか思ってたのと違うけどこれはこれであり……なんでしょうか？」
首を傾げるシエスタ、口調こそ懐疑的ながら月明かりの下で踊るルイズとポップを見守る視線は優しく、慈愛の情に満ちていた。